

令和4年度

障害者等による
文化芸術活動推進事業
事例集

はじめに

文化庁では、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」に基づく「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」や「文化芸術基本法」に基づく「文化芸術推進基本計画」を踏まえ、鑑賞や創造の機会の拡大や作品等の発表機会の確保など、文化芸術による共生社会の推進に関する施策の総合的かつ計画的な推進に取り組んでいます。令和5年度から第2期の計画期間が始まった両計画では、障害者等による幅広い文化芸術活動の推進や、障害の有無等にかかわらず誰もが文化芸術に親しみ、多様な活動に参加する機会の促進、地域における推進体制の構築に取り組むこととされています。

令和元年度から始まった「障害者等による文化芸術活動推進事業」では、両計画に基づく施策を国として着実に推進していくため、障害者等による文化芸術の鑑賞や創造機会の拡大、発表機会の確保に係る先導的・試行的な取組、支援人材の育成、文化芸術へのアクセスの改善・鑑賞サポート等、共生社会を推進するための様々な取組を、各団体等に委託し、実施しているところです。

この度、令和4年度の本事業における各団体等の皆様の創意工夫による取組の成果について、関係者間で共有し、更に各取組の改善に繋げていただくため、事例集としてとりまとめました。本事例集が、共生社会の実現に向けて、障害の有無等にかかわらず誰もが文化芸術に触れ、その豊かさを享受する活動が一層広がる一助となることを願っております。

文化庁参事官(生活文化創造担当)

【参考】

障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画（第2期）（令和5年3月策定）
（計画期間：令和5年度～令和9年度）

(URL:https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/shogaisha_bunkageijutsu/1415475.html)



01	「文化の扉を開こう!」～障害児の文化体験活動と支援人材の育成～ 公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会	04
02	障害のある子どものための多感覚演劇の上演および、舞台芸術鑑賞を通じた交流活動のためのインクルーシブな芸術祭開催事業 NPO 法人アートワークショップすんぷちよ	06
03	「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」2022 一般社団法人 MMIX Lab(媒体融合 Lab)	08
04	日本からマレーシア、アジア太平洋へ～認知症患者・高齢者と介護者をつくる「アートのような、ケアのような《とつとつダンス》」 一般社団法人 torindo	10
05	誰でもコンサート2022 ～ Over The Border ～ 公益財団法人和光市文化振興公社	12
06	「ユニバーサル・アート」が花咲くまちづくり!～輝く共生社会実現に向けて～ 特定非営利活動法人いちかわ市民文化ネットワーク	14
07	～いつでも、だれでも、どこへでも～『ミュージアム・アクセス・センター』設立事業 特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン	16
08	障害者による文化芸術活動の推進に関する基本計画にかかる調査 株式会社ニッセイ基礎研究所	18
09	声の力プロジェクト 株式会社朝日新聞社	20
10	多様性を育むダンス&美術プロジェクト——障害のあるアーティストの発掘&育成、ファシリテーター育成、及び、発表の場づくり クリエイティブ・アート実行委員会	22
11	バレエによるインクルージョン促進事業 公益財団法人スターダンサーズ・バレエ団	24
12	スクランブル・ダンスプロジェクト ワークショップ&公演事業 NPO法人 LAND FES	26
13	社会と知的障がい者施設を演劇でつなぎ地域のプラットフォームをつくる事業 一般社団法人日本演出者協会	28
14	やってみようプロジェクト 公益社団法人日本劇団協議会	30
15	障害者等による文化施設へのアクセス改善・鑑賞サポートの取組 Palabra 株式会社	32
16	プロの音楽家を介したインクルーシブ体験と地域ネットワークの構築 公益財団法人新日本フィルハーモニー交響楽団	34
17	みんなの音楽会 鶴木絵里&中川賢一 バリアフリーコンサート サントリーパブリシティサービス株式会社	36
18	国際芸術祭実施に向けてのろう者の芸術活動推進事業 2022(副題: 育成×手話×芸術プロジェクト2022) 社会福祉法人トット基金日本ろう者劇団	38
19	舞台手話通訳者の人材育成および実践普及、観劇サポート啓発 特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク (TA-net)	40
20	障害のある子供たちの表現力を引き出す、芸術の鑑賞体験と表現のインスピレーションプログラム 特定非営利活動法人アーツインシアティヴトウキョウ	42
21	キネコ・ホスピタルプロジェクト2022 一般社団法人キネコ・フィルム	44
22	新国立劇場主催演劇公演等における観劇サポート 公益財団法人新国立劇場運営財団	46
23	障害者等の文化芸術で紡ぐ多種多様な人が交わる豊かな街づくり事業 社会福祉法人愛成会	48
24	社会的養護のもとにある障害児等による地域間交流から生まれるパフォーマンス作品の創作と発表 特定非営利活動法人芸術家と子どもたち	50

25	アルテ・エ・サルデー「マラー/サド」～世界各地の精神科病院と表現活動をつなげるプロジェクト～ 特定非営利活動法人東京ソテリア	52
26	ホスピタルシアタープロジェクト2022 ーすべての子どもたちと家族のための多感覚演劇の上演ならびに社会的認知度の向上 特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク	54
27	文化芸術創作活動と鑑賞を通じた多様性理解の促進と障害のあるトップレベルのパフォーマーを発掘育成するための取組 認定特定非営利活動法人スローレーベル	56
28	見ル 聞ク 感じル みんなの対話型鑑賞会 公益財団法人横浜市芸術文化振興財団(横浜市民ギャラリーあざみ野)	58
29	高齢ろう者×アートプロジェクト2022 公益財団法人現代人形劇センター	60
30	熊川宿若狭美術館を拠点とする芸術文化推進事業 特定非営利活動法人若狭美&B ネット	62
31	「表現未満、プロジェクト」～共生社会実現のための人づくり・場づくり～ 特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ	64
32	みんなでつくる「ぐるりまるごと劇場」プロジェクト 社会福祉法人グロー	66
33	公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業 一般社団法人 HAPS	68
34	障がいのある児童や成人の身体的芸術活動(ブレイクダンス等)の創造と発表の機会を確保・充実させる取り組み 日本アダプテッドブレイン協会	70
35	舞台芸術鑑賞サービス ショーケース&フォーラム 一般社団法人日本障害者舞台芸術協働機構	72
36	日本センチュリー交響楽団 特別支援学校コンサート 公益財団法人日本センチュリー交響楽団	74
37	「こんにちは、共生社会(ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ)」 特定非営利活動法人ダンスボックス	76
38	Art for Well-being 心身機能の変化に向きあう文化芸術活動の継続支援と社会連携 一般財団法人たんぼの家	78
39	ニュートラの学校: 福祉と伝統工芸をつなぐ人材育成と仕組みづくり 一般社団法人たんぼの家	80
40	障がいのある方のアート活動の推進と発掘・発信事業 一般社団法人アーツスペースからふる	82
41	地域と共につくる島根インクルーシブシアター・プロジェクト2022 公益財団法人しまね文化振興財団	84
42	ぶんかのひろばプロジェクト2022～地域に根差した共生コミュニティづくりの発展をめざして～ 一般社団法人舞台芸術制作室無色透明	86
43	四国・中国・近畿ブロックの重度障害児者を対象とした芸術文化活動「訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学」 国立大学法人愛媛大学	88
44	精神障がいのある人の表現活動促進事業 NPO 法人シアターネットワークえひめ	90
45	共生社会へチャレンジ IN FUKUOKA 特定非営利活動法人アートマネジメントセンター福岡	92
46	パーキンソン病患者によるダンス活動の普及事業～認知度UP編 一般社団法人パラカダンス	94
47	音楽体験を通じた不登校児童生徒の社会的接点を作る音楽プログラムの開発と実践、及びその検証 一般社団法人楽友協会おきなわ	96
48	ゆいまる ミュージックプロジェクト 一般社団法人琉球フィルハーモニック	98

『文化の扉を開こう!』 ～障害児の文化体験活動と支援人材の育成～

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会

所在地：北海道札幌市

事業URL: <https://koguyama.jp/>

Outline

事業概要

共生社会における文化芸術を活用した社会参加機会の拡充、養護学校、特別支援学級での文化体験機会の拡充、共に作品を創ることでの相互理解や寛容な社会の形成を目指しました。表現する楽しさ、共同で創作する面白さを体感し、子どもたちの表現力や他者とのコミュニケーション力を引き出しています。また、思うように体を動かしたり、見る、聞く、話すのが難しい子どもたちに向けて、人形の動きや鳴り物に実際に触れ、人形芝居の臨場感を味わい、自分と外の世界のつながりを認識できる機会を作り、外部と関わる力を引き出していました。

本事業で実施した内容

人形劇体験プログラム

開催日：2022年9月28日～2023年3月3日

会場名：札幌市立元町北小学校

対象：札幌市立元町北小学校特別支援学級 小学3年生～5年生

参加人数：11名※定員無し／参加費：無料

- 実施内容

学校教育現場と連携し、地域で活動するアマチュア劇団を派遣し、人形劇鑑賞の他、学校での人形劇の作品づくりに取り組みました。身体を使った表現あそび、廃材や段ボール等を自由に使用し、協力しながら作品創造を楽しむプログラムを行い、最終回には、保護者や学校関係者向けの発表会を開催しました。コロナウイルスやインフルエンザの流行によって活動期間が中断することもありましたが、子どもたちはこの事業に熱心に取り組み、発表を心待ちにしていました。自分たちで創作した人形劇にふさわしい効果音を選び、表現力を向上させるために熟考を重ね、保護者や他の生徒たちの前で自信を持って発表しました。



人形浄瑠璃ワークショップの様子

人形浄瑠璃ワークショップ

開催日：2022年9月8日～2023年1月31日(全3回)

会場名：札幌市こどもの劇場やまびこ座

札幌市立北翔養護学校

対象：札幌市立北翔養護学校 中等部・高等部

参加人数：8名※定員無し／参加費：無料

- 実施内容

視力があり、手の不自由な重度障害のある生徒を対象に、音・雰囲気を楽しめる日本の伝統芸能「人形浄瑠璃」の体験ワークショップを開催しました。ホールでの人形浄瑠璃「二人三番叟」の観劇の他、人形を近くで見ながら人形の動かし方の解説を受けたり、舞台上で使う鳴物（鈴や太鼓）に触れられる機会を設けました。舞台の上で動く人形に最初は緊張したような表情を見せていましたが、舞台から目をそらすことなく真剣に観てくれていました。また、人形が子どもたちの近くに行くとコミュニケーションを取ると、笑顔になる様子が垣間見られました。

研修

開催日：2022年12月6日(水)～7日(木)

会場名：札幌市こども人形劇場こぐま座

対象：スタッフ、支援団体(劇団員)

参加人数：30名／参加費：無料

- 実施内容

「障害の理解と支援」を議題に、専門講師をお招きして研修を実施しました。研修にはスタッフや支援者が参加し、「①障害ってなあに?」「②発達障害(神経発達症)の理解と対応」「③具体的な支援の方法」を考え、グループ討論や発表(交流)を交えながら進行していきました。支援に関わる方々が抱える課題等を共有し合うことで、今後の活動に活かしていきます。



本事業で得られた成果

人形劇創作活動を通じて表現する楽しさ、可能性は無限大

決められた台本はなく、それぞれのイメージやアイデアを發揮し、ときには仲間と協力しお話の場を膨らませながら表現する楽しさを実践しました。子どもたちは喜びを体いっぱい表現し、学び、異年齢交流を通して共に創り出す可能性を感じられるプログラムとなりました。障害の特性上、仲間と相談すること、意見をまとめることに苦戦した面もありましたが、個々の活動だけでなく、協力し合うことで生まれる達成感も味わうことができ、心も体も解放されたと言えます。実施に向けては、コロナ禍で校外学習や外部の人との接触がなくなっていたことで、なんとか子どもたちの体験機会を作りたいという先生たちの強い想いを受けて

実現できました。子どもたちに豊かな体験の機会を提供できたこと、また、今回の活動を通し、保護者や学校教職員の方たちの理解や信頼を得られたことは今後の活動につながる成果になったと感じています。様々な環境に生まれた子どもたちが、それぞれの場所で幸福を追求し、自分らしく生きることができると目指すために、文化体験の場の創出は不可欠だと考えます。この活動がさらに多くの子どもたちの元に届くよう、普及に努めたいと思います。



人形浄瑠璃ワークショップの様子

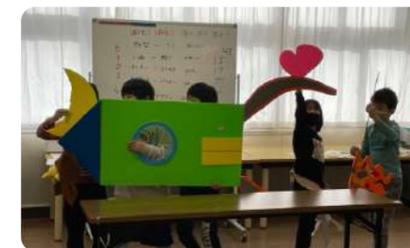


スタッフ研修の様子

つなぐ・つながるための土壌づくり(支援人材の育成)

新たな試みのため、学校教育現場と打ち合わせを重ね、新たな協力体制を築くことができました。また、プログラムを実施するにあたり、市内で活動する様々なアーティストの協力を得ることにより、様々な環境にある子どもたちの実情や自分たちが取り組む文化活動の意義を改めて感じるとともに、障害のあるなしに関わらず、共に創作することによって生まれる価値を実感しました。今後も協働して取り組むことで、生まれる支援人材の輪を広げること、そして障害のある

人たちと学校、芸術文化関係者などをつなぎ、未来を切り拓くためのネットワークの構築を目指したいと考えています。



人形劇体験プログラムの様子



人形劇体験プログラムの様子

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

50年近く劇場運営をしてきたことで培ってきた人材育成を根幹に、子どもから大人まで観劇できる人形劇、児童劇等を柱に据えた事業展開から得られたノウハウを活かしました。また、劇場で育成する人形

劇団等のアーティストの協力を得ることにより、文化を通じて誰もがより多くの選択肢の中から、自分らしく生きることを選べるようにサポートすることができました。

事業名 障害のある子どものための多感覚演劇の上演および、
舞台芸術鑑賞を通じた交流活動のための
インクルーシブな芸術祭開催事業

団体名 NPO法人アートワークショップすんぷちよ
所在地：宮城県仙台市
団体URL: <http://sun-pucho.com/> 事業URL: <http://sun-pucho.com/flatfes>

Outline

事業概要

宮城野区文化センターと共催で開催した「障害者を含め多様な人が楽しめる芸術祭」に向けて、障害児受け入れに関する研修を、芸術祭関係者、宮城野区文化センター職員、公立文化施設職員を対象に実施しました。また、重度障害児、自閉症児を対象としたコロナ禍でも安心して観劇できる多感覚演劇を継続的に上演し、言葉がわからなくても五感を使って楽しめる参加型の演劇を上演しました。

本事業で実施した内容

障害児者受け入れに関する研修

開催日：2022年8月24日
会場名：宮城野区文化センター
講師：鈴木京子氏
(国際障害者交流センター ビッグ・アイ)
参加対象者：市内公立文化施設職員等
参加人数：33名／参加費：無料

- 実施内容

芸術祭開催のおよそ1ヶ月前に芸術祭関係者、スタッフ、公立文化施設職員を対象に障害者対応研修（白杖体験、障害の社会モデルなどのセミナー）を実施し、ノウハウの共有を行いました。

障害のある子どものための多感覚演劇の創作と上演

作品タイトル：「フェスタ!」
開催期間：2022年9月17～18日
開催場所：宮城野区文化センター
出演：渋谷裕子、金子まき、佐々木大喜、笠田一成
対象：障害のある子どもとその家族各回8組定員、3ステージ上演
参加人数：親子24組、大人30名

- 実施内容

通常の演劇上演では観劇が難しい障害や病気のある子どもが、安心して観劇できるように上演方法や客席、演出に至るまで具体的な配慮やアイデアを取り入れた多感覚演劇を上演しました。言葉がわからなくても五感を使って楽しみ、俳優とのインタラクティブなやりとりでコミュニケーションを取れる参加型の演劇にしています。



屋外ステージ観客席の様子

宮城野区子ども舞台芸術祭
フラットシアターフェスティバルの開催

共催：宮城野区文化センター
開催期間：2022年9月17日～18日
観客動員：のべ700名
上演作品：有料4作品、無料4作品、ほぼ全ての公演が満席

- 上演作品

- ・当団体：多感覚演劇「フェスタ!」
- ・デフ・パペットシアターひとみ：人形劇「一寸法師とお楽しみ交流会」
- ・DIVADLO501 谷口直子：人形劇「きんいろの髪のお姫さま」手話通訳付き 協力：シアター・アクセシビリティ・ネットワーク
- ・てんたん人形劇場：人形劇「たったか」他
- ・ボンクラーズ：親子コンサート
- ・エイブルアートジャパン：「みんなでつくるよ広場の人形劇」
- ・宮城県障害者福祉センター：視覚障害者と光のない世界を歩く体験型シアター「まっくらさんぼみち」
- ・ばたもち堂：大道芸



本事業で得られた成果

公立文化施設との共催で、障害のある方々を含めた
多様な観客の対応ノウハウを共有

2022年度の事業では「障害のある方のアクセシビリティ対応研修」を開催し、芸術祭事務局スタッフ、テクニカルスタッフだけでなく共催パートナーである公立文化施設の職員、及び同じ財団で他の施設の職員などが参加しました。前半の白杖体験では、実際に芸術祭の会場となる文化センター内を2人1組になり、

目隠しをした状態で白杖を持ち歩くなど、ガイド歩行の体験を行いました。また、後半に実施した研修では障害の「社会モデル」から「文化芸術分野の社会包摂的な取り組み」まで幅広く学ぶことができ、様々なセクターのメンバーが障害のある人の芸術鑑賞について共通認識を持つきっかけとなりました。主に劇場や

音楽ホールなどでのバリアフリー対応は、ハード面・ソフト面と内容は多岐に渡り、コストもかかります。市民団体やノウハウをもった団体を地域資源と捉え、様々なセクターが連携することで、地域全体のバリアフリーを向上していくことができると感じました。

多彩なプログラム、多彩な観客が彩る芸術祭に

児童青少年向けの芸術祭は全国にたくさんありますが、フラットシアターフェスティバルは「インクルーシブ」が前提となるフェスティバルを目指しました。下記が主な取り組みです。障害のある子どもを対象にした多感覚演劇「フェスタ!」の上演や聞こえる人と聞こえない人が共に作る人形劇デフパペットシアター・ひとみ「一寸法師」の上演、シアター・ア

クセシビリティ・ネットワーク様協力のもと実現した舞台手話通訳付きの人形劇「きんいろの髪のお姫さま」の上演、宮城県障害者福祉センターが提供した「まっくらさんぼみち」（完全遮光した部屋を、白杖を頼りに散歩し、様々な感覚に出会う参加型コンテンツ）など、このようなプログラムは「障害のある人に配慮」とも言えますが、自分とは違う感覚を持つ

人の世界を共有しよう、そして体験しよう、というポジティブな見方でコーディネートされました。会場では自然に障害のある人とない人が「いっしょ」に演目を観て感動し、その気持ちを伝え合う姿がありました。インクルーシブな芸術祭として、今後更に展開していきたいと思います。



手話通訳つき上演前アナウンス



多感覚演劇上演の様子



舞台手話通訳付き人形劇「きんいろの髪のお姫さま」

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

チケットの電話予約を担当した公立文化施設の窓口では、受付の際に全員に統一して障害の有無や配慮すべきことがあるかどうかをヒアリングしました。車椅子でご来場されるなど事前に情報を知ることが

できたことや、施設の窓口でそうした対応が実施されたことなど、これらのノウハウをNPO団体のみが抱えるのではなく、共催パートナーと共有する大きな一歩となりました。

Outline

事業概要

様々なメディア（媒体）を融合させ、アートと地域文化を結び、創造的な芸術活動を展開している当法人では、インクルーシブな表現活動を行うアート・インクルージョンの表現者たちをプロデュースしました。また、アート・インクルージョンだけでなく、福祉作業所の障がい者の作品展示、インクルーシブなミュージアムとの連携協働事業ができるネットワーク構築、福祉作業所などとの連携によるポッチャ体験などを実施しました。さらに、賛同者による障がい者とのグッズ開発事業を推進、販売することで工賃向上を図りました。

本事業で実施した内容

「アーティスト・クリエイターの派遣による
障がい者とのワークショップ・グッズ開発協働事業

アート・インクルージョン2022
 (「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」2022)
 開催日：2022年10月1日
 会場名：JR長町駅前広場
 対象：障がい者、障がい者支援NPO、復興公営住宅
 住民、子ども、大学生、一般
 参加人数：700人／参加費：無料

- 実施内容

仙台の福祉サービス事業所を中心に、食品や小物、アクセサリなどのマルシェと連携し行なわれる中、障がいのある表現者の作画による新作Tシャツやトートバックなどのグッズ販売や歌、演奏などのステージ発表なども行われました。アーティスト・門脇篤氏によるアートワークショップ、福祉事業所による「ポッチャ」の対戦交流が実施されました。また、手話通訳者を入れた聴覚障害者対応のステージには、仙台市太白区の新しい区長さんも参加されました。その他、ハンドベル講師による演奏ワークショップを実施し、さらには2023年1月の仙台市太白区文化センターで行われたアート・インクルージョンとの市民参加型プロジェクトでは、大学生ボランティアがワークショップを企画し、インクルーシブ体験による次世代の人材育成を行いました。



交流拠点整備事業「NAAARU」宮城県大崎市鳴子温泉

「アーティストと障がい者」の交流拠点整備及び
ネットワーク構築・展覧会事業

開催日：2022年4月～2023年3月
 会場名：コトのアート研究所(宮城県石巻市)
 NAAARU(宮城県大崎市)
 対象：障がい者、障がい者支援NPO、アーティスト、
 外国人、一般
 参加人数：50人／参加費：無料

- 実施内容

宮城県仙台市青葉区の国際センターでの展示ではアート・インクルージョンだけでなくアート活動を始めた仙台市内の福祉作業所「わらしべ舎」や同市内の「多夢多夢舎」の障がい者の作品展示などもでき、今後の交流連携につながるきっかけとなりました。また四国出身の本団体のアーティスト・パルコキノシタの紹介で四国高知のアート系福祉作業所の作品展などを企画実施している「藁工ミュージアム」とも連携でき、今後連携協働事業ができるネットワーク構築ができました。さらに宮城県石巻市の「コトのアート研究所」内にインクルーシブなアート活動関連の書籍や資料が閲覧できる図書コーナーを設けたり、宮城県大崎市鳴子温泉の古民家ギャラリーでもアーティストや障がいのある表現者の作品展示、ワークショップ、グッズ販売などができる交流拠点整備を外国籍の賛同者などと進めました。



本事業で得られた成果

アーティスト・クリエイターの派遣による
障がい者とのワークショップ・グッズ開発協働事業

魅力的な作品を創っている障がいのある表現者は多いにも関わらず、発表の場は少なく工賃も低い状況です。そのため、アーティストやデザイナーなどのクリエイターを月に2回は派遣しました。また、アート・インクルージョンファクトリーに通う障がい者と作品制作やグッズ開発などを行いました。情報の受発信は毎月SNSなどで行い、コロナ禍で開発した障がいのある表現者の作画を活用した新作のマスクをはじめ、アート

グッズ、ノート、ペン、Tシャツ、小作品のアクセサリなどのマルチプルグッズを展示したり、ワークショップ

などの発表の場で紹介や販売が行われ、障がい者の工賃向上に繋がることができました。



アート系福祉作業所ネットワーク構築事業「わらしべ舎」仙台



グッズ開発事業 仙台 JR長町駅前広場

「アーティストと障がい者」の交流拠点整備及び
ネットワーク構築・展覧会事業

宮城県石巻市の「コトのアート研究所」内や大崎鳴子の古民家ギャラリーを整備し、作品制作やワークショップ、展示、グッズ販売などができる交流拠点として活動できるようにしま



展示ワークショップ事業「アート・インクルージョン2022」仙台 JR長町駅前広場

した。今回はアート・インクルージョンだけでなく、アート活動を始めた仙台市内の福祉作業所「わらしべ舎」や同市内の「多夢多夢舎」の障がい者の作品展示などもでき、今後の交流連携につながるきっかけとなりました。また、四国高知のアート系福祉作業所の作品展などを企画実施している「藁工ミュージアム」とも連携でき、今後の連携協働事業ができるネットワーク構築ができました。さらに、東京渋谷(SPACE ZERO)で開かれた「アーティストと障がい者」の展

覧会では、アーティストと障がいのある表現者の展示として、多様な福祉事業所紹介の表現者の作品を協働で展示しました。

(参加人数：311人／参加費：無料)



アート系講師派遣事業ハンドベルワークショップ「cara*car」仙台 Aiファクトリー

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

本団体メンバーの門脇篤氏が代表理事の一般社団法人アート・インクルージョンや、四国高知のアート系福祉作業所「アートセンター画楽」の作品展などを企画実施している「藁工ミュージアム」との連携により、今後の協働事業ができるネットワーク構築ができました。アート・インクルージョンファクトリー

への派遣事業では、ネットワークを活かしてハンドベル講師による演奏ワークショップも8月から12月まで月1回実施しました。さらに、本団体代表が大学院生にインクルーシブなワークショップ企画を構想、準備、実施するなど、次世代の人材育成につながる取り組みもできました。

事業名 日本からマレーシア、アジア太平洋へ
～認知症患者・高齢者と介護者をつくる
「アートのような、ケアのような《とつとつダンス》」

団体名 一般社団法人 torindo
所在地：埼玉県さいたま市
団体URL: <https://torindo.net/> 事業URL: <https://torindo.net/project/jp-my-totsu2/>

Outline

事業概要

<とつとつダンス>はダンサー・振付家の砂連尾理氏とtorindoが、認知症高齢者・障害者と介護者と共に行うダンスワークショップです。2022年度は、これまで国内で行ってきた活動を、オンライン、そしてマレーシアに広げ実施しました。砂連尾理氏をはじめ、マレーシアで認知症者の音楽療法を研究するカマル・サブラン氏、マレーシアの認知症者、そして介護者、研究者が、オンラインワークショップを重ね、マレーシアで対面でのワークショップ、レクチャー、パフォーマンスを行いました。

本事業で実施した内容

オンラインでの活動

① イントロダクション・トークセッション

開催日：2022年8月14日

対象：主にマレーシア在住の認知症ケアに興味のある方、
介護者の方

参加人数：170名

② ワークショップ（マレーシア）

開催回数：全5回

対象：主にマレーシア在住の認知症ケアに興味のある方、
介護者の方

参加人数：50名

③ ワークショップ（日本）

開催回数：全5回

対象：日本の特別養護老人ホームの認知症入居者、
施設介護士

参加人数：50名

- 実施内容

① マレーシア在住の認知症ケアに興味のある方（医療関係者、看護・介護者、認知症者の家族の方、研究者、アート関係者など）に向けての公開オンライントークセッション。

②③ マレーシアと日本に住む認知症者とその介護者に向けて計10回のオンラインワークショップを行った。

マレーシアでの活動

① マレーシアでの対面ワークショップ&レクチャー

開催日：2022年12月26日、27日、2023年1月2日
会場名：バガン病院・高齢者ケアセンター（バタワース市 / マレーシア）、国立マレーシア科学大学ペナン市 / マレーシア

対象：認知症者の家族の方、介護者、認知症ケアに興味のある方、大学生

参加人数：延べ216名

② Ipoh Healing Arts Festival への参加

開催日：2022年12月29日

会場名：P.O.R.T（イポー市 / マレーシア）

参加人数：延べ201名

- 実施内容

① マレーシア在住の認知症者の家族の方、介護者、および認知症ケアに興味のある方、学生に向けて計3回の対面でのレクチャー、ワークショップ。

② これまでオンラインで行ってきたワークショップを対面でも実施。また、オンラインで日本の認知症者、介護者をつなぎ、日本・マレーシアの認知症者・家族・介護者とともにダンスワークショップを行った。その際の振付を基に、砂連尾理とカマル・サブランによる即興パフォーマンスを野外ステージで上演。

日本での活動

① 2022年度活動報告展示会

開催日：2023年2月25日

会場名：さいたま市文化センター

対象：福祉施設・事業所関係者、アート関係者、認知症ケアに関心のある方

参加人数：延べ122名

② 日本でのワークショップ & 視察

開催日：2023年2月21日～26日

会場名：そんばの家王子神谷（2月21日）、立教大学（2月22日）、デイサービス楽らく（2月24日）他

対象：施設入居者、介護士、大学生

参加人数：延べ50名

- 実施内容

① これまでと今年度の活動内容がわかる映像展示をはじめ、オンラインワークショップライブも実施。今年度の活動を振り返るトークセッションも行った。

② マレーシアメンバーとともに認知症介護における日本での事例を視察し、数か所ではワークショップも実施した。



本事業で得られた成果

アーティストと認知症者・高齢者、介護者による
芸術文化活動をマレーシアをはじめ海外に展開

これまで培ってきたスキルやノウハウをもとに、日本・マレーシアの認知症患者・高齢者と介護者とともにダンスと音楽のワークショップ、それをもとにした創作発表を行い、その過程で、オンラインを通じて日本とマレーシアの認知症患者・高齢者が交流し、日本とマレーシアの介護者がそれぞれの土地に赴いて交流しま

した。現地でのワークショップはマレーシアの高齢者ケアセンター（バタワース市）やアートスペース（イポー市）で行い、作品はイポー国際芸術祭関連事業であるイポー・ヒーリング・フェスティバルで発表し、また国立マレーシア科学大学（USM）芸術学部でも一部を発表しました。また日本では、マレーシアでの作品

発表後、その様子を踏まえた報告展示会を実施しました。日本でtorindoと砂連尾氏が行ってきた障害者等（認知症高齢者・身体障害者）による文化芸術活動を、記録映像（多言語字幕付き）を通じて、海外のアーティストや研究者、福祉施設・大学とともに拡充し、広く海外に情報発信しました。

高齢化や認知症についての相互理解を深める

日本は現在総人口の30%弱が高齢者であり、その6人に1人が認知症有症者である「超高齢社会」であり、高齢化や認知症における「先進国」でもあります。認知症者そのものの存在や生き方・多様な価値を認め、包摂的な環境を文化芸術活動によって推進する共生社会の在り方は、認知症を治療対象ととらえる向きが強

く、在宅での家族による介護が多いマレーシアにとっては新しい試みであり、ワークショップや作品発表の場でも多くの参加者から熱心な質問が絶えず寄せられ、高い期待を感じることとなりました。また、これまで日本の特別養護老人ホーム入居者を中心に

中で行われているマレーシアの認知症ケアの実情を、認知症者や介護者、ご家族から直接聞き取りできたことは多くの刺激や示唆を得ることになり、次年度からの国内外での活動を充実させるアイデアや手立てを得ることができました。



とつとつダンスの様子



とつとつダンスの様子



とつとつダンスの様子

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

高齢認知症者にワークショップ参加の前後でどのような変化や気づきがあるか、高齢認知症と介護者の関係性がどのように変化するかを、マレーシアと日本での違いに留意しながら、介護者への聞き取りから具体的なエピソードの抽出を行いました。また

映像監督として、筋ジストロフィーによる電動車椅子ユーザーである映像作家・石田智哉氏を起用し、多様な視点での作品制作を試みました。作品の公開や情報発信を、日本語、英語・中国語・マレーシア語などの多言語で行い世界へ発信しました。

Outline

事業概要

和光市の放課後等デイサービス「白子ほのぼの」に所属する障害のある子どもたちを中心に合唱団を結成し、活動への参加を希望する子どもは障害のあるなしは問わず、受け入れを行いました。公演に向けた合唱練習を重ね、和光市民文化センターと彩の国さいたま芸術劇場で開催されたコンサートへ出演した活動を通じ、交流の場と居場所づくりを行うと同時に演奏活動による社会参加を促進しました。国境だけでなく様々な垣根を越えた共生社会実現のための事業を目指しています。

本事業で実施した内容

合唱練習

開催日：2022年5月～2023年3月

会場名：和光市民文化センターサンアゼリア企画展示室
ほか

参加人数：のべ116名／参加費：無料

誰でもコンサート2022～Over The Border～

開催日：2022年6月25日(土)

会場名：和光市民文化センターサンアゼリア大ホール

参加人数：29名(公演出演者)※参加費無料

来場者数：264名

入場料：一般 1,200円

障害者 1,000円

※介助者1名まで無料

子ども(小学生まで)500円

※2歳以下のお子様は膝上無料

- 実施内容

地域の若手アーティストを起用したコンサートのオープニングに出演しました。『ありがとうの花』『にじ』、共生を学ぶ番組「NHK あおきいろ」のテーマソング『ツバメ』を披露し、プロとの共演を行いました。



日韓交流コンサート出演の様子

日韓の障害者、健常者アーティストによる音楽プロジェクト

平和のリボン 一緒に歩もう!へ出演

開催日：2022年9月22日(木)

会場名：彩の国さいたま芸術劇場小ホール

参加人数：12名(公演出演者)※参加費無料

来場者数：204名

- 実施内容

公演に出演するとともに韓国の障害者演奏団体である J art Ensemble や全国から集まった他団体との交流を深めました。『にじ』、共生を学ぶ番組「NHK あおきいろ」のテーマソング『ツバメ』を披露しました。



誰でもコンサート 2022 オープニング出演



誰でもコンサート 2022 エンディング出演



本事業で得られた成果

社会との関わりを持って、
自己肯定感を高めながら自立心や自尊心を育てる

白子ほのぼの合唱団のイメージカラーは、ひまわりの花言葉「あなたは素晴らしい」に由来する黄色で、演奏時にはお揃いのポロシャツを着用しています。放課後等デイサービスの職員や保護者によるサポートを受けながら、子どもたちが中心となり自主性を持って活動しています。コンサートやイベント等で歌う曲も話し合っ決定し、本番に向けて練習を行ってきました。大ホールのステージで多くの知らない人の前で演奏する特別な機会が、1年に一度必ずあるということがモチベーション維持に効果があります。多くの方から拍手をいただくことで、もっと練習してプ

ラッシュアップしようとする行動が生まれました。異なる障害のある子どもや障害のない子どもたちが一緒に活動する機会は、普段の生活ではあまりありませんが、合唱活動を通じて相互にサポートし合い、自分の得意な部分(ソロでの歌唱やダンス等)をがんばりました。定期練習と和光市民文化センターサンアゼリアでのコンサートだけでなく、今後は福祉施設への訪問コンサートやイベントへの出演等、さまざまな場所での発表や交流の機会を増やして行くことを考えています。



誰でもコンサートリハーサルの様子



合唱練習の様子

あらゆる立場の人へ向けた初めての劇場体験

合唱参加者や公演来場者から聞き取りを行い、細やかな対応を心がけた結果、今後の事業継続のための成果ともいえる様々なノウハウの蓄積に繋がりました。行った対応は次の通りで「①公演時間を通常のものよりも短く設定」「②チケット代を安価な設定とし、介助者や2歳以下※を無料とするなどより多くの方の来場を可能に」「③ホール客席内の明かりを暗くしない(場内の明るさに配慮)」「④完全

※2歳以下のお子様は膝上無料

な静寂を来場者に求めない(私語NGなどを行わない)」「⑤自由席(出入りの自由だけではなく、落ち着く席を選んで着席)」「⑥車椅子スペースの拡張(ストレッチャーや電動の大型車椅子でも入場できるスペースの確保)」「⑦音量(音量や急な大きな音を出さない等にも注意)」「⑧授乳室やおむつ交換スペースを設営し、男性用トイレにもサンタリーボックスを設置」「⑨随時のコミュニケーション支

援ボードや筆談等による対応」など、職員からも積極的に声かけを行い、お手伝いが必要な時や不安がある時は近くの職員にお気軽にお声かけいただけるように対応を行ってきました。公演の目的や対応についてホームページやチラシにも表記し、来場者の方が相互に思いやりを持って公演を楽しんでいただき、全ての方にとって素敵な思い出となるようご協力をお願いしました。

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

芸術活動や社会活動への参加意欲はあるが、実際の活動参加に結びついていない方が多くいます。そこで、動機付けをこちらが行うことで周囲を巻き込みました。「こういうことをやって欲しい」「困っている」などを周囲に積極的に発信すると助けてくれる人が現れます。子どもたちの伴奏者をどうしようという話

になった時、かつてピアノを弾いていた保護者や10年以上楽器に触れていない職員らが演奏を始め、主要メンバーになりました。また、和光市在住・在勤のアーティストを起用し、子どもたちへの協力も手厚くなり、交流を深められました。

Outline

事業概要

私たちは、障害者芸術文化活動を通して共生文化の創造と交流、賑わいのある街(地域)を生み出すための5ヵ年計画として「ユニバーサル・アートが花咲くまちづくり!」事業に取り組んでいます。2022年度は2年目事業として、シンポジウム、専門講師による身体表現とアートのワークショップ、レクチャー&交流などを通じて、協働ネットワーク「ユニバーサルアート・ネット」を構築しています。そして文化施設とまちなか店舗を成果発表の場とし、芸術と美術の合同イベント「ユニバーサルアート・フェスティバル」を実施しました。

本事業で実施した内容

『演劇ワークショップを楽しんで ハンディキャップのある若者のパフォーマンスを 鑑賞しながら身体表現の可能性について 愉快地愉しく語り合いませんか?』

開催日：2022年5月28日(土)13:00～17:00
会場名：全日警ホール(市川市八幡市民会館)
対象：当事者、文化施設、芸術団体、障害者福祉事業所職員、企業、行政など、活動に興味のある方など誰でも参加自由。
募集定員：50人/参加人数：46人/参加費：1,000円
講師：西海真理氏(俳優、演出家)、齋藤匠氏(NPO法人チャレンジド・フェスティバル理事長)、YURI氏(本名：佐藤悠理 聴覚障害者ファッションモデル)、小松よしあき氏(自閉症スペクトラムお笑い芸人)

- 実施内容

演劇の手法を使った身体表現をシンポジウム参加者全員が体験し、言葉のない世界でのコミュニケーション、自由で開放的な身体の使い方などを体感しました。ハンディキャップのある若者のパフォーマンスの鑑賞や、意見交換会と協働ネットワークの結成を行いました。

『アート&ダンスひょうげんワークショップ ～たのしく自由にカラダとココロをうごかそう～』

・アート①
開催日：2022年10月9日(日)
会場名：市川市立須和田の丘支援学校 講堂会場
募集人数：30人/参加人数：21人/参加費：1,000円
講師：藤田あかね氏(株式会社エーアンドエム)
・ダンス②
開催日：2022年11月23日(水・祝日)
会場名：流山市生涯学習センター 多目的ホール
募集人数：25人/参加人数：13人/参加費：1,000円
講師：安西真幸氏(振付師・ダンス講師)

・ダンス③
開催日：2023年1月29日(日)
会場名：市川市立須和田の丘支援学校 講堂
募集人数：30人/参加人数：30人/参加費：1,000円
講師：安西真幸氏(振付師・ダンス講師)

- 実施内容

ワークショップは「Open The Window～窓のむこうに何が見える?～」をテーマに、コロナ禍であっても表現することの楽しさ、自由さ、開放感を楽しむ時間となりました。できることをたっぷりと、一人ひとりが自由に動き、汗を発散させながら、最後は爆発的な開放感にあふれたパフォーマンスを楽しみました。

『ミラクル・アート展&ミラクルパフォーマンス』

開催日①：2023年1月15日(日)
会場名：流山市生涯学習センター多目的ホール&ロビー
開催日②：2023年2月4日(土)
会場名：市川市文化会館小ホール&ロビー

- 実施内容

市川市とその近郊でアート活動を実施する7つの団体と個人で活動するアーティスト合わせて42人の作品を、2都市の文化会館ロビーと市川市内まちなか展示会場13店舗にて展示を行いました。10月に開催したアートワークショップで生まれた作品もロビーを彩りました。障害のある人たちを中心に構成するパフォーマンス・カンパニー9団体による、ひとりひとりが輝くダンスや音楽のステージパフォーマンスの披露も行いました。ここでは聴覚障害者の方もステージを楽しんで頂けるように手話通訳も取り入れ、一部の会場ではライブ配信も行い、遠隔でも楽しんでいただけました。アンケートでは次回を期待する意見が多く寄せられる成果も得られました。



本事業で得られた成果

表現活動はどんな人生を開いていけるか? 誰だって”道”を究めたい!

「聴覚障害者ファッションモデル」「自閉症スペクトラムお笑い芸人」。ハンディキャップを抱えながらも表現活動の夢を追いかけ、実践している若者のパフォーマンスを鑑賞しまし

た。その後の意見交換会でも参加者から多くの質問や、抱える課題についての発言など、活発な意見が交わされました。社会包摂につながるアート&プレイの意義や、より質の高い社

会包摂的なアート活動の展開を目指すことの必要性について具体的に話し合うことができました。

創造の喜びと楽しさの実体験は、 共生文化社会への有効なアプローチ

身体表現&アート体験ワークショップの実践的な試みは、当事者だけでなく、支援者、文化施設職員なども一緒に体験することで、障害者等の表現活動へのアプローチの仕方が深

まり、アートやダンス経験のない方でも表現することの楽しみ、声かけの視点、面白さの引き出し方などを体験することができました。そして、この創造の喜びを“実感”する経験は、

文化活動への主体性を生み出し、参加する意欲を触発し、多様な共存を可能にする創造的な手法となると感じました。

「表現する」+「見てもらう」機会は自己肯定感を高め、 そして人や街を元気にする!

『ミラクル・アート展&ミラクル・パフォーマンス』では、身体表現活動とアート作品の発表と鑑賞の機会を創出することで、障害者の達成感や自己肯定感を高め、社会との豊かな関係を築く第一歩となることを目指しました。さらに公的文化施設を始



言葉のない世界で、コミュニケーションを楽しむ「演劇ワークショップ」

め、地域の市民芸術文化活動の在り方を検証し直すことで、共生文化芸術を中心とした理想的な街づくりへの展望が期待できると感じました。



「アートワークショップ」では自分の描いた作品の説明を熱心に行っています



パフォーマンス会場のロビーではアート展を開催

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

私たちは、2005年以来、障害のある子どもや青年を中心とした舞台芸術活動「チャレンジド・ミュージカル」の公演を続け、「創造する楽しさと人間的成長」を享受してきました。そして、美術や工芸の分野で活躍する人たちと出会うことで「他分野の方々と協働する面白さ」を知り、また各地の文化振興財

団や文化施設の方々とは「地域における文化施設の存在意義」についての議論も深めてきました。「フィールドを超えた交流による成果は大きい」と実感できれば、どんどん協働ネットワークを広げていけると確信しています。

事業名 ~いつでも、だれでも、どこへでも~ 『ミュージアム・アクセス・センター』設立事業

団体名 特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン
所在地：東京都千代田区
団体URL: <https://www.ableart.org/> 事業URL: <https://minmi.ableart.org/>

Outline

事業概要

障害のある人がいつでも、だれでも、どこへでも、健常者と同じようにミュージアムを訪問でき、かつ豊かな鑑賞体験を保障するためのサービスを提供する「ミュージアム・アクセス・センター」(みんなでミュージアム/以下:みんな)を設立に向け取り組みました。2021年度の準備期間を経て、2022年度は試験的実践期として事業モデルを東京・埼玉・京都・宮城にて実施しました。併せてセンターの基盤整備に取り組むことで、3年目以降の全国展開へのネットワークを作り、全国のミュージアムにおけるアクセシビリティの改善と向上を目指しました。

本事業で実施した内容

美術館との実践型協働を通じた 人材育成プログラムの実施と開発

「美術館と当事者コミュニティとの実践型協働」
ミュージアムが抱える状況に左右されず、障害のある人の「ミュージアムに行きたい」「プログラム等に参加したい」を実現するため、当事者コミュニティとともに、アクセシブルな環境形成や鑑賞を楽しむ方法について検証、記録しました。みんなに関心を持つ人たちが実践に協力し、今後の協働の可能性が生まれました。

「コーディネーター・パートナーの役割・育成についての協議」
ミュージアム・アクセス・コーディネーターとパートナーの人材育成事業のため、専門家を招き、その人材像を明らかにする議論を行い、評価・記録方法について協議し、汎用性の高い人材像と人材育成のための指標作りに着手しました。

基盤整備に関する取り組み

・「相談窓口の設置と対応」
相談窓口を開設し、電話・メール・オンライン・来所・対面にて対応しました。また、本事業の公式ウェブサイトやSNSによる情報発信、学びと交流のオンラインコミュニティ「みんなの"わ"」の活動により、ミュージアム・大学・メディアからの問い合わせが増えました。取り組みが徐々に社会に知られるようになりました。(写真①)

・「市民の人材育成を視野に入れた交流と学びの場の創出」
ミュージアム・アクセスに関心を持つ多様な人たちの学びと交流のオンラインコミュニティ「みんなの"わ"」を開催しました。みんなに集う人たちが各地域で、共に関わら合う小さな一つひとつの実践を、共有・可視化することを通して、学び、考える場になりました。(写真②)

ミュージアム・アクセスの ネットワークの必要性に対する提言活動

ミュージアムと市民が対話できる場や仕組みとして、類似団体・協議会との連携を目指す、ネットワークの働きかけを行います。9月に、厚生労働省と文化庁が設置する「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」の改定に向けての有識者会議においてヒアリング対象となったため、その場を通じて提案を行いました。実践型協働および人材育成に関する協議を踏まえて、各機関の関係者や専門家とともに意見交換を行っていきました。



東海大学広報メディア学科との授業風景。情報発信を学生の視点で検証し、活動を広く伝えるキャラクター像やSNSを活用した発信方法を考案した。【写真①】



みんなの"わ"第5回で、ゲストからの話題提供をうけ、全体で感想をシェアする時間の様子。全国各地から、幅広い年代の方が参加した。【写真②】



本事業で得られた成果

市民発!ミュージアム・アクセス・センターの機運醸成

市民発、障害当事者とともにつく「ミュージアム・アクセス・センター」は、2021年度の調査と仮説モデルを経て、2022年度は試験的実践に入りました。事業モデルの推進には、たくさんの議論と試行錯誤を伴いましたが、結果、本センターの理念と仕組みのアイデアに強い関心を持つ人たちが集まりました。市民の願いは、共有財産であるミュージアムを体験したい・鑑賞したい・活用したいというシンプルなもの。2年目の実践を

通じて見えてきた、本センターの機能と役割、そしてこのセンターやミュージアムを起点として生まれる人材、すなわちミュージアム・アクセス・コーディネーターならびにパートナーの人材像を、さらに明らかにしながら、3年目はこの事業モデルと人材育成(の場)を全国の仲間へと広げ、実践を増やしていくことを目指します。



せんだいメディアアーツ展覧会「定禅寺パターゴルフ??? 倶楽部!! ~協働と狂騒のダブルボギー(2打オーバー)~」におけるパートナーとの実践の様子 協力:みやぎデフキッズクラブ 撮影:越後谷出

ミュージアムと市民の協働で、ミュージアムが変わる!?

国立のミュージアム、大都市圏のミュージアムには、教育普及およびインクルーシブな取り組みを推進するための中間支援が生まれつつありますが、地方のとりわけ中小のミュージアムには、それがなかなか実現できていないのが現状です。2022年度は、ミュージアム関係者の研修、常設展におけるインクルーシブプログラムの開発と実践、社会包摂を目指した現代アートの展覧会に、アートや鑑賞の体験が少ない障害のある市民の参加を実現する事業など、具体的に取り組むことができました。そこで本センターは、3年目以降、さらなる基盤整備として相談支援の充実をはかり、依頼のあったミュージアムや市民(障害者・支援者・NPO等)

をエンパワーメントする活動に力を入れていきます。また、センターに強い関心をもつ仲間には、その実践を共有し、かつ人材育成モデルの提案を行っていきます。これにより、障害のある多くの人の文化施設への参加の機会が増え、余暇や文化体験が充実しました。ミュージアム側にも、多様な市民を迎えるための経験が蓄積され、社会で必要な社会教育施設としての役割を果たすことができると考えています。



さいたま市立漫画会館におけるコーディネーターとの実践の様子

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

厚生労働省「障害者芸術文化活動普及支援事業」の実践知を応用し、ミュージアム・アクセス・センターという中間支援組織を構築し運営しようとしている点が工夫が挙げられます。これによりNPOとして、地域や行政の枠にとらわれず柔軟な活動

が行えていることやミュージアム関係者や障害福祉関係者とのネットワークにとどまらず、IT関係者や企業との情報交流を行い、今後の協働を模索しています。

障害者による文化芸術活動の推進に関する基本計画にかかる調査

株式会社ニッセイ基礎研究所
所在地：東京都千代田区
団体 URL: <https://www.nli-research.co.jp/>

Outline

事業概要

本事業では、次期の「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」（以下「基本計画」）における、障害者による文化芸術活動の推進に資する文化芸術団体等への調査を行いました。また、施策の推進を図るために国が開催する有識者会議の事務局業務を行いました。具体的には、文化芸術団体等への調査では、音楽、演劇、舞踊など各芸術分野の文化芸術団体を対象としたアンケート調査を行い、有識者会議では、構成員との日程調整、資料の印刷、オンラインでの会議運営、議事録の作成等を行いました。

本事業で実施した内容

文化芸術団体への調査（アンケート調査）

調査期間：2022年12月7日～2023年1月30日
調査方法：メールによる協力依頼、オンライン回答

- 調査対象

公益社団法人日本芸能実演家団体協議会（以下「芸団協」）の正会員団体（70団体）、及び文化庁の支援事業費補助金における事前確認認定団体（以下「認定団体」、47団体）を参照し、各芸術分野の統括団体の傘下団体をアンケート調査の対象としました。当初は舞台芸術系の団体だけでなく、美術分野を含めた個人も対象とすることを想定しましたが、文化庁との協議により、今回の調査では、劇場・音楽堂の主たる利用者として想定されるような文化芸術団体の実演団体を対象とし、個人は対象外としました。

また、芸団協と認定団体による各分野統括団体アンケート調査対象リスト96団体、その傘下に約10団体で約1,000件と当初は対象数を仮定しましたが、調査対象について芸団協に相談したところ、統括団体には舞台技術系の職能団体など必ずしも実演団体だけではないことや、傘下の会員は団体ではなく個人の場合が多いことが判明しました。以上を踏まえて調査対象を絞り込むため、①統括団体に対して傘下の団体へのアンケート調査のメール転送へのご協力の可否の確認、②統括団体から傘下団体へのアンケート調査依頼のメール転送、③統括団体、傘下団体からのアンケートの回収、という手順で進めました。メール転送に協力可能と回答した統括団体は15団体、転送先の件数は1,052件、計1,067団体が調査対象数となりました。

- 調査内容

以下のような項目のアンケート調査を実施しました。
・属性に関する項目
回答者の団体での立場、芸術分野、法人種別、設立年、都道府県、構成員数、福祉について知識や経験のある構成員
・運営その他の項目
団体運営や事業企画について障害者から意見を聞いたことがあるか、法律や計画についての団体内での周知、文化庁事業の認知と興味、厚生労働省事業の認知と興味、文化芸術活動

は成果につながると思うか、障害者による①鑑賞機会の拡大、②創造機会の拡大、③権利や接遇等の研修の実施、障害者を対象とした事業を文化芸術団体等が行うことの意義、今後障害者を対象とした事業を実施するための条件（サポート）、事業を実施することが困難な要因や実施していない理由、障害者による文化芸術活動を推進していくための課題、障害者を対象とした事業を実施することについての意見（自由記述）等

専門家研究会

開催日：2022年10月21日（第1回）
2023年3月9日（第2回）各回2時間程度
実施方法：オンライン

- 実施内容

アンケート調査の実施に際し、専門的な見地から助言を得て、より有効な調査とするため、専門家による研究会を設置しました。専門家については、文化庁と協議しながら障害者の文化芸術活動、文化芸術団体の運営、文化政策などに詳しい4名を選出しました。

有識者会議

開催日：2022年8月2日～12月19日（全4回）
会場：オンライン

- 実施内容

有識者会議の事務局業務は、日程の調整、資料の準備、会議の運営、議事録作成を行いました。オンラインでの開催に際して円滑な議事進行のため、配信会場となる事務局の座席レイアウト、PCの設営・配線、接続およびZoom操作のリハーサルなど会議前日に行いました。また、聴覚に障害のある構成員のためのUDトークや手話通訳等の手配、文化庁アカウントからのYouTube配信とZoomとの連携、YouTube配信の録画、発言時間のタイムキーパーを行いました。会議の議事録は、確認後修正を取りまとめて文化庁、厚生労働省にデータを納めました。



本事業で得られた成果

障害者文化芸術活動に対する文化芸術団体の認識把握と事業に有益なデータ収集

文化庁による美術館・博物館対象の調査(2019年度)、劇場・音楽堂対象の調査(2020年度)を踏まえて、劇場・音楽堂での障害者文化芸術活動の取組に課題が見られることから、劇場・音楽堂の利用者となる舞台芸術系の文化芸術団体

の、障害者の文化芸術活動に対する認識や取組状況を把握しました。特に、鑑賞機会の提供のみならず、創造機会の提供や、障害者の権利や接遇に関する研修の実施状況について、文化芸術団体の実態を把握すると同時に、連携機関や取り

組むための条件（サポート）等について明らかにすることで、次期の基本計画での施策や事業の戦略的な検討に資すると考えます。

有識者会議にて障害当事者の円滑な参加や会議運営での合理的配慮のモデル提示の実現

有識者会議の構成員には様々な障害の当事者が参加していたため、会議の運営では視覚障害者用の点字資料の作成の手配、読み上げソフト用のテキストファイル化、聴覚障害者用のUDトークや手話通訳の手配などの合理的配慮に努めまし

た。視覚と聴覚に障害のある構成員からも多様な視点や知見に基づいた意見をいただくことができました。また、テキストファイル化した会議資料は一般にも公開され、UDトークや手話通訳は会議の傍聴用のYouTubeライブ配信、録画配信

でも画面表示されました。そのことで、文化庁として計画策定を行う会議運営での合理的配慮のあり方のモデルを提示できたと考えます。

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

文化芸術団体へのアンケート調査では、可能な限り調査対象を明確にするために統括団体への転送協力の可否を把握する手順を加えて実施するとともに、ウェブアンケートを活用して効率的に行いました。有識者会議の事務局運営では、各回のオンライン会議での運営や進行上での技術的な課題(座席配

置、PC設営、カメラ・マイク操作など)について、毎回振り返りを行い、次回の改善点を整理、共有し、より円滑な会議進行に努めました。

Outline

事業概要

視覚障害のある高校生たちが声による伝え方の多様性を学び、自分自身の可能性を再発見することを目的としたプロジェクトとして、声の演技の第一人者である人気声優を講師にお招きし、全国の盲学校で特別出張授業を開催しました。声の演技の基礎体験を通じて、子どもたちが気持ちを声にのせる大切さやその方法を学んだり、視覚障害児および晴眼児の高校生を集めた「インクルーシブ集中講座」では、朗読劇を共同で作って相互理解を深めたりと、可能性を広げる取り組みとなりました。また、PODCAST配信番組も制作しています。

本事業で実施した内容

一流のプロ声優による盲学校への特別出張授業……

開催日①：2022年8月29日(月)

会場名：筑波大学附属視覚特別支援学校

参加人数：5名／講師：古川登志夫氏

開催日②：2022年10月4日(火)

会場名：埼玉県立特別支援学校塙保己一学園

参加人数：8名／講師：水田わさび氏

開催日③：2023年2月8日(水)

会場名：北海道札幌視覚支援学校

参加人数：17名／講師：三上枝織氏

- 実施内容

声による伝え方の多様性を学ぶことで、視覚障害児が自分の可能性を再発見することを目的して特別授業を行いました。特別授業ではプロの声優が講師となって、オリジナルの講習を展開しました。例えば、生徒たちは自己紹介などを通じて、自分を表現する手法を学習します。また、呼吸法や発声法、セリフ術、笑う練習、ラジオパーソナリティの台本を使った演技など、さまざまなことを経験しました。



授業が進むにつれて自由にのびのびと演技ができるように

インクルーシブ集中講座……

開催日：2023年1月29日(日)、2月5日(日)、19日(日)

会場名：青二塾／AION studio

参加校：筑波大学附属視覚特別支援学校高等部

筑波大学附属高等学校

参加人数：各校5名ずつ

- 実施内容

視覚障害児と晴眼児の高校生10人による「インクルーシブ集中講座」を開催し、声優の古川登志夫氏、柿沼紫乃氏を講師に招き、課題作品であるオーディオ・ドラマ『ラスボス』（※青二プロダクション提供）の朗読劇に挑戦しました。3日間かけて参加高校生たちがお互いの違いを理解するとともに、作品を作り上げる達成感や表現することの喜びを体感してもらいました。※新型コロナウイルス感染防止対策のため、合宿ではなく集中講座の形式に変更。

- 情報発信

インクルーシブ集中講座で収録したオーディオ・ドラマを、PODCASTで配信。

授業の様子をプロジェクト特設ページ、朝日新聞、声優グランプリを活用して重層的に発信しました。

<https://www.asahi.com/dialog/voice-power/>



本事業で得られた成果

憧れの声優による授業を通じて自分の可能性を再発見

本事業では全国の盲学校を対象に、一流の声優による声の表現の出張授業を行い、生徒たちに「気持ちを声にのせることの大切さやその方法」を学ぶ機会を提供しています。講師の先生方が共通して教えていることは「自分らしさを大切にする」ということです。自分らしさとは何か、それをどうやって声で表現するか、その方法を探求しながら授業が進みます。

はじめは恥ずかしがっていた子どもたちも、次第に伝えてみたい！届けてみたい！と感じるようになり、自由にのびのびと演技ができるようになっていきます。同時に、声によるコミュニケーションの場面では、相手の気持ちや個性を尊重することの大切さにも気づきます。憧れの声優が目の前で授業を行うことは、子どもたちにとって貴重な経験となり、自分の可能性を

再発見する機会にもなります。ある学校ではこの授業に感銘を受け、「視覚障害者が演技の仕事をする上での障害」を明らかにするため、演技に関わる仕事について総合学習の時間を活用して深く調べるようになりました。子どもたちが将来について考えるきっかけにもなっています。

インクルーシブ社会の実現に向けた相互理解の促進

インクルーシブ集中講座では、視覚障害のある高校生と晴眼者である高校生に共同で作品制作に取り組んでもらいます。アニメや声優が好き、という共通のテーマがあり、複数回にわたって共同作業を行うことで、例年最終日にはとても仲が良くなっています。障害の有無に関わらず、お互いを理解しあうようになることは、共生社会創出への大きな一歩であると考えます。また、今の社会全体は、障害者といわゆる健常者が接する機会が極端に少なく、駅のホームドアや点字ブロックの必要性など、視覚障害に対する理解が依然低いままです。まずは、視覚障害がどういった障害

で、普段どのように暮らし、どんなサポートや声掛けが必要なのか、といった基本的なことを、より多くの人が知ることが必要であると考えます。そのため、本事業ではメディアを使った情報発信にも力を入れており、特設サイトには現役の学生記者に取材・執筆してもらったレポートの掲載など、

志の高い学生たちと創るウェブサイトを設置しました。今の社会の担い手はもちろん、これから社会の重要な担い手になる層の視覚障害に対するリテラシー向上に貢献できていると考えています。



自分自身と向き合いながら気持ちを声にのせる



生徒の障害の実態に合わせて教材を用意

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

メイン事業の出張授業に学校および担当の先生が参加しやすいよう、柔軟に対応することが重要であると考えました。学校ごとに、生徒数や生徒の特性・重複障害学級の規模、授業方針が異なるので、希望をうかがいながら、授業をカスタマイズしています。また、先生とのやり取りに重要な授業計画書をあら

かじめ作り、事前に共有することで学校内の申請にかかる先生の負担を軽減し、より先生の協力を得られやすくなりました。授業の教材は、点字化・拡大文字化など、生徒それぞれの障害の実態にあわせてものを準備しました。

事業名 多様性を育むダンス&美術プロジェクト——
障害のあるアーティストの発掘&育成、
ファシリテーター養成、及び、発表の場づくり

団体名 クリエイティブ・アート実行委員会
所在地：東京都港区
団体URL：https://muse-creative-kyo.com/ 事業URL：https://muse-creative-kyo.com/caec/

Outline

事業概要

当委員会は、自らとコミュニティのアイデンティティを同時に表現できる活動を提供し、新しいアートと社会のあり方を探求しています。本事業では、障害のある人達と障害のない人達が異なる創造性を学びあいながら、美術・ダンス事業においてワークショップを実践し、同時にファシリテーター育成を行いました。美術では、西村陽平氏による絵画のワークショップ、そして現代美術家を講師に招き、視覚障害者を中心とした作品制作活動、鑑賞活動、トークイベント、展覧会を開催。ダンス事業では、地方でのワークショップと公演を開催しました。

本事業で実施した内容

絵画ワークショップ PAINTHING

開催日：(前期)2022年6月18日、7月18日、8月6日
(中期)2022年10月1日、16日、11月5日、12月3日
(後期)2022年11月21日、2023年2月4日
会場名：北区文化芸術活動拠点ココキタ 2F アトリエ
定員：各回6~7名程度
対象：障害の有無にかかわらず制作活動を行いたい方、
障害のある人達と創る絵画活動に興味のある大人、
及び指導者。
参加費：障害のある人 2,000円 / 1回
障害のない人 4,500円 / 1回
講師：西村陽平氏

- 実施内容

子どもも大人も、障害のある人もない人も、だれもが参加でき、それぞれがお互いの創造性を触発しあいながら共に作品制作を行うワークショップを開催しました。絵画ワークショップでは現代美術の手法を取り入れ、筆やローラー、木片や竹べらなどいくつもの画材や道具を使いながら、一人ひとりが型にとらわれない新しい表現に挑戦しています。このワークショップの講師を務めるのは、世界的な美術家であり陶芸家でもある西村陽平氏です。長らく盲学校で図工を担当し、視覚障害の子どもたちに造形指導を行うとともに、自らも作者として活動をしてきた第一人者でもある西村氏の指導のもと、インクルーシブな環境での表現活動をどのようにファシリテートしていくかを学ぶ機会となりました。



絵画ワークショップ

造形ワークショップ アッサンブラージュ

開催日：2022年6月25日、7月10日、24日、8月28日
会場名：北区文化芸術活動拠点ココキタ 2F アトリエ
定員：各回7~8名程度
対象：障害の有無にかかわらず制作活動を行いたい方、
障害のある人達と創る絵画活動に興味のある大人、
及び指導者。
参加費：障害のない人(全4回)16,000円
(単発参加4,500円)

- 実施内容

アッサンブラージュとは「組み合わせ」あるいは「寄せ集め」といわれている作品制作の手法のひとつです。ここでは視覚に障害のある方々と共に、従来の絵の具等の画材で平面的画面をつくりつつ、身の回りにある木材やペットボトル、缶といった立体素材や、新聞紙や布などの素材を使い、平面と立体がひとつになった作品制作を行いました。さまざまな素材の声を聞きながら組み合わせ、貼り合わせ、さらに描くことも取り入れて作品を制作しています。長年、多摩美術大学生涯学習センターで「あそびじゅつ」や教育、触る行為の重要性をプログラムにも取り入れてきた海老塚耕一氏による参加者との直接の対話も交えてのワークショップとなりました。



造形ワークショップ海老塚耕一



本事業で得られた成果

障害のあるアーティストの発掘・育成、発表の場づくり

ワークショップを定期開催することで、障害のある人達とない人達が共に活動する場の提供を実現しています。そして、連続して参加いただくことにより、自らの表現を完成させる感覚を参加者が身につけてきました。今年、視覚に障害のある人達を対

象にした観賞プログラムも導入しています。視覚優位の活動が多い世の中で、手で触って美術作品を鑑賞する機会づくりを積極的に行うことで、障害のあるアーティストの育成について多角的に取り組みました。また、社会の意識を変えていくことにつなげる

ため、昨年と同様、障害のある人の質の高い美術作品を紹介する展覧会、障害のあるダンサーを含むカンパニーのダンス公演を行い、プロフェッショナルなアーティストとしての活動を紹介しています。

質の高い指導者(ファシリテーター)の育成と地方へのネットワークづくり

美術、ダンスともに、実際にどのようにワークショップやそれに連なる現場をリードしていくのかという視点で、参加者自らが考えるという実践的側面を強化することを心がけました。コロナウィルス感染症の影響で、地方でのワークショップ開催が難しい現状でしたが、今年、横浜市立

盲学校で、長年障害者との造形活動を行っている海老塚耕一氏を講師に招き、生徒と先生向けにワークショップを開催することができました。さらに現場をサポートしながら、このようなワークショップのファシリテーションや企画制作、運営を希望する人材が増え、これからの世代に実践と現場経験を積んでもらうことができました。



絵画ワークショップ



造形ワークショップ海老塚耕一

また、ヴァンジ彫刻庭園美術館の会場協力のもと実施した触覚を使った鑑賞ワークショップでは、単に視覚障害のある方が作品に触って終わりというプログラムではなく、保坂健二郎氏のファシリテーションの

もとで進めていきました。美術館で率先して触れる活動に取り組んできた学芸員、副館長と視覚障害者の交流、そしてジュリアーノ・ヴァンジという作家が作品に込めた思いや社会的な出来事を共有しながら、鑑賞の場を創出することができました。

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

1990年から一貫して障害のある人やアートに接する機会の少ない人々との活動を行っています。障害のある方々との表現活動に関心があり、実力のあるアーティストに関わってもらうことを一貫して続けることで、参加者の創造力を引き出し、質の高い作品が生み出されることにつながりました。広報では点字チ

ラシを作成し、障害者施設・盲学校に重点的にチラシの配布をするだけでなく、HPをリニューアルして情報をわかりやすく掲示したほか、SNSなどを使って視覚障害のない方にも活動を伝え、関心を持ってもらうことにも力を入れました。

Outline

事業概要

当法人では、「リラックスパフォーマンス」による公演を実践しています。リラックスパフォーマンス（原語：Relaxed Performance）とは、「障害の有無にかかわらず皆と一緒に楽しむ」ことを趣旨とした公演形態です。自閉症やコミュニケーション障害、学習障害などにより通常の劇場環境になじむことが難しい人々やその家族に芸術鑑賞機会を提供するだけでなく、人々の多様性を認め合うインクルーシブな社会の実現にも寄与することが期待されています。

本事業で実施した内容

リラックスパフォーマンス富山公演

演目「バレエのお話と小品集」&「シンデレラ」（全1幕）
開催日：2022年11月3日（木）※祝日
会場名：黒部市国際文化センター コラーレ
参加費：有（一般 3,000 円／子ども 1,000 円）
※子どもは4歳～高校生。4歳未満入場不可



「シンデレラ」より

リラックスパフォーマンス神奈川公演

演目：「シンデレラ」（全2幕）
開催日：2023年2月4日（土）
会場名：神奈川県民ホール 大ホール
参加費：有（一般 4,000 円／子ども 2,000 円）
※子どもは4歳～高校生。4歳未満入場不可



解説の様子

実施内容

【富山公演】
「バレエのお話と小品集」&「シンデレラ」（全1幕）
【神奈川公演】
「シンデレラ」（全2幕）

普通のバレエ公演より少しだけリラックスした雰囲気の中、自閉症やADHDの症状などにより、ちょっとした支えを必要とする方々や、バレエ鑑賞が初めての方も、構えずにリラックスして鑑賞を楽しんでいただきました。



リラックスパフォーマンスのWEBサイト



本事業で得られた成果

障害のある方たちに本格的なバレエ鑑賞の機会を提供

障害のある方でも気軽に参加できるエンターテインメントとして、これまで劇場での舞台鑑賞が難しかった人々とその家族に、本格的なバレエ公演の鑑賞機会を提供しました。観客アンケート結果より、公演満足度は98%と高く、障害の有無に関わらずお楽しみいただける内容だったことがうかがえます。またリラックスパフォーマンスの必要性を問う設問では92%の方が「必要」と答えており、このような趣旨の公演に対する需要の大きさが再確認されました。観客の方々にアンケートでお答えいただいた声の中には「誰もが楽しめる工

夫がなされ、とてもすばらしい時間でした。」「息子（自閉症）の大好きな演目、曲ばかりで、ストーリーもわかりやすく一緒に楽しみました。ありがとうございました！」「娘が『どうして声を出している人がいるの？』と質問してくれました。うまく説明できたかはわかりませんが、きっかけになるとよいと思います。」等の嬉しい感想をいただいております。どなたでも気軽に舞台鑑賞を楽しめることを認識していただくきっかけとなるとともに、芸術文化に対する関心を高めることにもつながったと考えています。



「シンデレラ」より

リラックスパフォーマンスの認知度向上

本事業を活用したリラックスパフォーマンスの実施も今年で6年目となりました。公演の開催と合わせて、特設サイトやSNS等を活用した広報活動を継続してきた結果、「リラックスパフォーマンス」という公演形態の認知度は着々と高まっています。お客様だけにとどまることなく、インクルージョンを促進する取り組みとして劇場関係者からの関心も高く、外部からの公演依頼も増えてきました。国内において、継続的にリラックスパ

フォーマンス公演を行っている唯一の芸術団体として、これまでの成果は他芸術団体や劇場等に共有して参ります。そして、国内におけるリラックスパフォーマンス形態の公演数の増加並びに社会包摂の推進につなげていきたいと考えています。



「シンデレラ」より

Photos: HASEGAWA Photo Pro.

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

バレエをはじめとした舞台鑑賞には、急な暗転や声を出してはいけないプレッシャーなど、自閉症や学習障害のある人々にとって耐え難い困難が多く含まれています。リラックスパフォーマンスにおいては、そのような困難を排除するための取り組みをしています。

例えば、上演中の出入りを自由にし気分を休める

ための休憩エリアをロビーに設置したり、照明も完全に落とさず視覚への刺激を少なくしています。またお客様が来場にあたって感じる不安をできるだけ取り除くことができるよう、特設サイトにおいて公演内容や当日のスケジュールを事前にお知らせしています。他にも上演前にステージ上で解説を行う等、安心して鑑賞をスタートできる環境づくりに努めています。

Outline

事業概要

障がいの有無を越えて、共にダンスを創ることをコンセプトとして、2022年のスクランブル・ダンスプロジェクトでは、合計5回のワークショップを実施しました。コンテンポラリーダンスの舞台上で活躍する複数のゲスト講師を招き、参加者の間口を広げると共に、多様な表現を引き出すための工夫を行いました。また、2023年2月3日~4日には、義足ダンサーの森田かずよ氏とシンガーソングライターのタテタカコ氏などをゲストに招き、ワークショップの成果発表として新作『メタモルフォーゼ』を上演しました。

本事業で実施した内容

ワークショップ事業

対象：小田原市内および近隣在住の方、
年齢は10歳以上
参加費：各回1,000円

- 第1回

開催日：2022年4月30日／講師：松岡大氏
会場名：小田原市観光交流センター内「イベントスペース」
参加人数：23名

- 第2回

開催日：2022年5月14日／講師：松岡大氏
会場名：小田原市観光交流センター内「イベントスペース」
参加人数：16名

- 第3回

開催日：2022年7月3日
講師：飯森沙百合氏、松岡大氏
会場名：小田原市生涯学習センターけやきホール
参加人数：26名

- 第4回

開催日：2022年9月19日
講師：アオイツキ氏、松岡大氏
会場名：小田原市生涯学習センターけやき3F
「視聴覚室」
参加人数：30名

- 第5回

開催日：2022年11月23日
講師：砂連尾理氏、松岡大氏
会場名：小田原市観光交流センター内「イベントスペース」
参加人数：13名

- 実施内容

障がいの有無を越えて共にダンスを創るワークショップを実施しました。参加者の個性や表現をより幅広く引き出すことができるよう、ゲスト講師を回ごとに変えて招聘しました。また日英バイリンガル表記のウェブサイトを用意し、国際的な交流活動への下地を整えました。



Photo by 木村雅章



Photo by 木村雅章



Photo by 木村雅章



本事業で得られた成果

ゲスト講師陣の招聘、オンラインでの情報発信が、
多様な可能性を引き出す

小田原市内で障がい者の表現活動をサポートするNPO法人アール・ド・ヴィーヴルとの連携を強化しながら、5回のダンスワークショップを実施しました。2016年から現在に至っては、障害の有無に関わらず通算で400名以上が参加しています。コンテンポラリーダンスの分野で活躍する飯森沙百合、アオイツキ、砂連尾理などのゲスト講師を招くことで、事業の認知度を高めながら、参加者の間口を広げる工夫も行いました。異なるダンススタイルへのアプローチを知ること、参加者が表現の質を深めることに繋がっています。また、

2022年は年間を通しての定期的な事業の実施、さらにはウェブサイトやSNSにおける積極的な広報、日英のバイリンガル表記が功を奏し、韓国で障がい者による舞台表現活動を実施する法人「Light Sound Friends」からオファーがありました。2023年8月には、同団体の主催する『KIADA Festival 2023』にスクランブル・ダンスプロジェクトの作品が招聘されることが決定しています。今後も、地域と障がい者支援団体か

らの理解と協力を得ながら、同時に、国際交流も推進し、障がい者による表現活動の新たな地平を切り開きたいと考えています。



Photo by 木村雅章

インクルーシブ事業を行う劇場との協力体制を築き、
話題性を高める企画を実施

当プロジェクトの講師を務めてきた松岡大氏による演出のもと、2022年の5回のワークショップの成果を発表する場として、スクランブル・ダンスプロジェクトの新作『メタモルフォーゼ』を杉田劇場にて上演しました。杉田劇場は、日頃より障がい者による表現活動を積極的にサポートしており、今回の機会でも協力体制を築くことができた意義は大きいと思います。公演のゲスト出演者として、杉田劇場を拠点とし異世代交流の場として機能してきたリコーダーアン

サンプル「杉劇リコーダーズ」、東京2020パラリンピック開会式でのソロパフォーマンスが注目を集めた義足のダンサー・森田かずよ氏、カンヌ国際映画祭受賞作品「誰も知らない」に挿入歌「宝石」を提供したシンガーソングライターのタテタカコ氏を招き、話題性を高めるべく企画構成を図りました。当プロジェクトにおいては障がい者やその家族へのアプローチもさることながら、健常の方々にも「障がいの有無を越えて共にダンスを創る」ことの楽しさ、醍

醐味を伝え続け、ワークショップや公演を通じて体験してもらうことで、社会全体における多様性への理解の底上げを行いました。



Photo by 木村雅章

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

当団体の強みとしては、舞台芸術と映像制作分野における企画制作力と運営実行力が挙げられますが、障がい者支援団体との繋がり、障がい者の表現活動を推進する劇場との連携も、充実化してきた

ことの一つです。ウェブサイトにおける日英バイリンガル表記や、SNSでの積極的な情報発信など、保護者や支援者、潜在的なファンとの関係性づくりを怠らないことも重要と考えています。

Outline

事業概要

「演劇で人と人、地域、社会と人をつなげる」ことを目標とした事業です。3年目のテーマワードは「ひろげる」でした。2021年には、東京多摩学園テラス屋上での公演を行い、22年度には地域の福祉会館で演劇公演を実施しました。2年間の相互理解を基に、ワークショップを発展させ、地域の他の施設の障がい者や住民と合同で演劇活動に挑戦しました。また、報告会やシンポジウムを継続し、全国ネットワーク作りを進めました。地域との楽しいつながりを生むために、合同でのワークショップや発表会を行いました。

本事業で実施した内容

新井英夫氏(体奏・ダンスアーティスト)ワークショップ

開催日：2022年8月20日(土)10:00～11:30
会場名：奥多摩スポーツ・コミュニティ会館柔道場
参加人数：東京多摩学園 重度の知的障がい者6人
アシスタント 板坂記子氏、サポーター7人

- 実施内容

東京多摩学園の中でも重度の障害のある人たちと、身体や心をほぐし合い、繋がることで仲間と表現を導き出し合うコミュニケーションワークショップを新井氏のリードで実施しました。

- ワークショップ内容

- ①音のぐるぐる楽器回し(導入と場づくり)
- ②タイコの音でごあいさつ(音でも自己紹介)
- ③ヘビによろよろ(気持ちいい!? ヒモを回す)
- ④ポンポンたち(ウォームアップ)
- ⑤なべなべソコ抜け(だんだん増やして)
- ⑥手つなぎの輪で波回し
(のち手を離して波を送る自由形ダンス)
- ⑦彩帯布と音とセンスで海のいきものに!(即興セッション)
- ⑧テトテ足タッチ(カラダで出会う)
- ⑨3カ所タッチのふれあい即興ダンス
(ペアで即興対話ダンス)
- ⑩カミガミのダンス(A4紙でみんなでダンスパーティー)

※ワークショップ中の音(サウンドスケープとして)は新井氏と板坂氏のお二人が、アナログ生楽器で即興で奏でました。



【奥多摩の昔話】ワークショップ

演劇公演『奥多摩の昔話』のためのワークショップと公演

開催日：2022年8月20日～11月6日
会場名：東京都西多摩郡奥多摩町福祉会館
対象：東京多摩学園利用者、奥多摩近郊の知的障がい者施設の利用者、奥多摩町近郊の演劇に興味のある方(小学1年生以上)
募集定員：25名ほど/参加人数：30名
参加費：500円

- 実施内容

8月～9月の間に相手を知るためのコミュニケーションワークショップや物語創作をみんなで楽しんでいくためのディバイジングワークショップを実施し、その後台本を持ちながらの動作、振付や演技の稽古を行いました。10月に入ってから、音楽家が入った音楽シーン稽古や通し稽古を行い11月に本番を迎えました。



【奥多摩の昔話】公演



本事業で得られた成果

体奏のワークショップで生まれる 自発のコミュニケーション

新井英夫氏の安心安全な場を生み出すチカラ、待つチカラ、何かをさせるわけではなく、自発的に参加し、たくなるプログラムにより、繊細で豊かなコミュニケーションがそここに生まれました。いつも表情のない人が、音楽の中で心が揺れ、手と手、足と足を重ねるといった奇跡が起きました。



体奏ワークショップの様子

インクルーシブシアターで福祉施設と地域をつなぐ

過去2年は東京多摩学園という知的障がい者福祉施設の利用者・職員と共に演劇創作を行ってきましたが、3年目となる2022年は「ひろげる」をテーマに、地域の昔ばなしを台本とし一般からも募りました。その結果、異なる障がいのある人(聴覚障がい・ダウン症)や、小学生から高齢者まで多様なみなさんと演劇創作に取り組むことができました。軽度の利用者さんが積極的に児童の世話をしたり、聴覚障がいの参

加者から手話を教えてもらいながらコミュニケーションを取るなど、みんなで楽しみながら交流を深めることができました。公演後、一般参加者の学園訪問は続いていて、この交流は継続しています。

知的障がいに付随する偏見、マイナスイメージをプラス変換

一般参加者はこれまでに知的障がいのある人と関わった経験がない人がほとんどで、実際に接して印象が変わったとの意見が多く寄せられました。日本社会における知的障がい者に対するイメージはマイナス要素が強

いのを改めて実感しましたが、共同の演劇創作を通して障がいのある人もない人も価値観の変化がありました。聴覚障がいのある参加者からも知的障がい者に対する印象が変わったとの率直な意見をいただきました。

会話でのコミュニケーションが取りにくいにもかかわらず、終盤は重度の利用者を積極的にサポートし、創作において大きな役割を担ってくれました。

インクルーシブシアター創作を通じた利用者・職員の成長

東京多摩学園より「インクルーシブシアター参加の成果として、軽度利用者が重度利用者を日々自発的にサポートするようになった」と報告がありました。創作過程の中で、利用者さんが他の人をサポートする場面が多々あり、他者への思いやりと助

け合いを学ぶ大きな機会となっていて、それが学園での共同生活でも活かされているようです。何かあったとき仲間と一緒にいるという安心感・安定感、孤立から人を守り社会とつながる成果を生み出しています。また、利用者さんの表現力や幸福度

の向上を生み出し、B型就労の仕事に鼻歌が出たり、毎日をより楽しく過ごしているとの報告も受けました。さらには、利用者職員が分け隔てなく創作に取り組むことで、新しい信頼関係が生まれたようです。

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

現場のバリアフリー対応について、企画段階ではさまざまな方が参加することを想定し、現場に手話通訳をいれる予算組と、段差のない会場を選びました。宣伝は、町内在住の知的障がい者、その保護者、聾者に直談判しました。事業実施時、稽古場でのコ

ミュニケーションは手話通訳を通してスムーズに進みました。公演当日に来場した方の中に聾者、盲聾者もいらしたため、会場、劇中の両方に手話通訳をいれ、通訳が見やすい座席を確保するなど、作品理解がスムーズに進むように配慮しました。

Outline

事業概要

さまざまな社会課題を持つ人々を対象に、演劇によるコミュニケーションワークショップを通して他者とのつながりを持ち、生きづらさを感じることのない「共生社会の実現」を目指すのが当プロジェクトです。地域の劇場やNPO・福祉施設・教育機関などと連携し、多様な「社会包摂型プログラム」を展開しています。高齢者、青少年、在日外国人、支援学校の生徒など、さまざまな方を対象に秋田から沖縄まで10箇所ある全国のワークショップにて、計71回実施しました。

本事業で実施した内容

兵庫県ピッコロ劇団 × 小野市国際交流協会
× うるおい交流館エクラ「にほんごであそぼう」

開催日：2022年9月18日、2023年1月14日、15日、3月12日(全4回)

会場名：小野市うるおい交流館エクラ

対象：小野市在住の外国人、地域の日本人

参加費：無料

- 実施内容

在日外国人が安心して「日本語」を話せる場をつくり、地域の外国人同士、地域の日本人とふれあい、互いを理解し、地域コミュニティを創生するワークショップを開催しました。地域の日本人と交流する機会が少ない在日外国人の方々は、地域コミュニティに参加できていない現状があり、日常生活の行き違いが社会問題となっています。また、災害時における避難や物資共有といった緊急情報の共有が十分にできていない課題もあり、今年度は小野市防災センターと協働で、兵庫県立ピッコロ劇団講師による災害時に自分の身を守るためにどうすべきかのワークショップを行いました。



にほんごであそぼう

「障害者のためのヘルスリテラシー
ワークショップ」

開催日：2022年10月1日～12月17日(全9回)

会場名：公立大学法人名城大学

障害者支援施設海陽園

対象：名城大学学生、知的障害をもつ方

参加費：無料

- 実施内容

障害者施設で生活、利用している人たちの中には、障害の特徴によって病気予防の重要性がわからず、暴飲暴食、運動不足などの健康課題がありました。沖縄県名城大学の教授監修のもと、TEAM SPOT JUMBLEの講師と大学生が協働し、知的障害を持つ方々が健康の大切さを理解できる作品を、シナリオ作成から発表まで3グループに分かれ創作しました。看護学生は障害者理解を深め、観客の知的障害を持つ方は健康の重要性を理解することができました。



ヘルスリテラシーワークショップ



本事業で得られた成果

「演劇は社会の処方箋」誰も取り残さないために
地域で支える身近な支援者づくり

地域にはさまざまな困難を抱えた人々がいながら顕在化しないことで理解を得られないという課題があります。「医療的ケアを要する在宅療養児とその家族の災害時の共助のあり方について考える演劇ワークショップ」では、実際の避難所で起こりえる状況をシミュレーション演劇で体験し、自分事として現状をより深く考え、参加者が感じたことを共有し解決する方法を話し合うワークショップを実施しました。今回はシミュレーションだけでなく、医療的ケア児の実状を周知させることを同時目標とし、沖縄市内公民館で地域住民と、福祉を学

ぶ高校生を対象としました。

在宅で医療を必要としている児童の存在を周知できたとともに、参加者からは「すごく悲しくなって、こんなことが人を傷つけているのだなとリアルに感じた」「手を貸すことを必要とする人たちに声だけでもかけられたら。実際の現場で頑張りたい。」と、「共助のあり方」を周知することで地域での支援体制の構築を創出することができました。

当プロジェクトでは、地域行政の協力のもと災害時に外国人が取り残されないよう、災害が起こった場合の行動や避難方法を地域日本人とともに

にワークショップで体験するプログラムや、ヘルスリテラシー(健康情報)作品を地域大学生とともに制作し知的障害をもつ方に届けるプログラムなど、対象者の身近な支援者を増やすことで、包括的に支援できるような体制づくりも達成できました。

成果報告会(オンライン)では本事業の取り組みや課題・成果を共有、地域での連携や手法をまとめた実施報告書「演劇は社会の処方箋」の発行により、モデルケースとして全国へ取り組みが広がると期待しています。

ファシリテーター・コーディネーター人材育成 プログラムの相互体験

今年度は、全国各地域で実施する当プロジェクトのワークショップに、ファシリテーター・コーディネーターが他地域の実施現場に参加し、互いのプログラムを体感する機会を設けました。NPO団体等との協働体制や地

域連携などの情報共有、参加者と共にワークショップを実際に体感することにより、新たな気づきや自己の修正など人材育成を目的としました。参加者として参加するだけでなく、協働団体との事前事後ミーティングなど実際

の現場にも参加することで、地域課題に対して演劇の有効性を再確認するとともに、相互に研鑽を重ねながらファシリテーター・コーディネーターの意識を高めることができました。



特別支援学校での「シアターエデュケーション」



高齢者対象「からだであそぼう」



若者自立支援施設での「演劇プログラム」

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

当事業は、NPO団体や各施設、大学など協働団体の協力が不可欠です。実施にあたり、事前事後に関係者間で綿密な打ち合わせや振り返り、今後の課題についての話し合いなどを時間をかけて行います。参加者一人ひとりの個性、生活環境、気を付

けなければならないことなどを共有し、プログラム設計などを行い、当日の実施に取り組みました。また、対象が多岐にわたる複数のプログラムを実施しているため、講師間で課題や情報共有を行い、互いにスキルアップを目指しました。

Outline

事業概要

「文化芸術全般の鑑賞サポート相談窓口」を東京・大阪の二箇所に設置しました。調査事業として、バリアフリー対応の現状と課題を把握するため、舞台芸術の実演団体や施設運営者などの事業者に対し、アンケートを実施しました。さらに実際の鑑賞サポート付き公演を実施し、障害当事者が日頃から感じているバリアを洗い出し、事例をまとめました。事業者に向けたバリアフリー支援として、舞台の鑑賞サポートをコーディネートするコンサルティング業務を実施しました。

本事業で実施した内容

鑑賞サポート相談窓口

～視覚障害者を対象とした申し込み受付サポート

開催日：2022年9月よりイベントごとに実施
募集定員：一例 視覚障害者とその同伴毎回25組50名
(2023年3月10日現在)
実施イベント数：音楽／13公演19日、
その他演劇・演芸・朗読・美術展／8公演17日
参加人数：延べ618名(視覚障害当事者、同伴者含む)

- 実施内容

イベントごとに電話やメールでの情報提供や申し込み受付を代行、一人でご来場される方の誘導も実施しました。

- 寄せられた声

「申し込みフォームへの書き込みは難しい。」「今まで申し込みできなかったようなイベントに参加できるようになって良かった。」「私たち障害を持つ者の気持ちを分かってくださっている方が対応していただけることは、イベント参加の際の安心に繋がる。今後も続いてほしい。」

鑑賞サポート相談窓口

～聴覚障害者による情報保障要望と意見交換会

総相談件数(2023年2月24日現在)126件
(聴覚障害78件 視覚障害28件 事業者14件、他)
意見交換会実施日：2023年1月15日ほか
意見交換会参加者：公演鑑賞者3名(ろう者2名、聴者1名)、
手話通訳、文字通訳

- 実施内容

相談内容は映画や演劇への要望が多数を占めました。聴覚障害者からは、音楽イベントやショー等の多様なジャンルに要望が寄せられました。意見交換会を実施した事例では、電話リレーサービスを経由し、参加予定の音楽ライブの歌詞やMCに手話通訳と字幕による情報保障の要望をいただきました。相談窓口より事業者へ要望を伝え、事業者から手話通訳の座席と通訳資料として歌詞が提

供されました。しかし、通訳費用は観客負担であることや、著作権の問題で全ての歌詞が提供されなかったこと、券種を限定した車椅子席での対応となったことなど、今後の課題が明らかになりました。

鑑賞サポートの実践

「彩の国シェイクスピア・シリーズ『ジョン王』」 東京公演におけるリラックスパフォーマンス

調査事業の一環として、実際の鑑賞サポート付き公演で集まった当事者にアンケートと意見交換を実施。
公演開催日：2023年1月17日(火)
会場名：Bunkamuraシアターコクーン
対象：視覚障害者、聴覚障害者、知的障害者、
精神障害者、身体障害者、子ども連れのお客様など
参加人数：38名

- 実施内容

自閉症や発達障害など、従来の劇場空間での鑑賞に不安がある方々に向けて始まった、リラックスパフォーマンス公演形式の導入をサポートしました。客席を暗転させず一定の照度を保ち、上演中の入退場の制限を行わず、舞台の鑑賞中に心理的負担を感じることがないように、内容や演出について情報提供を行いました。また、字幕タブレットや音声ガイドなど、作品に対する情報保障も合わせて実施しました。リラックスパフォーマンスは国内で特に演劇公演での事例は少ないものの、公演主旨から心理的負担を取り除けるように、舞台説明資料や会場内でのケアを重点的に実施しました。終了後は、当事者のアンケートと意見交換会を開催しました。

調査事業～演劇事業者アンケート

調査対象：舞台公演の企画や運営に携われる方
(劇団、制作会社、劇場等)
調査期間：2022年7月1日～8月31日
2022年11月1日～12月26日
回答数：160件



本事業で得られた成果

事業者・当事者それぞれの課題をサポートする相談窓口

当初、相談窓口には当事者からの相談や質問がほとんどであり、公演一つ一つに対して、事業者に要望を伝えて交渉していくところからスタートしました。この相談窓口の大きな特徴の一つが、文化芸術鑑賞という分野に対する窓口であり、映画や美術などのジャンルや内容に縛られていないところにあります。また、相談内容や状況も案件ごとに異なり、相談窓口内だけでも多様性が生まれている

状況です。様々な事業者に問い合わせを行い、業界、事業者個々の課題や状況が表出されることとなり、結果として当事者や事業者の課題、背景、考えなどが相談窓口という一つの場所に集まることとなりました。また、事業者へ交渉を繰り返すことで、事業者側から鑑賞サポートに対する質問や実際に字幕や音声ガイドを導入するにはどうしたら良いのか?といった相談も徐々に寄せられるようになり

ました。事業者に向けたバリアフリー支援として、『合理的配慮』をテーマとしたオンラインセミナーの実施や、舞台の鑑賞サポートをコーディネートするコンサルティング業務を実施しました。専門人材がない状況でもマンパワーで実施できる具体的な解決策を提案することができました。一方で、予算化が必要な情報保障は実現が難しいという課題も残りました。

鑑賞前から鑑賞後までのアクセシビリティに対するサポートの実現

映画、演劇などの文化芸術鑑賞において、近年、法律の改正やダイバーシティの普及などにより、障害のある方も参加できるよう情報保障に取り組もうとする事業者が増加しています。しかし、金銭面や人員・知識不足などのさまざまな課題により、導入にこぎ着けられないのが現状です。また、当事者にとってはネットでチケット購入

できない、電話もしくはメールの問い合わせしかない、一人では会場まで行けない、そもそも当事者向けの作品があるとの情報が届かないなどの作品を鑑賞するまでにさまざまなハードルがあります。そのような状況を改善すべく、「文化芸術全般の鑑賞サポート相談窓口」を実施しました。相談窓口では「会場までのアクセシビリティ」と「公演に対するアクセシビリティ」の両方をトータルで実施し、当事者自身も自分が文化芸術鑑賞できることの認識、そして作品そのものの内容を理解して楽しむことができるという、文化芸術鑑賞の本質を感じてもらうことができました。また、事業者にも鑑賞サポートの必要性を実感していただくことにつながりました。

できない、電話もしくはメールの問い合わせしかない、一人では会場まで行けない、そもそも当事者向けの作品があるとの情報が届かないなどの作品を鑑賞するまでにさまざまなハードルがあります。そのような状況を改善すべく、「文化芸術全般の鑑賞サポート相談窓口」を実施しました。相談窓口では「会場までのアクセシビリティ」と「公演に対するアクセシビリティ」の両方をトータルで実施し、当事者自身も自分が文化芸術鑑賞できることの認識、そして作品そのものの内容を理解して楽しむことができるという、文化芸術鑑賞の本質を感じてもらうことができました。また、事業者にも鑑賞サポートの必要性を実感していただくことにつながりました。



公演にて場内アナウンスを手話通訳する様子



公演の字幕タブレット席の表示例



公演にてイヤホンで音声ガイドを聴いて鑑賞するお客様の様子

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

鑑賞サポートの要望について当事者個人が問い合わせると、貴重なご意見で終わってしまうところを、文化庁事業として採択された立場で事業者に問い合わせることで、「合理的配慮」の義務化に向けての危機感や必要性を伝えることができたことは結果とし

て大きな意味がありました。弊社には、これまで文化芸術分野の音声ガイド・字幕制作で培った知識や専門性があり、さらに日常的な制作で当事者との接点を持ったスタッフが事業者と当事者の間に入り、双方の希望を調整することができました。

事業名 プロの音楽家を介在した インクルーシブ体験と地域ネットワークの構築

団体名 公益財団法人新日本フィルハーモニー交響楽団
所在地：東京都墨田区
団体URL: <https://www.njp.or.jp/>

Outline

事業概要

プロの演奏家が、小学校の特別支援学級・通常学級を対象として、鑑賞や楽器体験、創作体験の場を提供し、楽器体験を通じて「良い音とは?」「良い演奏とは?」を考え、主体的に音楽を鑑賞する体験をしてもらいました。鑑賞を通じて児童一人ひとりが感じ方の違いを知り、互いを認め合いコミュニケーションを図ることを目指しました。2022年度は新しい取り組みとして「指揮者体験」を取り入れ、ハーモニーを奏でるだけでなく、それを聴いて表現するという芸術についても取り組みました。

本事業で実施した内容

プロの音楽家を介在した インクルーシブ体験の創造

開催日：2022年12月15日、16日、21日、23日(全4日)
会場名：墨田区立業平小学校
対象：特別支援学級（児童1-6年生（さくら学級））
募集定員：20名弱
参加人数：19名
参加費の有無：無料

【1日目(12/15)】奏者Vn2名
ベートーヴェン／メヌエット
ルクレール／2台のヴァイオリンのためのソナタ
バルトーク／蚊
ノルウェー民族音楽 フルート風

【2日目(12/16)】Vn2名、Va1名
ベートーヴェン／メヌエット
モーツァルト／ヴァイオリン・ヴィオラの二重奏
ドヴォルジャーク／ヴァイオリン2・ヴィオラの三重奏
合唱曲／翼をください

【3日目(12/21)】Vn2名、Va1名、Vcl1名
クライスラー／愛の喜び
サンサーンス／白鳥
ハイドン／弦楽四重奏曲第77番ハ長調「皇帝」

【4日目(12/23)】Vn2名、Va1名、Vcl1名、Cb1名
バッハ／ブランデンブルグ協奏曲第3番 1楽章
テッポ・ハウタ＝アホ カデンツァ／Cb Solo
ピアソラ／5つのタンゴよりGuardia Nueva VC&Cb
作曲者不明／猫ふんじやった Vn Duo
アンダーソン／ワルツィングキャット
アンダーソン／プリンク・プランク・プリンク
プラームス／ハンガリー舞曲第5番
芥川也寸志／弦楽のための3楽章 全楽章

-実施内容

今年度は初めての取り組みとして、徐々に人数を増やしつつ、楽器の特徴を理解しながら、より音楽の本質的な楽しみを感じてもらい取り組みを行いました。初日は2人の奏者でスタートし、1日ごとに1名ずつ増えて最終日には五重奏を聴いてもらう事にしました。初日の楽器体験では2名の奏者が手ほどきを加えながら順番に楽器に触ってもらうようにしましたが、4日間で徐々に児童の興味が増し、それにつれて奏者の数も増えるため、一人ひとりの楽器体験に割ける時間も相対的に増えることとなり、興味を持続させながら取り組むことが出来ました。また、今回楽器体験をやっている最中の動画を学校の先生が動画で撮影し、保護者との面談で見せたところ、集中して取り組んでいる姿や新しいことに興味をもって取り組んでいる姿をみて、非常に感激されたという声があがっていました。



各グループに分かれて楽器体験をしている様子



本事業で得られた成果

楽器体験・音色や奏法の違いを知って、 主体的な音楽鑑賞の体験を

一般的な音楽鑑賞教室は、児童が演奏を聴くだけの受動的な関わり方になりがちですが、本事業では楽器を演奏できなくても「知っているから楽しい」「違いが分かるから面白い」と感じられる取り組みを実施しました。能動的にイメージを持って聴いてみることや、振動から伝わる音の様子など、様々な視点から曲

の解釈を伝えられました。ヴァイオリンやチェロの楽器体験を通じて、児童の多様な反応を見られて、積極的な参加姿勢も見ることができました。また、楽器を児童が演奏する様子と同じ学校の他の児童が見ることで、得意な人が教えたり、児童同士のコミュニケーションを自然に取るこ

とができるようになりました。楽器体験も同時にはできないため、順番待ちをする必要があるのですが、順番待ちの間でも他者の尊重や自分以外の人に取り組んでいるときに興味をもってそれを観察することが出来る児童も多く見られました。



ヴァイオリン二重奏の演奏を聴く様子



チェロの楽器体験（先生が楽器の構え方から丁寧に教えます）



楽器の説明を受けている



弓を持つ前に鉛筆でみんな練習

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

生徒と同じ立場で、ゼロから音楽を生み出すワークショップなども存在していますが、新日本フィルハーモニー交響楽団が取り組む内容としては、プロの音楽家の演奏を聴いてもらう事に重きを置いています。聴いてもらう内容を短い曲から徐々に長い曲へと移

行しながら、「音楽を楽しむ」「1つの事に集中する」ということに取り組まれました。多くの方にワークショップの意義を理解してもらう事が、非常に大事だと感じました。初めての学校は不安を覚えるため、横のつながりの重要性を改めて実感しました。

事業名

みんなの音楽会 鷗木絵里&中川賢一 バリアフリーコンサート

団体名

サントリーパブリシティサービス株式会社
所在地：東京都江東区
団体URL: <https://www.sps.sgn.ne.jp> 事業URL: https://hirakata-arts.jp/event/detail_1021.html (枚方)
<https://yamato-bunka.jp/hall/2022/008065.html> (大和午前)
<https://yamato-bunka.jp/hall/2022/008919.html> (大和午後)



Outline 事業概要

コンサートでは、鑑賞のみにとどまらず、演奏家と動きを合わせるなど、客席にいながらにして参加できるプログラムを織り込み、ステージと客席、障がい者と健常者が一体となり、文化芸術を通して障害者の社会参加の促進を目指しました。また、健常者側の理解を深め、双方の心の距離を縮めることを目的に、様々な社会的課題を解決する公共施設として、年齢や障害の有無に関わらず、だれもが楽しめるコンサートとして実施しました。

本事業で実施した内容

【バリアフリーコンサート①】

開催日：2023年2月11日(火)
会場名：枚方市総合文化芸術センター
参加費：有料
大人1,000円、子ども(中学生以下)500円
※3歳未満の膝上鑑賞は無料

-実施内容

鷗木絵里氏(ソプラノ)と中川賢一氏(ピアノ)による、クラシック音楽に童謡やディズニー音楽、絵本の読み聞かせもある、垣根なく誰もが楽しめるバリアフリーコンサートを開催しました。



大和公演のチラシ

【バリアフリーコンサート②】

開催日：2023年3月18日(土)
会場名：やまと芸術文化ホール サブホール
参加費：有料
大人1,000円、子ども(中学生以下)500円
※3歳未満の膝上鑑賞は無料

-実施内容

点字プログラムの配布や難聴者支援システムの貸出し、文字支援など、様々な鑑賞サポートを整えており、誰もが安心してご来館いただけるバリアフリーコンサートを開催しました。小さなお子様がお喜びのプログラムを揃えた午前の回と、ゆったりと音楽を堪能する大人向けの午後の回の2部制で実施しております。



本事業で得られた成果

障がい者団体(全国組織)との連携強化

(一社)全日本難聴者・中途失聴者団体連合会と(一社)日本視覚障害者団体連合の障がい者団体の全国組織に協力を依頼し、当事者のコンサートの楽しみ方の違いや、不安、心配に感じていることを、直接のピアリング機会を通じて、支援の方法を

模索しました。難聴支援では、ヒアリンググループの希望が多かったが、FMシステムによる難聴支援を行う前提となったものの、骨伝導ヘッドフォンの別途導入やUDトークを新たに導入するなど、より幅広く支援できる体制を整えました。盲者に対しても、自

分たちに必要な情報保障を健常者にも理解してほしいという要望をもとに、今回は対象者配布だった点字プログラムを全員配布とするなどの対応を実施しました。

地元団体の協力を得ながら公演を共に創る

公演場所に合わせ、地元の団体の協力を得る試みを実施しました。広く公演を知っていただくため、(一社)全日本難聴者・中途失聴者団体連合会と(一社)日本視覚障害者団体連合を通じて地元の加盟団体を紹介いただき、公演周知や協力依頼を行いました。枚方では、地元のNPO団体の手話通訳協会に協力いただき、公演時の手話通訳を依頼しました。

大和でも自治体と協働し、地元の手話団体や特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク

との連携を強化し、公演を共に創るなどの試みを実施しました。



みんなの音楽会 大和 公演写真



枚方公演チラシ



Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

一般社団法人みんなの大学校と連携し、地域における障害者の生涯学習の場づくりの連携協議会を立ち上げました。指定管理者としての公共ホール、障がい等に詳しい専門家、福祉施設の職員、当事

者の意見交換の場を設定し、障がい者が文化芸術を楽しめる環境を整えるために必要なことや事例共有を実施し、知見や相互理解を深める活動を行うことで、実際の公演運営のヒントを得る場となりました。

Outline

事業概要

2022年度は、演劇・映画各分野において芸術活動を志すろう者・難聴者のため、学びの場づくりに重点をおいて事業を進めました。講師を招いてワークショップ等を実施するほか、一般の演劇・映画学校の協力を得ながら、手話通訳を手配し、演劇・映画を学べる場を創出しました。講師及び一般の受講生、手話通訳者にとって学びの場となり、今後のろう者の芸術活動の基盤になると感じました。演劇・映画・美術各分野では、これまでの経験をもとに、ろう者の活動レベルのアップを図りました。

本事業で実施した内容

第42回手話狂言初春の会

開催日：2023年1月8日(日)～9日(月・祝)
会場名：国立能楽堂(渋谷区)
対象：聞こえる人や聞こえない人
募集定員：591名／参加人数：のべ1,061名
参加費：有料《SS席》5,500円《S席》5,000円
《A席》4,000円《B席》3,000円

- 実施内容

「触る模型」の展示…視覚障害モニターに対し、日本ろう者劇団メンバーが舞台と客席の形態を「触る模型」を使いながら説明しました。

デフアクトーズ・コース

開催日：2022年10月4日(火)～11月18日(金)
(全20回)
会場名：トット文化館
講師：近藤強氏、兵藤公美氏、深田晃司氏、雫境氏、
今井ミカ氏、今井彰人氏、江副悟史氏
対象：ろう・難聴者
募集定員：10名／参加人数：12名
参加費：有料(70,000円)

- 実施内容

ろう者・難聴者を対象とした俳優養成講座を開催しました。講師は聴者とろう者で構成されています。修了公演では希望者を募り、日本ろう者劇団メンバーの数見陽子さんの演出のもと、1月31日(火)にトット文化館にて上演しました。(4組がそれぞれ異なるアプローチで2本の戯曲を演じました)

脚本創作塾

開催日：2022年11月28日(月)～12月16日(月)
全4回《基本編》
2023年1月16日(月)、23日(月)
全2回《フォローアップ編》
会場名：トット文化館
講師：今井雅子氏(脚本家/映画「嘘八百」シリーズ、
ドラマ「東の間の一花」など多数)
コーディネーター：早瀬憲太郎氏
(映画「ゆずり葉」「咲む」監督)
対象：ろう・難聴者
募集定員：基礎編10名、フォローアップ編10名
参加人数：基礎編6名、フォローアップ編4名
参加費：有料《基本編》12,000円
《フォローアップ編》6,000円

- 実施内容

脚本創作の基本から学び、短い作品を書き上げることを目標として実施しました。



デフアクトーズ・コースの様子



本事業で得られた成果

第42回手話狂言・初春の会における鑑賞支援

トット基金が40年来継続している手話狂言は「聞こえる人も聞こえない人も共に楽しめる演劇」をうたっていますが、本事業によって更に鑑賞支援と観客動員を進めました。コロナによる座席の使用制限から解放され、2日間で1,061名と、動員率90%を超える盛況で「共生社会」を寿ぐような初春のひとつを共に過ごすことができました。※「触る模型」の展示…視覚障害モニター／8日(日)3名、

9日(月・祝)1名/今回、上演中の音声ガイドは準備せず、その上でどのようなサポートが必要かのヒアリングを実施しました。座席が前の方であれば、衣擦れや足音などで方向がわかるようです。特殊な客席と舞台なので、「触る模型」を使った説明はとても有効であると感じました。さらに衣装の説明があると良かったとのことです。



触る模型

デフアクトーズ・コース

ろう者・難聴者の募集定員10名に対して、定員を超える20名近くの応募があり、12名に増やしました。NHK番組の「ろうなん」や「パリパラ」にて本事業の取り組みが紹介され、映画WebマガジンMOVIE Collectionやキネマ旬報、朝日新聞などでも記事として取り上げられる

など、社会から注目されています。ドラマ「Silent」にもエキストラとしてデフアクトーズ・コースの数名が出演し、関係者向けの修了公演では舞台やドラマ関連者の方々がお越しになり、

受講生の数名は来年のドラマ出演(未公開)が決まっています。



デフアクトーズ・コースの様子



デフアクトーズ・コースの様子

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

【第42回手話狂言・初春の会における鑑賞支援】

ろう者の演者が手話通訳を介して「目が見えない・見えにくい観客」に「橋掛かり」「能舞台」「目付柱」「見所」など、空間や触感を説明し、事前に「あらすじ」を伝えることにより手話狂言のより良い鑑賞をはかりました。

【デフアクトーズ・コース】

今回の取り組みは、ろう者と難聴者が安心して演技の基本を学べる環境づくりを心がけました。講師陣に聴者の講師だけではなく、ろう者の講師を入れた他、ろう者の身体と言語を基本としたプログラムを映画美学校の講師たちと協働しながら開発しました。

事業名 舞台手話通訳者の人材育成および実践普及、観劇サポート啓発

団体名 特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク(TA-net)
所在地：東京都世田谷区
団体URL: <https://ta-net.org/> 事業URL: <https://ta-net.org/>

Outline

事業概要

国内の聴覚障害者は約32万人いるとされますが、多くの劇場で舞台手話通訳などの観劇サポートが充実していないのが現状です。舞台手話通訳は、主催者が導入を検討してもノウハウがなく、経費が捻出できないことも課題にあります。本事業では、文化芸術団体や劇場との連携を図りながら舞台手話通訳付き公演をモデルケースとして実施し、成果報告会のオンデマンド配信や冊子の配布により魅力を発信しました。また、舞台手話通訳者、手話監修者、コーディネーターの育成を集合研修や実践の場を通じて行いました。

本事業で実施した内容

舞台手話通訳の公演における実践

- ①NPO法人アートワークショップすんぷちよ
「きんいろの髪のお姫さま」
開催日：2022年9月17日(土)・18日(日)※2ステ
会場名：宮城野区文化センター(宮城県)
- ②SPIRAL MOON「触れただけ」
開催日：2022年11月18日(金)・20日(日)※2ステ
会場名：『劇』小劇場(東京都)
- ③ルーラル・アーティストズ株式会社
「歌って走って笑って踊ってキャラバンバン」
開催日：2022年11月26日(土)・27日(日)※2ステ
会場名：南国市地域交流センターMIARE!(高知県)
- ④趣向「パンとバラで退屈を飾って、わたしが明日も生きることを耐える。」
開催日：2022年12月24日(土)※1ステ
会場名：シアター風姿花伝(東京都)
- ⑤注文の多い舞台公演実行委員会
舞台手話通訳・字幕付公演「注文の多い料理店」
開催日：2023年1月14日(土)※2ステ
会場名：福岡市祇園音楽・演劇練習場『ぼんプラザホール』(福岡県)



人形劇での舞台手話通訳実践

集合研修(人材育成)

- ①舞台手話通訳者の養成講座
開催日：2022年9月10日(土)~9月11日(日)
※1泊2日
会場名：穂の国とよはし芸術劇場プラット
参加人数：舞台手話通訳者25名/手話監修者3名
/通訳・コーディネーター5名
- ②手話監修研修・意見交換会
開催日：2023年2月21日(火)
会場名：東京芸術劇場
参加人数：手話監修者14名



舞台手話通訳者の集合研修

啓発

- ①大会や国際会議にブース出展・障害当事者や支援者へのPR
・「第70回全国ろうあ者大会 in ひろしま」
・「だれもが文化でつながる国際会議 2022」
・「第26回全国中途失聴者・難聴者福祉大会 in おんせん県おおいた」
- ②メールマガジンの発行(約450名の方に45回の配信)
・第2,4木曜日:鑑賞サポート付き公演の情報配信
・第1,3金曜日:アクセシビリティ情報に特化した話題の提供
- ③SNSでの情報発信
・Twitter(フォロワー数:約980名)、Facebook(フォロワー数:約680名)、ブログにおいて、活動報告や国内外の鑑賞サポート情報の提供



本事業で得られた成果

舞台手話通訳に特化した専門人材の育成

舞台手話通訳は作品全体を理解し、台詞や音楽、効果音の情報を、俳優のキャラクター設定や動き、文脈に合わせて手話で表出します。知事会見などに見られる一般的な手話通訳とは専門性やその準備の在り方が異なるため、聴覚障害者センターから派遣される手話通訳者では対応が難しく、舞台手話通訳者としての

専門性を高める養成プログラムを行う必要がありました。豊橋の集合研修では、全国各地から舞台手話通訳者や手話監修者が30名以上集まり、舞台手話通訳に関する研究発表や事例報告を聞き、意見交換を行ったほか、翻訳の仕方、身体表現についても学び、理解を深めました。



演劇における手話表現を検討

さまざまな団体と連携し、舞台手話通訳のモデルケースを構築

TA-netでは2018年より舞台手話通訳者の養成講座を実施してきましたが、実践の場が限られているため、現場で学ぶ機会が制限されるという課題がありました。そのため、全国から舞台手話通訳導入を検討する団体を募り、モデルケースを実施しました。公演の準備段階から伴走し、広報のあり方、受付対応のフォロー、聴覚障害者のモニ

ター手配も含めて支援を行ったことで、期待感を持って劇場に訪れてもらうこと、楽しんで帰っていただくことまでのフォローを共に考える機会になったと思います。演出家や俳優からは「いかに日頃から、音に頼った表現があるか気付くことができた」「伝えるとは何か?について深く考えるきっかけになった」など、観劇サポート、情報保障を超えた価値につ

いても感想をいただきました。



会場では、ヒアリンググループの設置研修も行う

多様な人材の関わりから、気付きを得ること

事業を通じて、ろう者、中途失聴者、難聴者、SODA(聴覚障害者のきょうだい)、CODA(聴覚障害の親を持つ子ども)など、多様な方々と協働する機会となりました。また全国各地を訪れたことで聴覚障害者センター

や、障害者芸術活動支援センターとの交流を図れたことも、地域のニーズ把握につながり、今後の事業展開を考えるヒントになったと思います。



ろうあ大会でのブース出展

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

TA-netでは「みんなで一緒に舞台を楽しもう」をテーマにしています。「みんな」とは誰を指すのか、「一緒に」の本質は何かを考えながら事業に取り組みました。聴覚障害者が主体となって事業運営ができるよう、ChatworkやSlackといったチャットツ

ルを使用し、オンラインミーティングも基本的に手話通訳を導入しました。聴覚障害者には、ろう者、難聴者、中途失聴者、盲ろう者と大別されますが、その聞こえの程度やコミュニケーション方法は様々であり、個別に配慮が必要です。

事業名 障害のある子供たちの表現力を引き出す、 芸術の鑑賞体験と表現のインスピレーションプログラム

団体名 特定非営利活動法人アーツイニシアティブトウキョウ
所在地：東京都渋谷区
団体URL: <https://www.a-i-t.net/> 事業URL: <https://cat.a-i-t.net/>

Outline

事業概要

当法人では、東京・渋谷区で活動する市民グループ「アトリエ・エー」、アウトサイダーアートと市民をつなぐ専門家「ミュージアム・オブ・マインド」(オランダ)と協働し、多様な特性を持つ子供やユースとの芸術体験を通じて、共に学ぶインスピレーションプログラムを実施しました。ダウン症や自閉症を含む、さまざまな特性のある参加者とともに、美術館や博物館を訪問する鑑賞プログラムのほか、その体験から自身の表現へと展開する創作の機会を創出しました。

本事業で実施した内容

さまざまな表現に触れ、自分の感じ方を伝え合う…… 美術鑑賞プログラム「インスピレーション・ツアー」

開催日：2022年11月20日(日)
会場名：東京国立近代美術館
対象：ダウン症や自閉症などのある子供と若者、
ファシリテーター
参加人数：41名/参加費：無料

- 実施内容

オランダのメンタルヘルスと芸術の取り組みをヒントに、日常のインスピレーションをさらに深める目的で、東京国立近代美術館の所蔵作品展「MOMAT コレクション」を訪問し、グループにわかれて近現代の100年以上にわたるさまざまな表現を鑑賞しました。各グループに、美術館に初めて訪れる人を含む障害のある子供と障害のない子供が混ざり合い、大人ファシリテーターとともに、参加者同士が目の前の作品について、色や形、モチーフなどから得た感想を自由に語り合いました。最後に気になった作品、好きな作品、見つけたことについて、それぞれが発表を行いました。



インスピレーション・ツアーでの振り返りの様子 photo: 阪本 勇

自分の表現をさらにひろげる、創作プログラム……

開催日：2022年11月23日(水)、2022年12月18日(日)
会場名：上原社会教育館
対象：インスピレーション・ツアー参加者
参加人数：40名/参加費：無料

- 実施内容

インスピレーション・ツアーの実施3日後と1ヶ月後に、アクリル絵具や大きい画用紙など、通常のアトリエでは使用していなかった画材を用いて創作活動を行いました。通常通りの好きな表現で良いことを推奨するなかでも、描かれた作品の多くには、美術館で鑑賞した作品から得たモチーフや体験が表現されていました。記録はサマリーとして、映像やウェブサイトバイリンガルで発信し、日本や海外のオーディエンスに向けて情報公開を行っています。



東京国立近代美術館「MOMAT コレクション」鑑賞風景 photo: 阪本 勇



本事業で得られた成果

芸術体験を通して、安心して自分を表現できる場の創出と寛容さ

美術鑑賞では今回、作品情報は敢えて事前に極力伝えず、できるだけ自由な見方ができるように心がけました。初めて美術館を訪れる参加者でも安心して自分が思ったこと、考えたことを伝え合える場をつくることができました。また、ファシリテーターには、芸術家やアート関係者、精神科医、精神福祉のソーシャルワーカーのほか、芸術とケアに関心のある大人が

寄り添い、事前研修を経て、参加者のどんな発言や反応も受け止める心構えができていたことも、参加者にとって鑑賞しやすい環境をつくることに貢献したと言えます。鑑賞後の振り返りでは、作品からオリジナルの物語を想像したり、自分の経験とつなげて発見したことを伝える子、作品の背景を調べながら作者の思いを想像した子、自宅に飾りたい作品を考

えた参加者など、さまざまな視点で共有され、参加者の保護者からも、普段とは異なる様子や、子供たちのいきいきとした様子が発見できたという声がありました。

実施前後には、オランダの協働団体のメンタルヘルス担当者との意見交換を行い、活動の工夫や大切なポイントを互いに共有できました。

環境を広げながら、それぞれの表現の種を見つける

創作プログラムでは、普段の創作では使わないアクリル絵の具やハケ、大きな画用紙などの画材や道具をなるべく多く提供し、創作の環境を広げました。初めての画材の感触を確かめながら、ゆっくりと描く子や気に入った作品からのインスピレーションで新たな表現に挑戦する子、プリントアウトした作品の額縁に自分が描いた

モチーフをコラージュする子など、様々な表現が見られました。いずれも自発的に創作されたもので、いつもと変わらないモチーフの中に、新たな表現を取り入れるなど、自由な環境で参加者がのびのびと創作していました。発表では、障害のある子供や保護者から「またみんなで美術館に行きたい」との発言もあり、特別

な時間をそれぞれが体験したことが伺える時間となりました。創作においても、新たな画材を使用することで、これまでになかった表現が生まれ、定期的な実施を望む声があがりました。経験がすぐには表現や変化に現れなくても、それぞれの感じ方を肯定し、ゆっくりと見守ることが大切だと実感しました。



創作では、はじめてのアクリル絵の具に挑戦する人も photo: 阪本 勇



美術館の外観から着想を得た作品 photo: 阪本 勇



美術館で観た好きな作品といつものキャラクターを描いた作品 photo: 阪本 勇

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

ファシリテーターに向けて事前研修を行い、プログラム主旨と寄り添う際のポイントを伝え、みんなが安心して参加できる環境づくりを心がけました。また、アトリエ・エーからも、普段の子供の特性をよく理解しているスタッフが参加し、参加者に合わせてのび

のびと表現できる場の確保と、ささやかな反応の違いに気づける体制で実施しました。関心や鑑賞のペースが異なることも想定し、ファシリテーターと子供の人数を1:1以上となるようにし、子供たちが自由に作品に対峙できる柔軟な体制を最優先しました。

団体名 一般社団法人キネコ・フィルム
所在地：東京都渋谷区
団体URL: <https://kineko.jp/>



Outline
事業概要

長期入院が必要な障がいや難病を抱える子どもたちとその家族のケアに映画を役立てること、またそのような役割を果たすために映画に何が出来るかを求めていくことが本プロジェクトの目的です。本プロジェクトの趣旨は「①映画の持つ力を子どもたちに伝えたい」「②入院生活の負のエネルギーをプラスに転換したい」の2点に集約されます。映画祭会場と病室を WEB 会議システムで双方向でつなぎ、映画に触れる機会を創出しました。

本事業で実施した内容

キネコ・ホスピタルプロジェクト2022

開催日：2022年11月2日(水)～11月6日(日)
会場名：iTSCOM STUDIO & HALL
二子玉川ライズ
国立研究開発法人国立成育医療研究センター
対象：子ども及び長期入院患児、通院患児
募集定員：設定無し(病床数490床)
参加人数：オンライン1名、現地参加3組

- 実施内容
国立成育医療研究センターに入院・通院中の子どもたちに映画祭の楽しさを届けるため、3つの取り組みを実施しました。

- ①入院中の子どもたちへ
映画祭での上映プログラムをオンライン配信することで、いつでも映画鑑賞を可能にしました。
- ②通院中の子どもたちへ
上映会場へ招待し、映画祭を楽しんでもらいました。
- ③映画監督や俳優にオンラインで登壇してもらい、会場と現地をつなぐ環境づくりを実現しました。



イツコムホール風景



29th キネコ国際映画祭メインビジュアル

本事業で得られた成果

普段映画館に行くことができない(行ったことがない) 子供たちへ映画祭体験の提供

入院患者の方たちにはビデオ会議システムWEBEXを介して病室と映画祭会場をつなぎ、上映プログラムをライブでお楽しみいただけるようご案内しました。また、国際映画祭の雰囲気をもっと味わっていただけるよう、海外にいる監督や出演者をオンラインでつなぎ上映前後で作品について語ってもらうなど、プログラムの充実を図りました。また、通院患児の方たち及びそのご家族を実際の映画祭会場にご招待し、3組の方たちにご来場いただきました。移動のしやすさを考慮して通路に近い場所をご用意し、容体が急変した際に対応できるようにアテンドスタッフ1名を配置してお迎えしました。会場入り自体が非常に困難だったり、長時間同じところにいることが難しかったり、他のお客様の迷惑となってしまうことを気にしたりなど、普段抱えている来場のハードルを下げる事が出来たと感じております。オンラインでの進行や演出、現地会場への受け入れなど、運営ノウハウの蓄積は出来たので、容易に楽しめるよう事前告知の充実を図ること、映画祭後も映画鑑賞を楽しめる機会を作ること、多くの方にプログラム鑑賞の機会を提供するべく提携施設を増やすことの3点を次の課題として取り組んで参ります。



イツコムホール風景



イツコムホール風景



ホスピタルプロジェクト案内用チラシビジュアル

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

オンラインで病院と会場をつなぐインフラと、キネコ国際映画祭が有する人脈を活かし、海外の作品関係者とのやりとりをプログラムに組み込むことが出来ました。また、現地へ招待する際、「出来ること」と「出来ないこと」を明確にすることができました。

この事業は、鑑賞のために多く動員することが目的ではなく、鑑賞の機会があることに意義を感じております。だからこそ、より入院/通院患児の方やご家族、医療従事者の方々の状況や立場を常に念頭に置きながら、寄り添える工夫をこれからも講じて参ります。

新国立劇場主催 演劇公演等における観劇サポート

公益財団法人新国立劇場運営財団

所在地：東京都渋谷区

団体URL: <https://www.nntt.jac.go.jp/>

Outline

事業概要

障がいの有無に関わらず、チケットの購入、来場、観劇、帰宅に至る各段階のハードルを下げ、舞台鑑賞をトータル的に支援し、良質な舞台を楽しめる機会の提供を目指しました。従来実施してきた一部の主催演劇公演におけるサポート提供を継続しつつ、新たな進展を目指してきました。2022年度は新たに、海外招聘劇団による外国語演目に関するサポート、新国立劇場が制作した演目の全国公演でのサポート、舞台の専門家団体との協力などに取り組みました。

本事業で実施した内容

海外招聘公演「ガラスの動物園」における観劇サポート

開催日①：2022年9月28日(水)～10月2日(日)
《聴覚障がいサポート》
2022年9月30日(金)～10月2日(日)
《視覚障がいサポート》

会場名：新国立劇場中劇場

対象：当該日の公演を鑑賞されるお客様

参加人数：障がい者割引利用76人、英語チケット購入者162人、視覚障がいサポート44人

参加費：無料（別途公演チケットが必要）

- 実施内容

- ・聴覚障がいサポート
大型LEDパネルを用いた舞台上方への表示（日本語、英語並記のバリアフリー字幕など）
- ・視覚障がいサポート
日本語の翻訳および舞台の解説を合わせたリアルタイム音声ガイドなど。
- ・共通
オデオン劇場における観劇サポートの状況を調査し、同劇場で使用しているサポート用什器貸与の要請など

「ロビー・ヒーロー」全国公演観劇サポート

開催日①：2022年5月29日(日)
会場名：穂の国とよはし芸術劇場
開催日②：2022年6月11日(土)
会場名：岡山市立市民文化ホール

- 実施内容

新国立劇場で制作した演目を全国のホール・劇場が上演する際、新国立劇場が持つノウハウ・材料を提供し、サポートを実施できるように取り計らいました。提供にあたって新国立劇場が持つ知的所有権に関する部分は無料としました。

「ロビー・ヒーロー」、「レオポルトシュタット」観劇サポート

開催日：2022年5月14日(土)、15日(日)(視覚)、
21日(土)(聴覚)《「ロビー・ヒーロー」》
開催日：2022年10月29日(土)、30日(日)(視覚)、
23日(日)(聴覚)《「レオポルトシュタット」》

会場名：新国立劇場小劇場、中劇場

対象：当該日の公演を鑑賞されるお客様

参加人数：合計70人（うち障がいをお持ちの方42人）

参加費：無料（別途公演チケットが必要）

- 聴覚障がい向けサポート

- ・ポータブル字幕表示機貸出による、文字化したセリフ、音響情報の送付
- ・会場内の掲示および案内サインの強化
- ・手話通訳、要約筆記者の配置
- ・手話、字幕入の宣伝動画作成
- ・電話に依存せずにインターネットやFAXでチケットを購入できる仕組みの提供

- 視覚障がい向けサポート

- ・公演前の舞台説明会開催（舞台を模した大道具、小道具に触る体験を含む）
- ・作品のあらすじ、みどころ、俳優などを音声で紹介する「声のプログラム」の提供
- ・触れる模型の作成および模型を用いた舞台セットの解説
- ・劇の進行と同時に物語を理解できるリアルタイム音声解説
- ・最寄り駅改札口と劇場間の案内係による付添



本事業で得られた成果

外国語で上演される舞台を、障がいの有無にかかわらず、複数の言語で楽しめる情報保障

9・10月に上演した「ガラスの動物園」は、フランス、パリの国立オデオン劇場を新国立劇場に招聘して行った公演（セリフはフランス語）です。本公演では、セリフの翻訳に相当する字幕を、日本語だけでなく英語でも表示しました。また、日本語、英語とも、字幕は音の情報などを文字として盛り込んだバリアフリー版と

これにより、すべての公演回にお

いて聴覚障がいの有無にかかわらず、また、使う言語が日本語でなくとも、舞台を楽しめる機会の提供を目指しました。また、視覚障がい向けサポートとして実施するリアルタイム音声ガイドについて、今回はフランス語での上演だったため、舞台上の解説に加え、セリフの日本語訳を合わせて配信しました。さらに、サポートの実施にあたってはオデオン劇場の状況調査、協力依頼をすること

により、一部のサポート用什器（模型など）について、オデオン劇場で使用する物の貸与を受けられました。視覚障がい向けサポート実施日には、オデオン劇場の制作スタッフが現場見学を訪れ、観劇サポートの国際交流の場ともなりました。外国語で上演される舞台について、多様な観客が楽しめる方法の一例を世に示せたと考えます。

新国立劇場以外でも観劇サポートを

新国立劇場で制作し、観劇サポートを実施した公演を全国のホール・劇場が上演する場合、主催者の希望に応じて新国立劇場が持つノウハ

ウ・材料を提供しています。提供にあたっては新国立劇場が持つ知的所有権に関する部分は無料とし、サポートをより気軽に実施できるよう取り計

らいました。これにより、東京だけではなく、国内の他の都市にも観劇サポートを広げる一助になったと考えます。

専門家との横のつながりを

日本における舞台美術家集団である、一般社団法人日本舞台美術家協会と協力関係を結びました。同協会はプロの舞台美術家の視点で触れる模型の研究を行っており、視覚に

障がいのある方にとって、より効果的な縮尺の在り方や模型の製法などについて豊かな知見と高い技術を有しています。触れる模型の作成を同協会に依頼し、意見を交わしながら

完成させていくことにより、質の高い模型を安定して準備できるようになったと考えます。

従来の観劇サポートもしっかり

新国立劇場がこれまで行ってきた演劇公演での観劇サポートについて

も、引き続き2演目について行いました。常連となったお客様をお迎えでき

るようになり、本事業の定着を感じています。

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

観劇サポートは、外部の専門家や業者に依頼しても実現は難しいものです。公演の内容や特性をしっかり分析・理解し、舞台制作の過程を鑑みつつ、障がいのあるお客様のニーズに合わせて内容を検討します。そして、準備、実施にあたっては、制作、技術、

営業など多岐にわたる内外のスタッフ間で情報を共有し、適切・円滑に業務を遂行する必要があります。新国立劇場では、公演の企画から稽古、本番までを一貫して担っているため、これらを満たしやすい環境があります。

障害者等の文化芸術で紡ぐ 多種多様な人が交わる豊かな街づくり事業

社会福祉法人愛成会
所在地：東京都中野区
団体URL：http://www.aisei.or.jp/

Outline

事業概要

東京・中野で、文化芸術×福祉×街づくりの活動を商店街等と連携しながら長年にわたり実施してきました。その強みを活かし、本事業では、「Here I am (私はここにいる)」をテーマとした参加型プロジェクトや障害のある創り手を含む日本のアール・ブリュットを紹介する展覧会、異なる分野の有識者の視点をクロスオーバーさせるオンライントークイベントを開催しました。本事業を通して、地域の文化芸術の力を活用した新たな価値創造とアートとSDGsによる街づくりを考える機会となりました。

本事業で実施した内容

参加型プロジェクト「中野の記憶」

写真応募期間：2022年8月～2023年2月12日

写真公開場所：

- ①本プロジェクトのInstagramにて、全ての応募写真を紹介
公式Instagram @nakano_no_kioku
 - ②アール・ブリュット展 2023「Here I am」会場内
※一部の応募写真を紹介
 - ③展覧会チラシ ※一部の応募写真を掲載
- 応募枚数：128枚
対象：中野区に在住、在勤、通学、来訪する方を中心に
中野を愛するすべての方

- 実施内容

中野を愛するさまざまな人から募集した思い出の写真を通して、本事業が開催されている中野の街の魅力や記憶を広く発信する参加型プロジェクトです。人々の記憶から、街の魅力を再発見し、さまざまな人の視点を共有するプラットフォームを創出しました。

オンライントークイベント

公開日：2023年1月よりYouTube配信
(公式YouTube「あいせいチャンネル」にて公開)

対象：すべての方が視聴可能

ゲスト：青木武氏 (中野ブロードウェイ商店街振興組合理事長)、金敬黙氏 (Social Gallery KYEUM 共同設立者、早稲田大学 文化構想学部 教授)、梅若幸子氏 (Umewaka International 代表取締役兼アートプロデューサー)、ブルボンヌ氏 (女装パフォーマー、ライター)

司会進行：小林瑞恵 (アートディレクター、キュレーター、社会福祉法人愛成会 副理事長)

・トーク1～3
総視聴回数／950回 ※2月28日(火)時点

- ・トーク1
「境界を越え、人が表現することの源泉を見つめる。」
梅若幸子氏×ブルボンヌ氏×小林瑞恵
※視聴回数／345回 ※2月28日(火)時点
- ・トーク2
「I am Just me. 自分らしさを愛する。」
ブルボンヌ氏×金敬黙氏×小林瑞恵
※視聴回数／436回 ※2月28日(火)時点
- ・トーク3
「街は文化で生まれ、多様な人が交わる場所へと創造されてゆく。」
青木武氏×金敬黙氏×小林瑞恵
※視聴回数／169回 ※2月28日(火)時点

- 実施内容

人が表現することやマイノリティ当事者が語る多様性、そして文化芸術と街づくりをテーマに、異なるフィールドで活躍するゲストをお招きし、それぞれの視点をクロスオーバーさせながら、多様な人の価値観を享受する豊かな未来社会に向けて語らう3本のオンライントークイベントを実施しました。

アール・ブリュット展 2023 「Here I am. 一人ひとり、いろとりどりの物語。」

展覧会期：2023年2月4日(土)～12日(日)

会場：なかのZERO 西館 美術ギャラリー1

入場料：無料

入場者数：498人

- 実施内容

全国から7人の作家を紹介しました。それぞれに表現の異なる多彩な世界観を持つ7人の“私”を通して、一人ひとりが放つ豊かな個性に触れていただくとともに、私たちの日常に人の数だけ存在する“私”へ思いを向けていただく機会となりました。



本事業で得られた成果

多様な人の地域にまつわる写真を共有し合い、 街の魅力を再発見

参加型プロジェクトでは、地域に関わりのあるさまざまな人から思い出しの写真を募集しました。参加者それぞれの視点から、街の側面が垣間見える写真をInstagram上に公開することで、地域の方に限らず街の魅力を広く発信する機会となりました。アール・ブリュット展会場内には、応募いただいた写真で壁面を構成したフォトスポットを設置し、多様な人の地域での記憶が来場者となつがる場を創出しました。また、フォ

トスポットをご覧いただいた来場者からは、写真に写っている場所に行きたいという問い合わせもあり、来場者と街がつながるきっかけにもなりました。現在、大規模再開発により中野駅周辺を取り巻く環境が変化する中で、地域に関わりのある人や、そこに暮らす人々にとって大切な場所や人、物事などを、写真を通じて可視化したこと

で、さまざまな人の視点から街の魅力を伝えるとともに、再発見する機会となりました。



参加型プロジェクト「中野の記憶」フォトスポット

文化芸術や多様性の推進に向けた、表現や人権、 文化と街づくりに関する学びの場の創出

オンライントークイベントでは、異なる分野で活躍する有識者を招くことで、人の表現や人権、文化と街づくりなどについて多角的な視点から対話が生まれ、新たな観点から議論する場を創出しました。オンラインで配信したことによ

り、多くの人々に発信することができました。オンライン上のアーカイブは継続して公開するため今後も閲覧が可能であり、この先も社会への波及効果が期待されます。例えば、行政や企業、教育機関などでの研修やワークショップのテーマとして取り上げることや参考資料としても活用することができます。多様性を推進する社会においては意識改革のため

の有効な示唆を得る題材の提供となり、多様性への理解の促進やより包括的な社会の実現に寄与すると感じています。



オンライントークイベントの様子



「アール・ブリュット展」展覧会開催風景



展覧会チラシの表紙

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

本事業では、アール・ブリュット展を行うだけでなく、誰もが参加できる参加型プロジェクトや新しい視点での考察が広がるような他領域が越境するオンライントークイベントを企画し、さまざまな人が登場し交わる場となるよう工夫しました。また当法人では毎年、中野駅周辺の複数の商店街と連携して、街を舞台

に多様な人の表現の魅力に触れるアートイベントを行っています。各所の協力を得ながらそのイベントと同時期に本事業の開催を目指し、多様性や共生社会に対する地域住民や来街者の相乗的な意識の高まりにつながるよう取り組みました。

事業名

社会的養護のもとにある障害児等による 地域間交流から生まれる パフォーマンス作品の創作と発表

団体名

特定非営利活動法人芸術家と子どもたち
所在地：東京都豊島区
団体URL：https://www.children-art.net/

Outline

事業概要

児童養護施設やファミリーホームで暮らす子どもたち、地域の自立援助ホームや通所寮で暮らす施設退所者、障害者グループホームで暮らす若者等が、音楽やダンス、美術などの文化芸術活動を通して交流し、共に作品創作を経験するワークショップを行いました。発表公演の開催やコラム記事の公開を通して、様々な理由で生きづらさを抱える子どもや若者たちが、表現活動に取り組んだ成果を社会に共有するとともに、本事業の理解者や支援者の拡大、彼らの文化芸術活動による社会参加を促しました。

本事業で実施した内容

ワークショップの実施

開催日：6/18(土)、7/2(土)、7/16(土)、8/14(日)、
9/18(日)、10/30(日)、11/26(土)、12/10(土)、
12/11(日)

会場名：二葉むさしが丘学園、ファミリーホームしろやま、
オンライン

対象：児童養護施設 二葉むさしが丘学園
年長～高校3年生
ファミリーホームしろやま
中学1年生～高校3年生
地域で暮らす児童養護施設退所者、
障害者グループホーム利用者

参加人数：のべ88名

参加費：無料

アーティスト：セレノグラフィカ氏（隅地菜歩・阿比留修一／ダンスカンパニー）、新井英夫氏（体奏家・ダンスアーティスト）、板坂記代子氏（身体表現家）、はしむかいゆうき氏（音楽家）、水内貴英氏（美術家）

-実施内容

6～7月の初回は、まず施設ごとに子どもたちとアーティストの出会いのワークショップを行いました。その後、2施設の子どもたちや、地域で暮らす施設退所者や障害のある若者などが交流しながら、音楽やダンス等の表現活動に取り組み、創作活動を通して相互の関係を深めていきました。ダンスでは、自由な発想で考えたポーズをみんなで共有しながら振付をつくり、生演奏に合わせて即興的に踊ったり、お互いを認め合うことを大切に作り組みました。音楽では、一人ひとりにインタビューして集めた言葉からオリジナルの楽曲を制作し、その歌にオリジナルの振付も加えて発表に臨みました。また、10月の美術の回では、舞台美術兼衣装になる作品を制作し、大きな布に思い思いの絵を描き、それをつなげることで一つの舞台美術を完成させました。

発表公演

開催日：12月11日(日)

会場名：二葉むさしが丘学園 体育館

-実施内容

ワークショップで創作したダンスや音楽、美術を、一つのパフォーマンス作品として発表公演を開催しました。人とのコミュニケーションや、他者との関係性の構築、自己表現が苦手な参加者もいましたが、みんなが自信を持って観客の前でも堂々とパフォーマンスすることができ、障害児者や社会的養護の当事者が、他者との創造的な関わり合いを通して、自己肯定感やコミュニケーション能力を高めることにもつながりました。

コラム記事の公開

掲載日：2023年1月20日(金)

-実施内容

ワークショップや発表公演の様子のレポートと、施設職員による本事業の効果や成果についてのエッセイをまとめて、コラム記事として当NPOのウェブサイトにて一般公開しました。



一般公開されたコラム記事のWEB画面



本事業で得られた成果

アートを通して人や社会とのつながりをつくる

児童養護施設やファミリーホーム、地域の支援施設で暮らす社会的養護のもとにある子どもたちや、障害のある子どもたち、若者たちがワークショップに参加しました。自己表現や他者とのコミュニケーション、集団活動が苦手な参加者もいましたが、多様な背景を持つメンバーとの出会いを通して、他者との関わりを経験しながら、創造的な表現活動を行う場をつくれました。施設を出て地域で暮らす社



ダンスや音楽、美術など
たくさん表現を盛り込んだ発表公演
撮影：金子愛帆



美術の回には、舞台美術にもなる衣装を制作
撮影：金子愛帆

会的養護の経験者や障害のある若者たちの中には、余暇活動の過ごし方を自ら選択することが難しく、生活範囲が限定されがちなる者も多くいます。また、施設で暮らす子どもたちも、引き続き新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、外出や、外部との関わり方に制限のある生活が続いていますが、そのような状況下でも感染症対策を講じて施設職員とも連携しながら、一部オンラインとなったものの、



【にじいろマルシェ2022】と題して、
発表の構成を伝えてリハーサル
撮影：金子愛帆

発表公演や、コラム記事を通じた活動の周知

発表公演では、施設内の様々な立場の職員等が観覧し、職員にとっても子どもたちの新たな一面を知る機会になりました。毎回のワークショップには参加できなくても、日頃参加者の支援に携わっている施設職員等と、参加者の変化や成長を共有する

ことができたので、その後の施設での支援方法や、職員と子どもたちとの関係性の向上にもつながるといった意見があり、今後も継続した取り組みを希望する声がありました。また、ワークショップや発表公演の様子のレポートと、施設職員による本事業の

効果や成果についてのエッセイをまとめて、コラム記事として当NPOのウェブサイトにて公開しています。こうした活動の理解者や支援者の拡充につなげるツールとして活用するとともに、活動の周知につながりました。

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

ワークショップ後には、施設職員とアーティスト、スタッフによる振り返りを行い、参加者の変化や気づきを共有しながら、改善点や対応策を協議して、随時ワークショップの実施内容に反映しました。また、当NPOのアーティストのネットワークを活かし、ジャ

ンルの異なるアーティストが関わることで、様々な可能性を提示し、一人ひとりのニーズに応える選択肢も用意できました。多様な表現方法を知り、複数のアーティストに出会うことで、彼らの経験の幅を広げることにつながったと感じます。

Outline

事業概要

エミリア・ロマーニャ州立ボローニャ地域保健連合機構精神保健局の患者達による劇団「アルテ・エ・サルデーテ」の監督、演者、精神保健局の協力の下、演劇作品の共同制作を行い、演目は「マラー／サド」としました。映像と生の演技を混ぜ合わせるインタラクティブパフォーマンスの技法を取り入れ、演劇の在り方としてより効果的に見せる方法を試みました。世界精神保健デーの時期に日本国内5都市で上演、本番公演は世界の精神科病院とオンラインでつなげる取り組みも行いました。

本事業で実施した内容

演劇公演＋トークセッション

演目：「マラー／サド」

対象：どなたでも／参加費：無料

演者：精神障害当事者および精神保健福祉の支援
職従事者 合計6名

開催概要①：2022年10月2日(日)

名古屋公演《集客数：164名》

開催概要②：2022年10月5日(水)

沖縄公演《集客数：152名》

開催概要③：2022年10月7日(金)

山形公演《集客数：63名》

開催概要④：2022年10月8日(土)

福島公演《集客数：56名》

開催概要⑤：2022年10月10日(月)

東京公演《集客数：372名》

- 当日の流れ

1. 協力団体関係者挨拶 (約30分)

2. 「マラー／サド」上演 (75分)

日本側出演者：松本氏・大嶋氏・山崎氏・及川氏・
今畠氏・景井氏

監督：ナンニ・ガレツラ氏／助監督：ガブリエッレ・テザウリ氏

日本での演技指導者：中村麻美氏

日本での歌唱指導者：野元由紀子氏

衣装：玄麻衣子氏

字幕：横田さやか氏

3. アフタートークセッション (約60分)

日本側出演者／エミリア・ロマーニャ州地域保健連合
機構ボローニャ精神保健局前局長、精神科医 イヴォン
ヌ・ドネガーニ氏／世界各地の精神保健関係者(インド
精神科医 Soumitra Pathare 等)※当日の様子を以下の精神科医療施設等とつなげた
フィジー(家族会等)／イタリア(SPDC、Tasso、
REMS 他)／タイ／インド 他

稽古日程

演目：「マラー／サド」

2022年6月19日(日) 11:00-13:00 歌唱稽古

14:00-17:00 演劇稽古

2022年7月14日(日) 19:00-20:30 演劇稽古

2022年7月16日(土) 13:00-17:00 演劇稽古

2022年7月17日(日) 10:00-12:00 歌唱稽古

2022年7月29日(金) 18:30-20:30 歌唱稽古

2022年8月2日(火) 19:00-21:00 演劇稽古

2022年8月14日(日) 10:00-14:00 演劇稽古

15:00-17:00 歌唱稽古

2022年8月25日(火) 18:30-20:30 歌唱稽古

・ボローニャでの稽古

2022年9月7日(水)～9日(金)

2022年9月12日(月)～17日(土)

14:00～17:00

- 実施内容

新型コロナウイルスの影響で延期となっていた公演を、場面ごとに各地で撮影して映像に仕上げ、一般配信も行っていった映像作品を使用し、2022年度は同演目を生の演技とあわせ、少人数でも効果的に表現する方法を模索する内容としました。そのために必要な演劇と合唱の稽古を、演者である精神障害当事者および精神保健福祉の支援職従事者6名に対して行いました。



公演の様子



本事業で得られた成果

精神障害者の芸術活動の在り方についてメッセージを発信

精神障害をもつ当事者と医療福祉従事者が、稽古から本番までを通し、真に対等に舞台の上で演じ、同じメッセージを発することができました。また、当日の様子も様々な精神科医療施設等(フィジー(家族会等)／イタリア(SPDC、Tasso、REMS 他)／タイ／インド 他)とつなげることができました。広報にも力を入れ、16,000枚のチラシ配布に加え、事前告知動画の作成などを行ったことで、集客にも大きな成果が出ただけでな

く、企画の周知および精神障害者の芸術活動の周知につながりました。企画に賛同してくれた各公演地で、それぞれに企画を盛り上げてくださいました。沖縄では有志の合唱隊が公演終盤の歌の場面で参加したり、福島公演では看護学生がエキストラ出演してくれました。さらに、運営には各地の

有志が参加し、本企画の大きな目的である精神保健の普及開発および障害者演劇活動における基盤づくりにつながったと考えています。参加した障害者の社会復帰につながる一つの大きなきっかけを提供できたことで、どの参加者からも「一生の思い出に残る体験になった」「今後も演劇活動を続けていきたい」との意気込みを聞いています。



福島公演では看護学校の学生さんがエキストラで参加しました

障害者の芸術活動のレベルアップへとつながった

大きな成果としてイタリアでの稽古が実現できました。イタリア稽古ではアルテ・エ・サルデーテのメンバー(障害当事者の役者)と直接交流を持ち、意見交換も行いました。また、現地のプロの監督の指導を受けたことで、障害者の芸術活動のレベルアップへとつながったと思います。また少人数ではありましたがイタリアからの講師は、ナンニ・ガレツラ氏(アルテ・エ・

サルデーテ監督)をはじめ、アルテ・エ・サルデーテの創設者や助監督、指導者の招聘が叶い、直接観客にイタリアでの先駆的な取り組みを伝えることができ、直接的なコラボレーションを体験することができました。インタラクティブパフォーマンスに取り組み、映像と生の演技の交差の中で一つの演劇を作り出せました。アルテ・エ・サルデーテの劇団員の来日は叶いませ

んでしたが、遠隔でもともに演劇を作り上げている実感を持ってました。障害者同士の出演・観劇という枠におさめないことで、観客にとっても自分の身近な問題であると感じ取れました。今回得た芸術活動としての確かな手ごたえを次につなげ、今後も継続的に公演活動が続けることで、共生社会の実現に寄与できる可能性があります。



沖縄公演では38名の地域有志合唱隊とのコラボレーションが実現しました



公演の様子



公演の様子

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

2021年度開催の映像上映を見て関心を寄せてくださった有志の方で実行委員会を結成し、実行委員会形式で準備を進めることができました。実行委員会の中には、精神保健福祉関係の従事者だけでなく、一般の方も含まれており、市民と芸術活動関係者お

よび福祉関係者の協働が実現しました。衣装制作は、さらにその実行委員の知り合いにお願いすることができました。こうした活動を通して、今まで精神保健と接点がなかった方にも自然と活動に加わっていただくことにつながったと感じています。

ホスピタルシアタープロジェクト2022 —すべての子どもたちと家族のための 多感覚演劇の上演ならびに社会的認知度の向上

特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク

所在地：東京都多摩市

団体URL：<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~tpn/index2.html> 事業URL：<https://tpnkaorinakayama.wixsite.com/htp2019>

Outline

事業概要

障がいがあったり、医療的ケアを必要とする子どもたちとその家族が揃って舞台芸術を楽しめるよう、多感覚のインクルーシブシアターを創造し、巡演を行いました。社会的認知の向上を高めるために、これまでの場所・会場での上演に加えて、新たに沖縄県那覇市で開催の「国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ（りっかりっかフェスタ）」に協賛しての上演、川崎市ならびに川崎市文化財団の協力を得て上演を行うとともに、広報のあり方を模索しました。

本事業で実施した内容

実施概要

対象：障がい児とその家族等

募集定員：家族数6組～8組程度

(スペース、子どもの数によって変動)

参加費：子ども1+大人1=2,000円、大人追加1,000円、子ども追加500円、見学2,000円

開催日：2022年7月30日～31日(全4回)

会場名：那覇文化芸術劇場なはーと 小スタジオ

参加人数(有料)：家族数17組、追加大人11名、追加子ども11名、見学者9名

参加人数(無料)：家族数5組、見学者(フェスティバル関係者)多数

開催日：2022年10月8日～9日(全4回)

会場名：シャロームみなみ風

参加人数(有料)：家族15組、追加大人7名、追加子ども4名

参加人数(無料)：施設利用者3名+介護者1名

開催日：2022年10月22日～23日(全4回)

会場名：Umiのいえ(神奈川県横浜市旭区鶴ヶ峰)

参加人数(有料)：家族18組、追加大人7名、追加子ども3名、見学者4名

開催日：2022年11月6日(全2回)

会場名：コミュニティカフェなつのこ

参加人数(有料)：家族9組、追加大人1名、追加子ども3名、見学者4名

開催日：2022年11月13日(全2回)

会場名：島田療育センターはちおうじ

参加人数(有料)：家族3組、追加子ども2名

参加人数(無料)：島田療育センターはちおうじ利用者3組(大人5名、子ども5名)

開催日：2022年11月20日(全2回)

会場名：パルテノン多摩 クリエイティブラボ

参加人数(有料)：家族13組、追加大人9名、追加子ども6名、見学者5名

開催日：2022年11月27日、12月4日(全4回)

会場名：放課後等ディサービス ブルーワン

参加人数(有料)：家族24組、追加大人21名、追加子ども16名、見学者7名

開催日：2022年12月17日～18日(全4回)

会場名：川崎市国際交流センター レセプションルーム

参加人数(有料)：家族31組、追加大人21名、追加子ども13名、見学者6名

参加人数(無料)：川崎市3名、財団1名

- 「迷いの森 Lost in the Forest」

空間の中に迷い込むと、そこは深い森です。子どもたちが空間や人に慣れるために、美しいライブ音楽とともに始まるプレ・パフォーマンスでは、パフォーマーたちとともに絵描きをし、それを使って影絵づくりを行いました。本パフォーマンスでは、感覚を刺激するユニークな仕掛けとパフォーマンスをもって、森の四季を紡いでいきました。最後には、参加した子ども一人ひとりの写真を投影するとともに、その名前を歌い上げ、生命を祝しました。



都内の公演から 撮影：奥秋圭



都内の公演から 撮影：奥秋圭



本事業で得られた成果

コロナ禍を越えて、より多くのご家族へ、より幅広い地域へ

コロナ禍、カンパニーの中にも感染者をだしながらも、6か月にわたる全公演日程を無事、終了させることができたこと。それが何よりも「成果」と言わせていただきたいと思います。結果として、有料で参加されたご家族は130組を超え(招待を含め140組)、有料参加者数は436名(無償参加者を含めると約500名)となりました。初めて公演を行う沖縄で、障

がい児とご家族の参加を得られるかが懸案事項でしたが、アクセスコーディネーターとともに、自治体や学校、関係団体へ働きかけたことが幸いして、多くの該当参加者を得ることができました。また、川崎市と川崎市文化財団との協働により、初めて特別支援学校、支援学級の児童・生徒一人ひとりにチラシを配布し、川崎市国際交流センターでの公演に

は、多くの参加者を得ることができました。川崎市と川崎市文化財団は、すでに次年度に向けて「ネクスト」を考えはじめて下さっています。当初から各回6家族と規定していますが、アクセスコーディネーターやインターン生等のサポートを得ることで、広い会場の場合には定員を伸縮できるような体制を用意できました。

子どもたちの体験、情緒、社会性

11月27日と12月4日の会場となった放課後等ディサービス「ブルーワン」の管理者である片山夕香氏が、知的障がいのある子どもが何をどのように覚えているのかを探る追体験を試みていただきました。興味深いオブザーベーションとしては、「演者が踊る場面では感想ではなく、『ドンッドンッ』と床を叩き始めた」「視覚で得た情報に振動や音が強く残っていることが何

われた」「劇を通して発生した感情は、他児に伝える行動に発展すること、感覚と感情が一緒に育っていることがわかった」等がありました。また、毎年リピートで参加する家族たちからは、言葉を発しない重い知的障がい児や重度重複障がい児たちが会場にやってくると、これから始まる何かを理解し、期待し、「遊び方」「コミュニケーション」を発展させていること

が強く感じられました。さらに、家族の絆、家族の記憶の重要性を問う機会にも恵まれました。なかなか揃えない家族が揃って鑑賞したことで、子どもの行動が大きく変わり、喜びを全身で表現していたこと、また、4世代での参加もあり、コロナ禍でなくても困難な「おでかけ」の場となり、家族の記憶を紡ぐことができたのではないかと感じています。



沖縄公演から 撮影：守礼写真館



沖縄公演から 撮影：守礼写真館



沖縄公演から 撮影：守礼写真館

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

劇作家や演出家といった存在を置かず、参加するパフォーマー、ミュージシャン、スタッフら全員が、「すべての子どもたちが演劇的体験を楽しむ」という同じ目的をシェアして、公平に意見を出し合い、ゼロから作品を生み出し、小道具等も創り上げ、仕込み

を行い、ツアーを行っていく集団体制が、ホスピタルシアタープロジェクトの特徴です。担当する仕事において、一人ひとりがリーダーとして何が大切なのかを判断できる存在になり、常に想定外の反応が返ってくることに対応できる体制づくりに取り組みました。

事業名 文化芸術創作活動と鑑賞を通じた多様性理解の促進と障害のあるトップレベルのパフォーマーを
発掘育成するための取組

団体名 認定特定非営利活動法人スローレーベル
所在地：神奈川県横浜市
団体URL: <https://www.slowlabel.info> 事業URL: <https://www.slowlabel.info/6187/>

Outline

事業概要

地域発信の巡回可能な、みんなの「表現」の違いと「想像」の違いを楽しむ、対話を通じた多様性理解を促進するプログラムです。オーディションを開催し、年齢や障害の有無を問わずパフォーマーを選出し、解釈の余地を多分に持つおとぎ話を題材にしました。誰もが知っている物語も「場所」や「人」が変わることで全く違う結末にたどり着く可能性があることを、あらゆるタイプの会場（場所）を活用し、参加者、そして観客との対話の中から体感する創作活動の実施と発表を行いました。

本事業で実施した内容

オーディション・創作 / 稽古

開催日：2022年8月12日（オーディション）
2022年8月27日～9月19日（稽古全4回）
会場名：座・高円寺阿波おどりホール（オーディション）
永福地域区民センター、
阿佐谷地域区民センター、杉並区中央図書館、
子ども・子育てプラザ和泉（稽古）

参加人数：20名
参加費：無料

- 実施内容

さまざまな障害のあるプロパフォーマーとして活動する意欲のある人材をオーディションで選出し、アクセシビリティの専門家や通訳の配置を前提とせず、その時々に参加する人たちが対話の方法や合理的配慮を共に創造する可能性を探りながら、創作活動を実施しました。



稽古の様子



オーディションの様子



オーディションの様子

Open to the Public

開催日：2022年9月17日・9月24日
会場名：杉並区中央図書館、
子ども・子育てプラザ和泉
参加者数：197名（定員満席）
参加費：無料

- 実施内容

オーディションで選出した7名のキャストとアートサーカスパフォーマンス集団「くるくるシルク」がおとぎ話を題材に創作したワークインプログレス作品を対話鑑賞型プログラムとして発表しました。

ショーケース@座・高円寺

開催日：2022年10月15日
会場名：座・高円寺
参加人数：61名（定員満席）
参加費：無料

- 実施内容

9月に実施した「Open to the Public」を受け、視覚・聴覚障害のあるモニターからの意見を取り入れ、さらに創作を行った作品を対話鑑賞型プログラムとして発表するとともに、本事業の解説、座・高円寺芸術監督佐藤信氏と弊社団体代表栗栖良依とのアフタートークを実施することで、参加者・観客との対話・交流機会を持ちました。



みんなの絵本 - メインビジュアル



本事業で得られた成果

障害のある人と障害のない人が協同し、
これまでにない全く新しいやり方で創作を実現

これまでの文化芸術活動における「創作」は、台本といった決められた形があるものに対して、演出家主導のもとパフォーマーが合わせていく作業であることが一般的でした。そんな中、年齢や障害の有無など様々な「違い」を個性として寄せ集め、誰もが知っているおとぎ話を題材に、全く新しい作品を創り上げる、という進め方を実現したことが、本事業最大の成果と言えます。アクセシビリティの観点においても、継続的にあらゆる地域で事業展開が可能となる

ことを想定し、手話通訳士といった一般的なサポートを導入するのではなく、そこに参加する人たちの中でコミュニケーションを取る方法を共に生み出しながら創作していきました。この方法が、新しいコミュニケーション、そして新しい創作の可能性を証明し、互いの「違い」を認め合い、創り上げる、という機会創出につながっています。参加したパフォーマーからも、これまでに経験のない創作方法を体験することで、新しい発見もあり、今後の文化芸術活動に対す

る意欲が高まったという感想が出ています。障害がある人と障害がない人が一堂に集い、交流し、共に創り上げる場やその機会の必要性を裏証できました。



座・高円寺

対話を通じた相互理解の意義を体感する機会を、
地域と密接に連携し創出

本事業は「年齢や障害の有無等に関わらず、誰もが気軽に文化・芸術に親しめる」ことを文化目標と掲げる杉並区を共催に、同区の文化芸術活動主要拠点として多彩なプログラムを実施する座・高円寺からの協力を得て、地域社会の特性を活かしたプログラム作りの実現は大きな成果となりました。乳幼児をはじめ幅広い年齢層へ鑑賞機会を創出するだけでなく、障害のあるパフォーマーとの交流機会が生み出されたことによって、障害のある人と障害のない人とのコミュニケーション機会を

提供できました。座・高円寺で実施したショーケースでは、来場した観客に向けてアンケートを実施し、95%を超える「このようなプログラムがあったら是非参加したい」との回答を得ており、対話鑑賞型プログラムならではの場の空気感が交流を促す結果となりました。多文化共生のあり方を、今実際に起きている社会変容を柔軟に取り入れつつ、共に創り出す場と機会を、パフォーマーと観客と一緒に

創作する文化芸術活動を通して提供できました。各地域に合ったその場だからこそ生まれる共生の形を体感する経験が、相互理解を深めることにつながる一例になりました。



Open to the Public

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

弊社団体では国際イベントを含めた多様な事業における、障害のあるアーティスト、パフォーマーを発掘・育成するためのプラットフォームやプログラムをデザインしました。障害のある人、ない人が対話を通じた相互理解を、柔軟かつその場に応じた方法を創出しな

がら実現することを重要視しました。実際に、作品発表後に参加者全体で対話する機会を設け、かつモニターを設置し、アクセシビリティ向上の観点でどのような改善が必要かフィードバックを受けるなど、具体的な機会創出も重要な要素になると考えています。

見ル 聞ク 感ズル みんなの対話型鑑賞会

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団(横浜市民ギャラリーあざみ野)

所在地：神奈川県横浜市

<https://artazamino.jp/event/creativeageing-20230108>

団体URL: <https://p.yafjp.org/> 事業URL: https://artazamino.jp/event/creativeageing_20230109

Outline

事業概要

高齢者・認知症患者が、病気や環境の変化に左右されることなく、その家族・介護者などの関係者とともに、日常の中で美術館やギャラリーに行って新しい経験をする楽しみを享受し続けられることを目標に、「対話型」を中心とした鑑賞プログラムを実施しました。初年度となる2022年は基盤整備の年と位置付け、対話型鑑賞のファシリテーター養成研修会や認知症に関する座学講座を開催しました。併せて地域の福祉施設と連携して鑑賞会を行っています。

本事業で実施した内容

【ファシリテーター養成研修会】

開催日：2022年9月1日(木)、9日(金)、
10月14日(金)(全3日)

会場名：横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ

対象：職員、市内美術施設関係者、福祉関係者など

募集定員：20名／参加人数：22名

参加費：無料

- 実施内容

対話型鑑賞の基礎的な講習に加え、当館の特色や「高齢者・認知症患者」の特性を考慮したファシリテーター研修会を開催。最終日は鑑賞会を想定したリハサルを実施しました。

講師：NPO法人芸術資源開発機構 (ARDA)

【鑑賞会】

開催日：①2022年10月28日(金)

②2023年2月22日(水)

会場名：横浜市民ギャラリーあざみ野

アトリエ、展示室

対象①：高齢者・軽度～中軽度認知症の方とご家族

募集定員：6組程度／参加人数：5組10名と、

ケアプラザ職員4名

対象②：若年性認知症通所施設利用者 認知症軽度～

重度16名と、ご家族及び施設スタッフ9名

参加費：無料

- 実施内容

①横浜市荏田地域ケアプラザとの共催で2時間の対話型鑑賞会を実施しました。

②軽度～重度まで症状が様々であるため、施設と事前に相談し、時間や内容の異なる2種のプログラム(対話型鑑賞と展示室散歩)を実施しました。

【専門家による座学講座】

「いくつになっても楽しめるアートスペースを考える ～高齢者・認知症の方とご家族のための、心にも体にもいい Creative Ageing (クリエイティブエイジング)～」

・第1回 「心にも体にもいい」美術館体験

開催日：2023年1月8日(日)

会場名：横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ

募集定員：30名程度／参加人数：34名

参加費：無料

・第2回 みんなで知ろう、認知症

開催日：2023年1月9日(月・祝)

会場名：横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ

募集定員：30名程度／参加人数：22名

参加費：無料

- 実施内容

医療・福祉・美術の面から高齢者や認知症について理解を深め、いくつになっても自分らしく安心して暮らすためにアートができることを考えるための講座です。

講師：独立行政法人国立美術館本部主任研究員 稲庭彩和子氏(第1回)、おおさこ心のクリニック院長 大迫正行氏(第2回)、横浜市荏田地域ケアプラザ職員(第2回)



ファシリテーター養成研修会



本事業で得られた成果

地域連携の繋がり・拡がり ～専門性を合わせて、できること～

地域のケアプラザや若年性認知症通所施設、コミュニティスペースやクリニックと繋がりを新たに作り、鑑賞会や講座を企画しました。当事者および介護者の孤立を防ぎ、認知症の進行を遅らせる非薬物療法としての効果に期待を寄せ、この事業の伴走者として当事者とのつなぎ手という重要な役割を担っています。2回の座学講座では当館ボランティアを含む市民が市内外から参加。アンケートで「文化施設と介護にこれだけ接点があるとは思わなかった」

「高齢者が増え様々な負担が増えるが他人事ではなく、自分にも関わりがあることとしてWell Beingを意識できるゆとりある世の中になれば」など、様々な背景を持つ市民の関心の高さが伺えました。ファシリテーター養成研修会では当館を含め3つの市内美術館・ギャラリーの学芸員、エデュケーター12名が参加、認知症の方を対象とした鑑賞のノウハウを共

有しました。このプログラムが市内の各所で多面的に広がっていくことが期待できます。



講座の様子
第1回「心にも体にもいい」美術館体験



講座の様子
第2回 みんなで知ろう、認知症

アートが引き出すことのできる、 普段とは異なる表情

「最近は美術館に行けなくなった」と話す、初めての場所で不安げな表情の参加者が、展示室の前に立った瞬間に顔をパッと輝かせました。普段寝たきりの方が家族に支えられ、時に鼻歌を口ずさみながら鑑賞



鑑賞会「横浜市民ギャラリーあざみ野でアートを楽しもう」

に参加したり、普段はあまり会話がないう家族が作品について熱く語り合ったりと、人の個性と同じく、アートとの関わりは人それぞれでした。この多様性を引き出せることがアートの力であり、改めてアートの必要性を実感しました。ただ同時に、高齢者・認知症の方ならではの作品選びや症状



鑑賞会「横浜市民ギャラリーあざみ野でアートを楽しもう」

大きく、外出が難しかったり、来館する前にも様々な障壁があります。そのような問題点も、関係各所と連携することで障壁を少しずつ取り除く工夫をしながら開催を重ね、このプログラムの認知度を上げていきたいと考えています。

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

施設の所在地であるあざみ野には、ケアプラザ・通所施設、薬局、大学や、商店街などの市民によって構成される「認知症にやさしい街あざみ野実行委員会」という団体があり、認知症の取組に対する理解者が多く、連携する素地をつくることができました。

また、当施設ではこれまでも幅広い年代に向けた教育普及事業を実施してきただけでなく、障害児対象の造形プログラムや視覚障害者との鑑賞会などを開催してきました。多様性に対応する事業の経験が、このプログラムの実施に活かされています。

Outline

事業概要

本事業は、芸術家チーム（デフ・パペットシアター・ひとみ／花崎攝）と一般の高齢ろう者が一緒にアート活動に取り組むプロジェクトです。参加者と密にコミュニケーションを取りながら、ワークショップを通じて高齢ろう者の思い出を表現に昇華します。人形を通して、参加者自らが思い出を視覚的にとらえ直す機会とするため、2022年度は特に人形劇の手法に焦点を当てた共同創作・発表を行いました。人形劇の創作過程及び発表会の模様は、動画と冊子にして広く発信しました。

本事業で実施した内容

リサーチ・ワークショップ

開催日：2022年8月22日～11月14日

会場名：聴覚・ろう重複センター桃

対象：施設を利用する高齢のろう者 約20名
（日によって変動有り）

参加費：無料

- 実施内容

芸術家チーム（デフ・パペットシアター・ひとみ／花崎攝）が施設を訪問し、7回の訪問の中で施設利用者を対象とした聞き取り（手話）および人形劇の創作・発表に向けたワークショップを実施しました。参加者の思い出を大テーマに設定し、学校生活や仕事、家族などのチームに分かれてそれぞれの内容を掘り下げました。各チームで劇化するエピソードに合わせた人形の構造や操演方法は芸術家チームのメンバーが提案し、思い出の当事者自らがそれぞれに人形を製作、操演に取り組みました。期間中、現地訪問が難しいときにはオンライン上で参加者への操演指導を行いました。



成果発表会の模様

成果発表会

開催日：2022年11月15日（火）

会場名：春日井商工会議所 大会議室

参加者：関係者 35名（出演者含む）
一般来場者 13名（定員15名）

参加費：無料

- 実施内容

ワークショップを通じて創作した人形劇の成果発表会（約60分）を開催しました。近隣の手話関係者や文化関係者を対象に呼びかけを行い、ほぼ定員の集客がありました。また、その際にリハーサル風景を含めた記録撮影を実施しました。



発表に使用した人形や小道具の一部



本事業で得られた成果

ワークショップを通じて感じられた人形劇的手法の有効性

今回は参加者自らが人形の製作と操演を行いました。はじめは戸惑っている様子の参加者も多くいたものの、絵や文章よりも具体的に形のある人形は参加者自身の愛着感や達成感を喚起し、結果的にはより意欲的な表現に繋がりました。ワークショップが回を重ね、発表会で使用する人形が揃ってくるとともに、それらに触発さ

れた参加者が台本上で指定されていない小道具まで自宅で製作し持参してきたこともありました。高齢のろう者の中には、かつて木工や縫製、理容業など手先を使う仕事をされていた方も多く、今回の企画は結果的にそれらの経験を活かせる機会ともなりまた、人形劇の創作はエピソードの当事者に対して視覚的な

フィードバックを生み、読んで字のごとく「自分の人生を見つめなおす」創作過程となりました。人形劇の中にはろう者をとりまいていた社会のマイナスな側面についてのエピソードも含まれましたが、それらの場面においても、人形への俯瞰的なまなざしが自らの人生への肯定的な認識をもたらす効果を生んでいました。

動画配信および冊子配布を通じたプロジェクト成果の発信

成果発表会やそこに至るワークショップ、リハーサル等の模様を動画および冊子の形で関係機関に発信しました。高齢ろう者の存在や生き方を発信するとともに、個人の記憶や

社会的少数者を取り巻く歴史に対する人形劇手法によるアプローチの一例として、障がい者関係団体や文化関係団体を中心に周知活動を行いました。

- 動画配信 3月
- 事業紹介冊子 3月(300部)



ワークショップ風景



リハーサル風景



リハーサル風景

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

重要な課題は、参加者である高齢のろう者と芸術家チームのコミュニケーションにありました。芸術家チームにも手話を使える人間はいますが、高齢のろう者の使う手話はときに個性が強く、慣れるまでは読み取りが難しい場合があります。補助スタッフの

同行も考えましたが、より親密な関係の中で自然な対話を引き出せるよう、今回は施設スタッフに全面的な協力を仰ぎました。ワークショップ各回終了後には、施設スタッフと芸術家チームのミーティングを開き、反省会と次回に向けての作戦会議を行いました。

Outline

事業概要

障がいのあるアーティストの制作拠点「若狭ものづくり美学舎きらりアート部」を県内に拡充、2カ所にサテライトアトリエを開設して多数のプロ級作家を育成し、第13回福井県障がい者アート作品公募「きらりアート展」の充実を図りました。また、当法人が運営する熊川宿若狭美術館において、福井県きらりアートアーカイブ事業を推進するとともに、障がい者アート、子ども美術、現代美術を同時同列に展示しました。障がい者アートの鮮烈な独自の世界を発信し、真の共生地域社会の実現に取り組みました。

本事業で実施した内容

【若狭ものづくり美学舎きらりアート部活動】

- ・若狭アトリエ 開催日：週1回
参加者：障がいのあるアーティスト12名、指導者6名
- ・春江アトリエ 開催日：週1回
参加者：障がいのあるアーティスト6名、指導者2名、サポーター7名
- ・越前アトリエ 開催日：週1回
参加者：障がいのあるアーティスト14名、指導者2名、サポーター4名

- 実施内容

2011年春に開設した「若狭ものづくり美学舎きらりアート部」を、昨年度から福井県全体に広げる計画で、嶺北地域2カ所、春江と越前でサテライトアトリエを開設しました。受講生全員が福井県きらりアート展に応募し、多数入賞という結果となりました。また、若狭ものづくり美学舎きらりアート部での多くの障がいのあるアーティストの制作活動と、熊川宿若狭美術館での企画展、個展<坪内一真氏、田中さかえ氏、武田千香氏、岡本隆多氏、中西軍治氏>など、美術館の充実した発信活動が相俟って、当法人の事業として大きな展覧会の開催に取り組むことができました。その他、おおい町や福井県立美術館での展覧会を開催できました。きらりアート展、熊川宿若狭美術館での各企画展、おおい町での展覧会、福井県立美術館での展覧会等に併せて研修会を実施し、障がいのあるアーティストの交流、指導者、サポーターの資質向上に努めました。

【熊川宿若狭美術館での企画展】

《第一回》
開催日：2022年4月30日～6月26日
来場者数：6,136人

1階が現代美術作家「下崎滋彦彫刻展—祈りの誤差—」、2階が障がいのあるアーティスト「坪内一真」展、子ども美術・「いのちがやく子ども美術展～4,5歳児の絵画」、現代美術特別展<アンソニー・カロ 河合イサム 熊谷守一 斎藤重義 坂本善三>

《第二回》
開催日：2022年7月3日～8月29日
来場者数：2,539人

1階が現代美術「空間とマテリアルの協奏曲～長崎の作家たちと長谷光城」展、2階が障がいのあるアーティスト「田中さかえ」展、「坪内一真」展、現代美術特別展

《第三回》
開催日：2022年9月4日～10月24日
来場者数：4,081人

1階が現代美術作家「西井武徳展」、2階が障がいのあるアーティスト「武田千香」展、「岡本隆多」展、現代美術特別展<斎藤義重 坂本善三>

《第四回》
開催日：2022年10月30日～12月25日
来場者数：3,230人

1階が障がい者アート「きらりアート展 <一般の部入賞作品>」、2階がきらりアート指導アーティスト3人展<阪本幸円・朝倉俊輔・小林雅代>、現代美術特別展

《第五回》
開催日：2023年1月8日～2月6日
1階が子ども美術「第10回いのちがやく子ども美術全国展 in WAKASA 2023 選抜展」、2階が障がい者アート就労継続支援B型事業所 若狭ものづくり美学舎きらり「きらり織」展、現代美術特別展

《第六回》
開催日：2023年2月11日～3月27日
1階が現代美術「福井の若手美術作家5人展」、2階が障がいのあるアーティスト「中西軍治」展、「若狭ものづくり美学舎展」



ギャラリートーク
障がいのあるアーティスト「田中さかえ」展、「坪内一真」展、西井武徳展 於：熊川宿若狭美術館
障がいのあるアーティスト「田中さかえ」展、「坪内一真」展 於：おおい町総合市民センター



本事業で得られた成果

障がい者アートの魅力を発信し、
共生地域社会づくりに貢献

第13回福井県障がい者アート作品公募「きらりアート展」の開催、年間6回に及ぶ熊川宿若狭美術館における障がい者アート、子ども美術、現代美術を同時同列に展示する企画展の開催によって、障がい者アートの理解がより一層広がり深まってきています。当事業の美術館

での企画展の発展的成果として、他県の関係者から展覧会出品依頼も多くなり、今年度は福井県、おおい町、若狭町などの行政と連携しての県内外で企画展、交流展、個展などが開催できました。中でも、福井県・若狭町・当法人主催で福井県立美術館にて「衝撃の現代美

術～きらりアート・きらぼし☆アート交流展」を開催し、福井、岡山の作品264点を展示し、多くの福井県民に鑑賞いただいたのは大きく、福井県内での共生地域社会づくりへの確かな歩みを印すことができました。

障がい者アーティストの制作の場を広げ、
多くのプロ級作家を育成

2011年春に開設した若狭ものづくり美学舎きらりアート部活動を、福井県嶺北地域の坂井市春江町と越前市でサテライトアトリエとして拡充しました。制作に取り組む障がいのあるアーティストも30名を超え、指導者、サポーターの資質も向上して

います。「福井県障がい者アート作品公募『きらりアート展』」で多数が入賞するなど、多くのプロ級作家の育成につながっています。その中で、福井県立美術館での交流展で当法人きらりアート部所属の作家36名の作品240点を展示し、それぞれの

作家の独自性を明らかにしてアピールすることができました。また、福井県若手美術作家支援事業対象者2名の1人として障がいのあるアーティストの江戸雄飛氏が選出され、東京・銀座での個展が開催されることになったのは大きな成果と言えます。

障がい者アート、子ども美術、
現代美術を同列に展示し、多くのファンを獲得

熊川宿若狭美術館における障がい者アート、子ども美術、現代美術を同時同列に展示する企画展の充実、障がい者アートをはじめ3つの現代美術としてお互いの評価を高めあっています。また、このような美術館の展示は、他の美術への関心

を深めあうとともに、多様な美術にふれあうことが出来る魅力ある観光スポットとして、日本遺産・国選定重要伝統的建造物群保存地区「若狭町熊川宿」を訪れる観光客を巻き込んで、多くの障がい者アートファンを広く獲得してきています。「小コレ

クターの会」の活動や、障がい者アート作品を若狭町ふるさと納税の返礼品としての買い上げなど、『障がい者アート作品を我が家の玄関に』を合い言葉にコレクションが地域全体に広がっています。

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

当法人は、まず、多くの障がい者がアート作品制作に、楽しく取り組む活動の支援を継続できる人的・物的環境の整備に取り組みました。古民家を改修し、作品を収蔵・展示する小さな美術館をつくり、発信活動の実施や、障がいのあるアーティストの励みに

なる公募展の企画・運営、鑑賞された方が作品の理解を深めるための学習機会を準備してきました。連携して取り組む体制づくりに努めてきたことで、文化庁の力強い支援・委託事業をいただきながら、成果を上げることができました。

「表現未満、プロジェクト」 ～共生社会実現のための人づくり・場づくり～

特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ
所在地：静岡県浜松市
https://sites.google.com/cslets.net/
団体URL: http://cslets.net 事業URL: hamamatsuchimatakaigi?pli=1

Outline

事業概要

静岡県浜松市中心市街地において、重度知的障害者の存在を核としたアートイベント（オン・ライン・クロスロード）、場づくり（ちまた公民館）、地域との連携会議（浜松ちまた会議）を行い、これまでとは違う価値感を街づくりへと実装しました。本事業は障害を知らなかった人々が障害を知り、交流することで、共生社会や持続可能な社会について考える契機となっています。多様な人たちとの交流や体験の場を創出し続けることで、新しい文化を生んでいくことを目的としています。

本事業で実施した内容

「オン・ライン・クロスロード2022」

開催日：2022年10月22日、23日、29日、30日
会場名：松菱百貨店跡地
関係者：200人
来場者数：1万人以上（うち29日は5,000人以上）

- 実施内容

浜松市中心市街地にある松菱跡地（1,400坪）を使って、多様な人たちが交差する「オン・ライン・クロスロード」を実施しました。重度知的障害者を核としながら、だれもがくつろぎ遊ぶことができる、クラブ、コンサート、演劇、マルシェ、スケートボード、BMXやアートイベント（ベッドプロジェクト：アーティスト深澤孝史監修）を街のステークホルダーとともに作り出しました（関係人口200人）。4日間で1万人以上の来館者があり、大盛況となりました。



オン・ライン・クロスロード 2022 全景

「浜松ちまた会議、ちまた公民館、人材育成」

開催日：2022年10月～2023年3月
会場名：浜松市中心市街地
対象：近隣住民、市民
参加者：1日利用20人以上 2,400人以上

- 実施内容

「まちづくりを考えたら、福祉にたどりついた」と銘打って、街のステークホルダー30団体とともに「浜松ちまた会議」を結成し、2022年10月より浜松市中心市街地に「ちまた公民館」をオープンしました。コロナ禍後の衰退した街において、福祉を軸とした街のあり方を実験しています。また共生社会実現のための人材を育成する事業も始まりました。



ちまた公民館 外観



本事業で得られた成果

重度知的障害者の存在が コロナ禍後の街の新たな文化を創り出す

衰退した中心市街地を舞台に行ったアートイベント「オン・ライン・クロスロード 2022」と、地域の文化創造発信拠点をつくる「ちまた公民館」は、経済一辺倒の街から人々が幸せに生きる街へと変革するための多くの機知と示唆を示すことができました。コロナ禍後、人々の幸せの在り方が揺らぎ、新しい模索が始

まった社会の中で、多様な人たちが集積しやすい街にも新たなビジョンが求められています。そうした中で、重度知的障害者が中核となって存在し、街で遊ぶ、活動する、存在することを軸とした本プロジェクトによって、街の様相は一変しました。それは街が物質的な豊かさや、モノの売り買いに終始するだけではなく、多

様な人々の交流が新しい価値観や文化を生み出す可能性があることを、改めて示す機会となりました。同時にこの事業を通して、重度知的障害者が街の大切な一員として認知されるとともに、彼らの社会的な役割をつくり出していけると確信しています。

重度知的障害者の存在を知り、 一緒に活動することが共生社会の理解と人材育成になる

今回多くの団体と協働で行った「オン・ライン・クロスロード 2022」や、街のステークホルダーが集う「浜松ちまた会議」では、今まで重度知的障害を知らなかった人々が、その存在を知る機会となりました。事業

を通して、多くの関係者が障害のある人の姿を目の当たりにし、時間を共に過ごす機会をつくり出すことによって、それぞれの価値観や考え方に何らかの影響を与えることが解りました。本事業は街の様相を変えてい

くだけではなく、多様な人がともにいる社会（共生社会）を理解し、実装する人材の育成の場にもなりました。こうした知見を活かし、今後の事業につなげていきたいと考えています。



オン・ライン・クロスロード 2022 障害のある人達もまつり



ちまた公民館内部の様子



オン・ライン・クロスロード 2022 BMXスケボーパーク

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

当法人は障害福祉施設も運営し、様々な文化活動を行ってきました。そして重度障害者の施設が、障害を知らない人たちにとって多くの学びと示唆を与える場になっています。この事実は、障害福祉施設が障害者にサービスを提供するだけではなく、様々

な人たちにとっても非常に可能性のある場になることを示しています。今後、こうした施設が地域に開き、多様な人たちがともに時間を過ごす場となることは、地域にとっても、当事者にとっても価値あるものになると感じました。

事業名 **みんなで作る
「ぐるりまるごと劇場」プロジェクト**

団体名 社会福祉法人グロー
所在地：滋賀県近江八幡市
団体URL: <https://glow.or.jp/> 事業URL: <http://stage.art-brut.jp/>

Outline

事業概要

2022年度より県内を巡回しながら開催する「糸賀一雄記念賞音楽祭」(以下、音楽祭)と連携し、劇場・音楽堂等の職員や地域住民、アーティスト等が障害者の表現活動に出会い、共に学び、出演者やスタッフとして活動する中で、新たな協働関係や価値を見出すことを目的に複数のプロジェクトを展開しています。障害者や地域住民が企画段階から参加する仕組みを作り、障害の有無に関わらない対等な関係性が社会に浸透していくことを目指しました。

本事業で実施した内容

企画・運営に関わる
プロジェクトチームの結成と運営

開催日：2022年6月24日(金)～2023年1月12日(木)
(計5回開催)
会場名：ひこね市文化プラザ他
参加者：プロジェクトメンバー(6名)
アドバイザー(1名)
内容：音楽祭の方向性、構成や演出等に関する協議、
アクセシビリティに関する会場視察等

- 「糸賀一雄記念賞音楽祭」の取組から学ぶ絵屏風制作
期間：2022年5月～8月 音楽祭出演者やスタッフ
等への取材を実施(計9回開催)
対象：過去の音楽祭出演者、支援者、家族、スタッフ
等(計45名)



実際に表現活動を体験する研修の様子



研修は「出会うこと」「学ぶ合うこと」を重視



江州音頭にオリジナルの動きを加えて創作

「ぐるりまるごと劇場」づくり
実践研修プログラムの実施

1 劇場・音楽堂等スタッフを対象としたワークショップや
研修の実施
開催日：2022年8月23日(火)～10月18日(火)
(計3回開催)
会場名：ひこね市文化プラザ
参加者：研修受講者(延べ42名)
内容：劇場に求められること、舞台芸術の鑑賞サポート、
当事者の声から学ぶ、取組事例等

2 アーティストを対象とした表現活動ワークショップ(①②)
開催日：2022年8月～11月
(①5回 ②5回 計10回開催)
会場名：①能登川コミュニティセンター(東近江市)
②ひこね市文化プラザ(彦根市)他
参加者：ワークショップ参加者
(①延べ84名 ②延べ48名)
内容：①湖東地域の伝統芸能「江州音頭」を用いた
表現活動ワークショップ
②湖東地域で音楽活動に取り組む団体と
アーティストの表現活動ワークショップ

3 地域住民を対象としたワークショップや研修の実施
日時：2022年8月21日(日)～10月18日(火)
(計3回開催)
場所：ひこね市文化プラザ(彦根市)
参加：研修受講者(延べ41名)
内容：事例報告、舞台芸術の鑑賞サポート、
当事者の声から学ぶ、学びの共有等



本事業で得られた成果

多様な参画によって生まれる新たな協働…
「人と人がつながる社会」に向かって

本事業では「障害のある人の表現活動を地域の人が支える」という単方向的な活動ではなく、それぞれに合った参加可能な状況を作ることを重視し、出演者としてのワークショップ参加や企画スタッフ、研修講師、会場ボランティア等、障害の有無に関わらず個々のチャレンジにつながる場や機会を作りました。その結果、今回初めて音楽

祭に関わるという人との出会いが多く、活動を続ける中で参加者同士の緩やかなつながりも生まれました。企画に参画した人からは、「取り組みを通して、多様な人々が認め合い、ともに支え合う社会へ1歩ずつでも着実に広がっていると感じました」という声が寄せられました。文化芸術を媒介とし、ともに活動することは参加者に気づきを与え

ます。気づきが次の行動につながり、その行動が地域に小さな変化を生み出します。この継続が確実に社会に変化をもたらすという手応えと可能性を強く感じました。私たちの目指す、“障害の有無に関わらない対等な関係性”と、“文化芸術を通して人と人がつながり合う社会”の土壌づくりにつながったと考えています。

これまでの実践と成果を未来に引き継ぐ

「音楽祭絵屏風」の制作にあたっては、これまでの音楽祭の出演団体等にスタッフが外向き、音楽祭の歴史を彩る名場面や思い出、舞台裏やWSのエピソードの聞き取りを行いました。出演者や家族からは「みんなで出演前に楽屋で円陣を組んで気持ちを高めて参加していた」「ステージ上のわが子を見て、スターだと思った」等、音楽祭がこれ

まで関わった人の世界を豊かに広げてきたエピソードを聞くことができました。また、制作スタッフからは、障害のある人の表現や地域に根ざすことを目指して取り組んだ開催初期のエピソードも聞き、文化芸術を基軸とした共生社会の実現という目指す方向性を再認識するとともに、そのバトンを受け継いでいるということを実感しました。絵屏風制

作の様子は随時HPやSNSで情報発信するとともに、音楽祭当日は会場で展示し、多くの方に観覧していただきました。手に取れるサイズの“お手元版絵屏風”も制作し、本取り組みの効果的な情報発信につなげ、今後、取り組みを広く周知することを目的に様々な場面で活用していく予定です。

その地の特徴を生かし、その地に根ざすことを目指して

今年度の事業の展開エリアである湖東地域の特徴を生かした展開にしたいという願いを持って取組をスタートしました。そこで、地域に伝わる伝統芸能である「江州音頭」を題材として表現活動ワークショップを設定したり、湖東地域の活動団体や施設などへのア

プローチを積極的に行ったりしました。「小さい頃に踊ったことがあるから」という理由で参加した人や、「出演する友だちを応援したい」という思いで参加する人もいました。まさに、このつながりによって取組が地に根差すということを実感しました。地域に何を残し、

どんな価値を残すのかということを考えながらの取組となりましたが、本事業後、ワークショップでコラボレーションした人たちが声をかけ合って、別の発表の機会につながったという例もあり、今後の発展的展開につながるものが期待できます。

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

事業を進める中で人と人が出会い、交わる中で生まれるアイデアや化学反応を大事にして取り組んできました。時には当初計画から変更が必要となる場合もありますが、それこそが社会の既成概念にとらわれず、新たな価値を生み出していくことを目的と

する本事業の根幹だと考えます。企画段階で描いていたことから、変化が必要と判断する理由や背景を明確にしつつ、必要な対話を繰り返す中で人と共有していく粘り強い姿勢が求められていると感じました。

Outline

事業概要

本事業は、障害者等の関わる文化芸術活動（発表、鑑賞）に関する多面的な手法を大きく発展させ、積極的に活動に取り組めることを目指しました。公立美術館の学芸員、教育・普及担当員等の職員、アーティスト、現代美術のキュレーターらとともにその基盤を作ることを目的とし、カンファレンス（交流・共有・学びの場づくり）、リサーチ、パイロット事業、人材インベストメント事業、アーカイビングに臨みました。

本事業で実施した内容

カンファレンス

開催日：2022年8月31日、10月26日（第2・3回）、11月10日、12月14日（第5・6回）（全6回）
会場：HAPS HOUSE、他
参加者：松山沙樹氏（京都国立近代美術館）、藤吉祐子氏（国立国際美術館）、後藤結美子氏（京都市京セラ美術館）、中島基江氏（京都市京セラ美術館）、山田創氏（滋賀県立美術館）、三宅敦大氏（滋賀県立美術館）、奥村一郎氏（和歌山県立近代美術館）
ゲスト講師：保坂健二郎氏（滋賀県立美術館館長（ディレクター））、津口在五氏（靱の津ミュージアムキュレーター）、大西麻貴氏（建築家）

- 実施内容

公立美術館の学芸員ならびに教育・普及担当員等が会し、交流や学び、相互の働きかけを通して障害者等の関わる文化芸術活動についての経験、知識等を蓄積する機会とする全6回の勉強会。

リサーチ

リサーチ先：丸亀市猪熊弦一郎美術館、徳島県立近代美術館、三重県立美術館、兵庫県立美術館、福岡アジア美術館、福岡市美術館、茅ヶ崎市美術館、新潟市美術館、世田谷美術館、東京都美術館、金沢2世紀美術館、長野県立美術館

- 実施内容

リサーチャーが12の公立の美術館に出向いて担当者にインタビューしサポートをまとめ、座談会形式の分析を行う質的調査をしました。

パイロット事業

展覧会：キュレーションを公平（フェア）に拡張する vol.1 「私はなぜ古谷渉を選んだのか」
会期：2023年1月7日～2023年1月29日（会期中の金土日のみ、合計12日間）
会場：HAPS HOUSE

- 実施内容

現代美術、とりわけキュレーションの諸実践を通して、障害のある人が関わる文化芸術活動を拡張する基盤をつくる先駆的な取り組みとして、ゲストキュレーターに滋賀県立美術館館長（ディレクター）の保坂健二郎氏を招聘し、古谷渉氏の個展を開催しました。

人材インベストメント事業

「ももぞする現場——芸術と障害にかかわるひとたちの、ネットワークづくりのためのアSEMBリー」
開催日：2022年11月5日、11月26日、12月10日、12月17日、2023年1月14日（全5回）
会場：京都市地域・多文化交流ネットワークセンター、アトリエみつしま、京都国立近代美術館、他



「障害とアートの現場から」講師：今村遼佑、船戸彩子 [artspace co-jin]、竹内聡 [クリエイティブサポートレッツ] / 聞き手：久保田テツ



本事業で得られた成果

学芸員同士の交流・共有・学びの場づくりとしてのカンファレンス

近畿の国公立の美術館で展覧会や教育普及を担当する研究員の方々7名を迎え、全6回のカンファレンス（研究会）を実施しました。障害のある人の文化芸術活動（発表・鑑賞）を巡り、参加者それぞれの

経験や考えを振り返ることから始め、ゲストを招いた回では、作品の展示や売買、福祉と美術をつなぐ実践、障害のある人との協働などを巡る事例の共有を通して、時間をかけて意見交換を重ねることがで

きました。ゲストも参加者も、それぞれに悩み、試行錯誤の過程にすることが共有され、こうした機会が継続的に必要であることがわかりました。

美術館の敷居を低くするための取り組みに関するリサーチ

美術館と障害者等の芸術の関係について、リサーチャーが12の公立の美術館に出向いて担当者にインタビューレポートをまとめ、座談会形式の分析を行う質的調査をしました。美術館を利

用しにくい人々のアクセシビリティを高める取り組みのほか、そこから生まれた新たな企画など、極めて多様な活動の実態が明らかとなりました。

現代美術を専門とする学芸員が障害者アートを手がけることで見えてくること

今年度は滋賀県立美術館館長の保坂健二郎氏に担当いただき、「なぜ私は古谷渉を選んだのか」展を開催しました。プロジェクト型の作品やパフォーマンスを含む作品、アーカイブの展示など現代美術を専門とする学芸員は従来の展覧会制作にかかる業務を拡張してきたと言えます。彼らの知見を実際の障害のある方たちの現場と接合し、新しい展覧会のあり方を探る試みとなりました。また、

従来通りにはいかない作家との交渉について、展示の決定をキュレーターに専断事項とする際のルールや倫理についての問題が提起され、作品だけではなく、そういった背景までも鑑賞できる非常に有意義な展覧会を開催することができました。



展覧会：キュレーションを公平（フェア）に拡張する vol.1 「私はなぜ古谷渉を選んだのか」フライヤー

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

本事業は「美術館」と「障害者等の芸術文化活動」の関係性の進展・改善に焦点をあて、企画展示に焦点を当てたパイロット事業から、鑑賞者などに位置する市民に焦点をあてた講座事業まで、多様なレイヤーで同時進行したことが第1の特徴です。また主催者のHAPSの強み（相談事業）を活かし、

対話を重視したことも（第2の）特徴として挙げられます。その場合のポイントとして、記録の公開・非公開に参加者に明示した点です。アーカイブは残すけれども、活発な議論を促す意味では、非公開措置の活用は重要だと感じました。

事業名 障がいのある児童や成人の身体的芸術活動
(ブレイクダンス等)の創造と
発表の機会を確保・充実させる取り組み

団体名 日本アダプテッドブレイキン協会
所在地：大阪府大阪市
団体URL: <https://yozigenz.com/jaba>

Outline

事業概要

本事業は、ブレイクダンスが持つ「心身や表現の多様性を認めオリジナリティの高さを讃える。」の考えを障がい児・者に伝え、障がい者中心のダンスコンテストとワークショップを開催しています。心身に障がいのある人だけのブレイクダンスコンテスト「ART FUNK Breakin」や、健常者・障がい者・自由な組み合わせのオールジャンルのダンスコンテスト「ART FUNK JAPAN」、障がいの枠も芸術文化の枠も無くして、体を動かして自己表現する「ごちゃ混ぜワークショップ」を実施しました。

本事業で実施した内容

ART FUNK Breakin

開催日：2022年7月18日(月・祝)
会場名：大阪市長居障がい者スポーツセンター
対象：心身に障害を持つ人
募集定員：110人(フロア75人、2階観覧席35人)
出場人数：31人
来場者数合計：83人
参加費：有料

-実施内容

健常者に混じるのではなく、障がい者が中心となりジャンルをブレイキン(ブレイクダンス)に限定したダンスバトル(コンテスト)を開催しました。

ART FUNK JAPAN

開催日：2022年11月26日(土)
会場名：GRAFFYHALL
対象：過去のアートファンクシリーズの優勝者、障がい／健常を問わず全ての人
募集定員：200人(フロア150人、2階観覧席50人)
出演人数：50人／来場者数合計：110人
参加費：有料

-実施内容

健常者／障がい者／その組み合わせの自由な参加形式のショーケースダンスコンテストです。アートファンクシリーズ(当協会主催 ART FUNK 大阪を含む)の過去の優勝者が集まり、グランドチャンピオンを決めるダンスコンテストを、アクセス(公共交通機関から乗り入れ)が良く、多目的トイレと付近に緊急医療体制が整っているテナントビル内にあるダンスホールにて開催しました。

ごちゃ混ぜワークショップ

開催日：2022年8月14日(日)
会場名：大阪市長居障がい者スポーツセンター
対象：障がい児童とその家族
募集定員：10家族
参加人数：参加者8人、講師7人、スタッフ4人
参加費：有料

-実施内容

ダンサー／楽器奏者／パントマイム／元タカラジェンヌのアーティスト達で障がい児・者に様々な文化芸術体験をショーケース／ワークショップ形式で提供しました。各障害の身体的／精神的／知的負担を減らすべく多種多様な文化・芸術・音楽の自己表現の種類を用意して専門家に指導してもらったワークショップ、最後はみんなで一つのストーリーを作る筋書き仕立てのイベントを実施しました。障害特性により種目によっては参加に躊躇する児童も、プロのパフォーマーの指導で最後には全てのジャンルに取り組むことに成功しました。



夏休みごちゃ混ぜワークショップ



夏休みごちゃ混ぜワークショップ



夏休みごちゃ混ぜワークショップ



本事業で得られた成果

ART FUNK Breakin
(障がい者が中心のブレイクダンスバトル)

障がい者が主役となった文化芸術事業を、日本最古の大阪市長居障がい者スポーツセンターで開催できたことは大きな成果です。新型コロナ感染防止のために施設に入場制限(体育室40名観覧席30名)がありました。直前に緩和されて多くの一般観覧者に2階から見ていただきました。この取り組みを広範囲に情報発信したことにより、大阪モデルの障がい者イベントが、大阪府、西日本と波及し、複数の地域で同

様のイベントが開催される運びとなりました。既に各地域開催のアートファンクとして開催も広まりつつあり、後に全国大会(ARTFUNKJAPAN)も開催できました。障がい者スポーツセンターでのダンスイベントのリアル開催+オンライン配信は啓蒙活動にも有効でした。実際に

新聞・雑誌取材と掲載、学会発表によって大阪府から開催継続の誘致を受けるなど、協賛企業からの声かけで関東への足掛かりも得られました。



ART FUNK Breakin

ART FUNK Breakin
当日の様子ART FUNK JAPAN
(健常者・障がい者・自由な組合せのダンスコンテスト)

過去各地で開催のアートファンクシリーズの優勝者(当協会主催 ART FUNK 大阪を含む)を集めて2on2とシットイングのダンスバトル、そして自由参加のダンスコンテストを開催しました。会場は、非常時に医療的ケアのできる施設があり、公共交通機関からのアクセスが良く、多目的トイレがあり、コロナ感染防止に適した吹き抜け2階構造のグラフィホールを、2022年度も利用しました。特に入場制限

は設けず出入り自由にしましたが、出入り口の足裏・タイヤ裏消毒、参加者／観覧者とも感染追跡のための連絡先の記入、セッション毎の工場扇による換気と巡回手指消毒等を実施し、日本の各地からの参加者(肢体不自由、聴覚障害、視覚障害、発達障害、車椅子ユーザー他)に高い評価をいただきました。我々のイベントは、ダンスや障がい者スポーツ、障がい者のイベント関係者から高く評価されています。これらの実施には、



ART FUNK JAPAN

他の施設では開催が不可能であった点を考慮すると、継続開催は成功と言えます。障がい者ダンスをエンターテインメント化する事により、ユニバーサル社会実現のために必要な障がい者と健常者を繋ぐ間口を広範囲かつ官民・医療・福祉・スポーツへ多層化した発信ができました。

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

医療福祉の専門家(理学療法士、医療監修の医師)、障がい者スポーツ指導員および公務員がアドバイザーに居たため、開催場所のアクセシビリティや多目的トイレ、緊急医療体制の担保などの判断が

容易にできました。また、大阪市内に2ヶ所の障がい者スポーツセンター、大阪府に障がい者交流促進センターがあり、開催場所にそれらの協力を得られたことは事業実施に大いに助かりました。

Outline

事業概要

障害のある人たちの鑑賞を支援するサービス付き短編演劇作品を、地域の劇場や実演団体、アート活動団体等と連携して開催し、地域の舞台芸術関係者に鑑賞者の立場で体験いただきました。トークディスカッションでは、舞台芸術やアートをツールに、地域で障害のある人も参加できる環境づくりに取り組んでいる方たちに登壇いただき、参加者と一緒に地域でインクルーシブシアターを作っていくことについて考えました。また、知識共有と技術移転を深めるための体験やグループワークを交えた研修を実施しました。

本事業で実施した内容

【実施内容①】

開催日：2022年10月11日(月)、12日(火)

会場名：宮城野区文化センター

シアターホール (パトナホール)

対象：舞台芸術に関わる人、

アートマネジメントに興味・関心のある人

募集定員：1日目50人(参加費1,000円)

2日目20人(無料)

参加人数：1日目48人、2日目14人

-1日目第一部 鑑賞支援サービス体験

鑑賞支援サービス付き短編演劇作品の上演

①「背中」 演出・出演：芝原弘氏

②「水辺のふたり」 演出：芝原弘氏

出演：三品彩乃氏、郷内宣子氏

③「父の怪談」 脚色・演出：吉水恭子氏

出演：吉水雪乃氏、遠藤愛希氏、

吉水恭子氏、山村鉄平氏

○音声ガイド：鯨エマ氏

-1日目第二部 トークディスカッション

「障害のある人の文化芸術を地域で考える」

パネリスト：高橋Q清博氏、柴崎由美子氏、

及川多香子氏、芝原弘氏

ファシリテーター：村上佳子氏

【2日目】研修

研修1「だれもが参加できる環境づくりを考える」

研修2「鑑賞支援サービスをデザインする」

講師：南部充央氏

【実施内容②】

開催日：2022年11月26日(土)、27日(日)

会場名：ミニシアター 蛸蔵

対象：舞台芸術に関わる人、

アートマネジメントに興味・関心のある人

募集定員：1日目40人(参加費1,000円)

2日目20人(無料)

参加人数：1日目36人、2日目14人

-1日目第一部 鑑賞支援サービス体験

鑑賞支援サービス付き短編演劇作品の上演

西本・刈谷合同企画「4番線」

出演 刈谷隆介氏、西本一弥氏

○音声ガイド 藤井佳代子氏

-1日目第二部 トークディスカッション

「地域で考えるインクルーシブシアター」

パネリスト：西本一弥氏、吉田剛治氏、

尾崎里美氏、南部充央氏

ファシリテーター：松本志帆子氏

-2日目 研修

研修1「だれもが参加できる環境づくりを考える」

研修2「鑑賞支援サービスをデザインする」

講師：南部充央氏



ショーケース仙台 短編演劇「背中」芝原弘



トークディスカッション仙台



本事業で得られた成果

地域人材の育成と地域内の結束

地域の文化振興財団や文化芸術団体、実演団体、舞台技術チームと連携してつくっていくことで、障害のある人たちが参加していくために必要な知識とノウハウを、それぞれのシーンや工程ごとに共有しながら事業制作を進めることができました。実施後、事業づくりに関わっていただいた方たちから寄せられた感想には、「ひとつの組織でできることは限られていますが、多くの方々や組織と協力しあうことで広がる可能性を実感」「街で織りなされている活動の豊かさを知った」「“とっておき”が“日常”になるよう

に創っていければと思っています」「技術をどう取り込むかのスタートラインに立てた」「施設がソフトもハードもバリアフリーであること、の前提に、文化施設としてどう芸術を扱うか、芸術をどう届けたいか、の議論が必要だと感じました」「目から鱗なことばかりで、学ぶことが多かった」「演劇ってなんだろうということも徐々に考えるきっかけとなりました」など、それぞれの立場での新しい気付きをつくることができました。これらの人材(自分た

ちの街を自分たちで変えていこうとする人材)を残すことができたことが、本事業の最も大きな成果であると考えます。



ショーケース高知 短編演劇「4番線」西本一弥

地域単位のスモールモデル

本事業は、同じ内容を2会場で開催しました。参加者アンケートの結果、いずれの地域も参加動機は字幕と音声ガイドのサービスに興味があったからという回答が多く、特に字幕サービスに興味があったからと答えた方は、いずれの地域でも高い数値となっていたことから、関心や興味、実施していかなければならないという意識が高いことが伺えました。一方、今回のショーケース&フォーラムでは、3種類の字幕サービスと1種類の音声ガイドサービスを体験いただきましたが、地域によってその評価や今後導入したいサービスは異なりました。また、導入に際して抱えている課題も異なる結果となりました。障害のある人たちも鑑賞できる環境を広げていくためには、通り一遍の全国モデルをつくって広げるのではなく、地域それぞれの文化芸術のあり方やニーズに対応した地域モデルをたくさんつくっていく必要があります。そのためには、同じ字幕サービスを実施する場合でも、さまざまな方法から自分たちの劇場・文化施設に適した手段を選ぶことができ、そのことをデザインして

いける人材が必要です。今後も、一つひとつの地域にあったモデルをつくっていく必要があると思います。



ショーケース高知 短編演劇「4番線」西本一弥・刈谷隆介

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

地域に広めることを大きな目標にしたとき、一方的にこれまでの成功方法を押し付けるのではなく、地域の課題やニーズ、その地域の文化芸術のあり方、現状の障害のある人たちも参加できる環境などを把握するところからはじめることが重要であると思

いました。そこで、まずは地域の文化団体等に協力を依頼し、できるだけ多くの方たちと協力体制を構築してから一緒につくっていくという方法を取りました。このことは、地域に「自分たちで考え、取り組んでいく力」を残していくことにつながります。

Outline

事業概要

大阪府下の特別支援学校の児童生徒・教員を対象としたオーケストラコンサートです。参加する児童生徒の特徴や学校形態に制限は設けず、完全バリアフリーの会場で、演奏中の出入りや休憩が自由なコンサートを開催しました。公演は耳なじみのあるクラシック作品を中心に、オーケストラを身近に感じられる演目をお届けしました。また、学校から会場までの移動が難しい児童生徒に向けて、学校訪問型の室内楽コンサートを実施しました。

本事業で実施した内容

学校訪問型 室内楽コンサート

開催日：2022年5月31日(火)～6月20日(月)より5日間
開催校：計5校(計7公演)

- ①大阪府立難波支援学校(219名)
- ②大阪府立藤井寺支援学校(105名)
- ③大阪府立岸和田支援学校(22名)
- ④大阪府立中津支援学校(31名)
- ⑤大阪府立大阪北視覚支援学校(44名)

対象：大阪府下の支援学校の児童生徒・教員

参加人数：延べ421名

参加費：無料

楽器編成：

- ①フルート、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ
- ②クラリネット、ピアノ
- ③ヴァイオリン、クラリネット、トロンボーン、打楽器
- ④クラリネット、ファゴット、ピアノ
- ⑤トランペット、トロンボーン、ピアノ

- 実施内容

2021年度に引き続き新型コロナウイルスの感染拡大の影響が続く中、公演回数を2回に増やして1回あたりの参加学年を減らすなどの対策を行い、無事全校開催することができました。基本的に1回あたり45分で行い、2回行う場合は30～40分に短縮して行いました。音楽を静かに鑑賞する時間を設けたいという学校では、モーツァルト作曲のフルート四重奏曲を演奏しました。この曲は約15分間もあるのですが、児童生徒の皆さんは耳を澄ませてじっくりと聴いてくれました。また、児童生徒も一緒に楽しむことができる参加型コーナーを希望する学校では、オーケストラの伴奏に合わせて先生におもちゃのチャチャチャを歌ってもらい、会場全体で手拍子をして盛り上がりました。その他、児童生徒のリクエスト曲を事前に伺って取り入れるなど、各校の希望に沿い、趣向を凝らした様々なプログラムをお届けしました。

オーケストラコンサート

開催日：2023年2月6日(月)

会場名：国際障害者交流センター(ビッグ・アイ)

対象：大阪府下の特別支援学校の児童生徒・教員

参加人数：延べ891名(小学6年生～高校3年生)

参加費：無料

- 実施内容

オーケストラの生演奏とコンサートホールという空間に親しんでいただくため、障がいの有無に関係なく、誰もが安心して楽しく参加できるコンサートを目指しました。

客席は、車椅子やベッドの生徒たちも参加できるように一部をフラット面に変更し、演目については《楽器紹介コーナー》や《指揮者体験》といった好評企画も組み込みました。メイン曲には、《ドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」第4楽章》を採り上げ、本格的なオーケストラサウンドを体感していただきました。

また新たな試みとして、児童生徒向けに配布プログラムを作成いたしました。より多くの方法でアプローチし、参加される方々それぞれに最適な形でコンサートを提供することを目指しました。



室内楽コンサート(クラリネット、ファゴット、ピアノ)

本事業で得られた成果

学校訪問型 室内楽コンサート

本事業は、普段コンサートホールへ出かけることが難しい子どもたちにも音楽を届けたいという思いで、毎年継続的に行っている事業です。演奏者が各校へ伺い、学校の体育館や音楽室等を会場に行うため、子どもたちにとっては慣れ親しんだ環境で安心してコンサートを楽しんでいただけます。また、室内楽という2～4名の小さな編成のため、ホールで

鑑賞するよりも身近な距離で楽器を観察でき、音の振動や迫力をより身近で体感できます。このコンサートは直接学校へ伺うことにより、オーケストラコンサートに来られない学校へも音楽を届けることができます。学校のリクエストに基づき、音楽の授業で採り上げている合唱曲をクラリネットとピアノで演奏した際は、聴き馴染みのあるメロディを普段と違った雰囲気

で楽しむことができたこと、子どもたちと先生方に喜んでいただけました。また、2022年度は先生方との共演も多く取り入れました。音楽の先生の歌や手拍子に合わせて演奏し、児童生徒と一緒にリズムを叩く参加型コーナーを設けることで、より身近に音楽を感じてもらえたと思います。

オーケストラコンサート

当団体の自主事業として、10年以上継続して行っています。毎年1,000名以上の児童生徒・教員の皆さまに鑑賞機会を提供することを目標としており、2022年度の参加人数は約890名でした。2021年度の541名と比較すると、ようやくコロナ前の動員数に近づいてきました。楽団だけでなく、学校側にもコロナ禍における行事開催への対策・対応力が養われてきていることを実感いたしました。

また、参加した特別支援学校には、年1回の学校行事として当事業を捉えていただいております。在学中は毎年参加いただいている児童生徒も多く伺っています。継続的にオーケス

トラコンサートを体験していただき、音楽がもつエネルギーや迫力を肌で感じることで、児童生徒の感性、音楽を楽しむ力の育成に寄与できればと考えています。また、オーケストラを聴くことが初めての児童生徒にとっても無理のない音楽体験となるよう、

管弦楽曲の他に楽器紹介や指揮者体験コーナーなどを組み込みました。当事業をきっかけにコンサートという特別な空間を身近に感じていただき、児童生徒たちの社会参加の促進に繋がっていくことを期待しています。



オーケストラコンサート(一部フラット面に変更した客席の様子)



オーケストラコンサート(指揮者体験)

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

【室内楽コンサートについて】

打楽器奏者が伺う学校については、事前に音楽の授業を見学し、興味を持ってくれそうな打楽器を紹介するコーナーを設けました。視覚障がいの学校では、身近なもので作成した「ホースホルン」を紹介し、本物との音の違いを耳で楽しんでいただきました。また、予告と異なる演奏をすると驚いてしまう児童生徒もいるため、事前にアンコールを演奏する可能性について呼びかけを行うようにしています。

【オーケストラコンサートについて】

進行台本を学校と共有し、点字への書き換えや手話通訳のための資料として活用いただきました。内容についても楽器の形や大きさ、奏者の姿がイメージしやすい言葉を選ぶよう心掛け、指示語を極力使わないようにいたしました。指揮者体験では代表生徒の特性を事前に伺い、言葉のかけ方や誘導について事前に検討するようにいたしました。

Outline

事業概要

関わる人すべてが新たな視点や価値観を見出し、社会的弱者に対する理解を深めるとともに、社会における真の共生とは何かを考える機会となることを目的に、障がいのある人や様々なルーツを持つ人、多世代の地域住民とともに事業を展開してきました。劇場 ArtTheater dB KOBEを拠点に劇場を小さな社会と捉え、また、街を大きな劇場と見立てて、鑑賞・体験事業を実施するほか、障がいのあるプロフェッショナルなダンスアーティストやパフォーマーと協働した公演やトークプログラムを開催しました。

本事業で実施した内容

身体に障がいのある人もない人も含む プロフェッショナルなパフォーマーによる ダンスカンパニーの“Mi-Mi-Bi”の結成

メンバー: KAZUKI氏 (聴覚障害のサインパフォーマー)、武内美津子氏 (視覚障害の詩人、パフォーマー)、福角幸子氏 (脳性麻痺の語り部、ダンサー)、福角宣弘氏 (骨形成不全のダンサー)、森田かずよ氏 (義足の女優、ダンサー)、内田結花氏 (ダンサー)、三田宏美氏 (手話通訳士、ダンサー)

・未見美 ダンスワークショップ・フェスティバル【入門編】

視覚以外の感覚を味わいながら動くこと、声を使わず表現すること、車椅子を操ってみること、イメージを形成すること、それぞれの身体を感覚すること、参加者同士の関係性を持つことなど、障がいのあるカンパニーメンバーがナビゲーターを務めるワークショップを開催しました。ナビゲーターを担当しないメンバーがアシスタントを務めています。

開催日: 2022年6月~7月(全6回)

会場名: ArtTheater dB KOBE、ふたば学舎

参加者数: 51人



Mi-Mi-Bi 豊岡公演のチラシ デザイン・写真: 岩本順平

【豊岡演劇祭2022フリンジセレクション参加】

Mi-Mi-Bi from DANCE BOX 『未だ見たことのない美しさ ~豊岡 ver.~』

全国から観客の集まる豊岡演劇祭に遠征し、カンパニーの旗揚げ公演を行いました。

アフタートーク、見えない人のための鑑賞ガイドも実施しました。

開催日: 2022年9月22日(木)18:00 / 9月23日(金・祝)14:00

会場名: 豊岡市民プラザ

演出: 森田かずよ氏 / 演出補佐: 内田結花氏

振付・出演: 内田結花氏、KAZUKI氏、武内美津子氏、福角幸子氏、福角宣弘氏、三田宏美氏、森田かずよ氏

音楽: 日野浩志郎氏

衣装: bde氏 / 字幕: 橋本実弥氏

観客数: 154人

【「やさしいコンテンポラリーダンスクラス」】

開催日: 毎月1回(計11回)

会場名: ArtTheater dB KOBE

対象: 踊りたい人はどなたでも。踊ったことのない方も、障害のある方も大歓迎。ベビーカーなどのお子さんと一緒に参加も可。

講師: 西岡樹里氏 / 参加者: 各回25名前後



やさしいコンテンポラリーダンスクラスの様子



本事業で得られた成果

当事者が主導。障がいのある人もない人も含む 「ミックスエイブル」のパフォーミングアーツカンパニー“Mi-Mi-Bi”の誕生

自らが主体的に場をつくり、シーンそのものを立ち上げていこうという意識のある、異なる障がいのあるプロフェッショナルなパフォーマーが集まり、カンパニー活動を開始しました。「障がい者のー」という冠を外して、いかに舞台芸術シーンにアプローチできるのかという心意気から、豊岡演劇祭フリンジ枠に応募しました。出演が決してから、会場・宿泊先



Mi-Mi-Bi 豊岡公演の様子 提供: 豊岡演劇祭実行委員会 撮影: ©igaki photo studio

選びも含め、現地スタッフの多大なる協力のもと遠征公演が実現しました。観客のアンケートからも、障がいのある表現者の可能性や、障がいに対する自身の認識が変わったことなど、多くの気づきのフィードバックが寄せられました。視覚・聴覚に障がいのあるメンバーを含め、コミュニケーションを取りながら一つの作品を創りあげる現場の様子は、公演の記録とともにドキュメント映像として公開され



Mi-Mi-Bi 豊岡公演の様子 提供: 豊岡演劇祭実行委員会 撮影: ©igaki photo studio

ています。また、カンパニーを発足したことにより、<ゲート・インスティテュート大阪・京都>と協働し、ドイツに本部を置くフェスティバル「A GATHERING IN A BETTER WORLD」に参画しました。5日間にわたるプログラムをディレクションし、海外のアーティスト、ディレクターとの交流も生まれています。



Mi-Mi-Bi ワークショップの様子

継続した事業展開を軸に、地域のネットワーク形成

2020年度より月1回継続して開催してきた「やさしいコンテンポラリーダンスクラス」は、一人ひとり異なる感覚・感性をもつ参加者一人ひとりから生まれるダンスを一緒に楽しむクラスです。参加者は、障がいのある人もない人も、1歳から70代の方まで、単発の参加者や継続して参加する方

まで様々です。毎月継続して2年をこえて開催したことにより、参加者にとっては顔の見える関係もでき、安心して参加できる場所となっています。2021年度より神戸市で開校されている「KOBE しあわせの村ユニバーサルカレッジ」の参加者がこのクラスを機に劇場へ足を運ぶことや、「兵庫

県学校卒業後の障害者の学びを支援するための地域連携コンソーシアム」を縁に、特別支援学校でのダンスワークショップ開催など、公民がよい形で専門性を発揮し、生涯学習の場と芸術文化の場が、豊かに協働し発展していける基盤がゆっくり整い始めています。

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

「WEBサイトとSNSアカウント(Twitter-Instagram)を立ち上げ、情報公開と広報に注力」「字幕や音声認識アプリ、手話通訳を含め、情報保障の充実」「カンパニーメンバーで外部の公演を鑑賞し、ディスカッションするなど、学びの場の増加」「劇場で行う公

演に、出来る限りの手話通訳を実施」「どのプログラムも、出来る限りオープンな状態を保ち、劇場に出入りするアーティストやスタッフなど、その場に居合わせる人がアクセスできる状況の整備」を行いました。

Outline

事業概要

心身の状態が悪化しても、創造的な活動を継続したい人や挑戦をしたい人のために、AI や IoT と呼ばれる人間の知能や身体や社会的つながりに関わる現代のテクノロジーを用いて、障害のある人の生涯にわたる創作や表現に活用できる先進事例をつくることを目的としています。障害のある人とテクノロジーが共創できるように勉強会や体験会、社会に広く発信するためのフォーラムや展覧会を行い、全国の障害のある人や技術力のある人に周知しながら連携のネットワークを築いています。

本事業で実施した内容

調査と発信

「障害」「アート」「テクノロジー」「ウェルビーイング」をキーワードに以下の6名にインタビューを行い、事業公式note (<https://note.com/goodjobproject/m/m700230dba906>) で発信しました。

8月24日(水): 田中みゆき氏/インデペンデント・キュレーター
8月25日(木): 渡邊淳司氏/NTTコミュニケーション科学基礎研究所

8月26日(金): 武藤将胤氏/一般社団法人 WITH ALS
8月29日(月): 菅沼聖氏、伊藤隆之氏/山口情報芸術センター (YCAM)

9月15日(木): 本多達也氏/富士通 Ontena

9月27日(火): 吉藤健太郎氏/株式会社オリィ研究所

先進事例づくり

高齢化や身体障害の進行、その他さまざまな理由で、創作や表現活動をしたけれど継続や挑戦ができなくなっている障害のある人を対象に、アーティストやエンジニアなどの技術力のある人とともに、AIやIoTなどのテクノロジーを活用した作品をつくりました。先進事例づくり全体の監修については、情報科学芸術大学院大学[IAMAS]の小林茂教授に協力を要請しました。先進事例づくりは、5月から2月にかけて行われました。

- 表現に寄りそう存在としての AI

自分が描いたイラストや思いついた文章をコンピューターに入力すると、新たな文章や画像や動画をつくり出す AI 技術があります。障害のある人の表現とどう組み合わせるか検討しました。

会場名：たんぽぽの家アートセンター HANA、片山工房
協力者：徳井直生氏/慶應義塾大学 SFC

-CAST：かげのダンスとVR

小さいものを大きく見せたり、自分を別のありようとして表せる陰影のダンスです。そのダンスをインスピレーションに、VR アプリを開発してダンスパフォーマンスを行いました。
会場名：たんぽぽの家アートセンター HANA & シアターぽぽ
協力者：緒方壽人氏/Takram

- 実感する日常の言葉—触覚講談

日常的に記録されている日記や詩などは、本人や周りの人にとって大切な表現です。それらを触覚伝送や講談などの方法で伝えることで、本人や周りにどんな変化が生まれるか検討しました。

会場名：たんぽぽの家アートセンター HANA
協力者：渡邊淳司氏・駒崎掲氏/NTTコミュニケーション科学基礎研究所、よしだともふみ氏/テクノ手芸部・株式会社オブシープ、神田山緑氏/講師

勉強会・体験会

-Text to Image

開催日：2022年10月20日(木)
会場名：アートセンターHANA / Good Job!センター香芝
参加者：障害のあるアーティスト

-VR・AR

開催日：2022年11月11日(金)
会場名：アートセンター HANA
講師：緒方壽人氏/Takram、小林茂氏/IAMAS
参加者：障害のあるアーティスト、障害のあるアーティストの支援者、ほか

-わたしたちのウェルビーイングカード

開催日：2022年11月22日(火)
会場名：アートセンター HANA
講師：渡邊淳司氏/NTTコミュニケーション科学基礎研究所
参加者：障害のあるアーティストの支援者4名



本事業で得られた成果

多様な人たちとアートとケアと
テクノロジーについての問いを深めた

展覧会「Art for Well-being 武田佳子と考える、表現の成り立ち」では、作家やサポーター、作家の所属していたアートセンターの障害のあるアーティストたちと「何が表現を成り立たせているのか」「誰かと表現やケアをするとき大事なこと」について議論を重ね、そこで生まれ

た「問い」とともに展示しました。テクノロジーを一方向的に押しつけるのではなく、アートとケアの現場にテクノロジーを導入する前提条件について考察できたことは本事業の大きな成果のひとつです。



VRゴーグルの体験

障害のあるアーティスト当事者からの声を収集

先進テクノロジーを用いたアート制作では、技術者は先進的なアーティストのもとで働くお抱え職人のような役割になったり、あるいは、その反対に、先進的な技術者の実験対象としてアーティストが位置づけられるような非対称性が生じがちでした。本事業では、先進的なテクノロジーを

使いこなす障害のあるアーティストにインタビューする機会や、障害のあるアーティストが先進的な技術者と直接ディスカッションする機会があり、障害のあるアーティストが制作当事者として先進テクノロジーとフラットな関係を結びうる可能性があることが示されました。



AIに関するレクチャーを受ける障害のあるアーティスト

テクノロジーを用いたアート制作、アート鑑賞体験の共有

今年度取り組んだ3つの先進事例をたくさんの方に体験していただくために、東京、渋谷のシビック・クリエイティブ・ベース東京[CCBT]にて、展覧会「Art for Well-being 表現とケアとテクノロジーのこれから」を開催しました(会期:3月4日~12日)。展覧会初日には、この実験的な先進事例に関

わってきたエンジニアや研究者が集うシンポジウムを開催、また3月22日には、京都のFab Café Kyoto (MTRL KYOTO)において、表現者や福祉の現場サイドからの報告会を開催し、現時点での課題や期待などを共有しながら今後の可能性や方向性について探りました。



Text to image で生成した画像を参考に絵画制作する様子

Point

●●●●●
本事業を実施する上で行った独自の工夫

全国各地の障害のある人や障害福祉関係者が、簡単にエンジニアとつながれる社会環境はありません。そのため、展覧会や事業の発信を通して、技術の選定、協働するエンジニアやアーティスト、および障害福祉関係者をつなぐためのネットワークづくり

を工夫しました。他にも障害のある方や福祉関係者が関わりやすい体験会の開催について、まずは機器そのものを体験してもらったり、技術と障害のある人の可能性を一緒に考えるための体験会を開催しました。

事業名 ニュートラの学校： 福祉と伝統工芸をつなぐ人材育成と仕組みづくり

団体名 一般財団法人たんぽぽの家
所在地：奈良県奈良市
団体URL: <https://tanpoponoye.org/> 事業URL: <https://newtraditional.jp/>

Outline

事業概要

NEW TRADITIONALプロジェクトは、福祉と伝統工芸の交流を通して、新しいものづくりや仕事を提案してきました。2022年度はこの活動に携わる多様な人材を育成することを目指し、福祉、工芸のジャンルを超えて、これからの時代のものづくりの理念を学び合う場をつくるために、「ニュートラの学校」と称する連続講座を実施しました。また、伝統工芸や地場産業のミュージアムの学芸員や、美術大学などと連携し、ものづくりを伝える側の立場の理解や交流を深める機会をつくりました。

本事業で実施した内容

「ニュートラの学校」の実施

開催日：2022年9月～12月(全18講座)
開催場所：奈良・東京・京都にて実施
参加者：延べ 228 人

- 実施内容

連続で学べる講座を実施しました。福祉のものづくりの現場の課題から考えるコース、伝統のものづくりのこれからを考えるコース、体験と交流を通してものづくりの魅力を実感するコースの3コースを設定しました。参加者：福祉施設職員、障害のある人の家族、デザイナー、アーティスト、工芸やものづくりに携わる人、美術大学の学生、高校生、親子など
・トークシリーズ「ここからはじめる、学ぶ場のつくりかた」(3講座)
・「福祉の課題から考える」コース(5講座)
・「これからの伝統を考える」コース(5講座)
・体験プログラム(4講座)

伝統工芸、伝統産業にかかわるミュージアムでの エデュケーションプログラム、および アウトリーチプログラムの調査の実施／協力 ミュージアムとともにエデュケーションプログラムの実施

○アンケート調査概要
調査期間：2022年7月15日(金)～7月31日(日)
送付数：403件／回答数：107件
ヒアリング先：5カ所
・九州国立博物館(9月16日)
・多治見市美濃焼ミュージアム(9月22日)
・さいたま市岩槻人形博物館(12月1日)
・木組み博物館(12月1日)
・京都伝統産業ミュージアム(1月23日)

- 実施内容

インターネット等を通じて伝統工芸、伝統産業にかかわるミュージアム等での地域に開かれた教育プログラムの情報収集を行い、そこから抽出した先進的な取り組みを行うミュージアムにヒアリング調査を実施しました。さらに、エデュケーションプログラムに関心のあるミュージアムとともに、障害のある人や子どもなどが伝統工芸、伝統産業に触れ、体験することができる教育プログラムを開発し、以下の3カ所にて実施を行い検証しました。

- ①京都伝統産業ミュージアム
- ②多治見市美濃焼ミュージアム(事情により中止)
- ③平城宮跡歴史公園

美術系大学の伝統工芸にかかわる領域と 福祉の現場とのエクステンジプログラムの実施

講師：安藤隆一郎／京都市立芸術大学染織専攻講師
開催日①：2022年10月27日(木)
会場名①：たんぽぽの家アートセンター HANA
開催日②：2022年12月9日(金)
会場名②：京都市立芸術大学

- 実施内容

「はこぶ」「座る」といった当たり前の日常運動を“へんてこ”にした、新しい身体トレーニングの体験を実施しました。昔から使われている民具なども使いながら、トレーニングスペース0GYMにて楽しく身体を動かし、ものと関わるときの動作や自分の身体について学びました。京都市立芸術大学と連携し、工芸について学ぶ学生や教員、ものづくりに取り組む障害のある人や施設職員らが、互いの創作の現場を歩き来しながら、ものづくりを通して交流しました。



本事業で得られた成果

多様な人たちが集う、 ものづくりを通じた学びの場づくりの可能性

「ニュートラの学校」の実施にあたり、地域や教育現場で新しい学びの実践をしている人たちにヒアリングしました。福祉や工芸のジャンルを超えて、ものづくりをキーワードに学びあいや交流ができる場づくりの実験をしました。オンラインも含め、参加の場のあり方、障害のある人の仕事

の現状などを伝える一方で、工芸分野で活躍する人たちとのネットワークも生まれました。今回は座学が中心だったため、より素材や工法にフォーカスした学校のあり方や、連続して受講しやすい形態など、プログラム作りの工夫が必要と感じています。



ニュートラの学校、「これからの伝統を考える」コース、より(撮影：秋山さやか)

伝統産業、伝統工芸を伝える ミュージアム・ギャラリーとのネットワーク構築

ニュートラプロジェクトを続ける中で、ものづくりを伝える立場の人たちの意識調査を行いました。障害のある人も含めた、多様な人たちに対する教育普及について、まだまだ意識や取り組み事例が多くないことがわかりました。アンケートやヒアリン

グを通して出会った、本事業に関心のある団体と連携し、実践的なプログラムづくりに取り組むことで、今後の地域でのミュージアムのあり方、伝統にかぎらずものづくりを伝えることの意義が広まっていく契機になると考えています。



ニュートラの学校、「体験プログラム」、クリスマス茶会(子ども茶会)より(撮影：衣笠名津美)

ミュージアムや美術系大学と連携した ワークショッププログラムの開発

伝統工芸や地場産業のミュージアムに多様な人が訪れる契機となるようなプログラムを開発し、試行しました。地域の産業の調査に始まり、ミュージアムのある地域の美術系大学や伝統産業に従事するつくり手、福祉施設や障害者芸術文化活動普及支援事業の支援センターにも協力

をおおぎました。そのことにより、地域のネットワークを活かした広報が可能になり、福祉 × 伝統工芸の取り組みに関心をもつ人の掘り起こしにもつながりました。多様な人に開かれたミュージアムが、ニュートラプロジェクトを広めていくための拠点のひとつになり得ると感じています。



エクステンジプログラム、京都市立芸術大学、ワークショップ「身体0ベース運用法」より(撮影：仲川あい)

Point

●●●●● 本事業を実施する上で行った独自の工夫

福祉と伝統工芸の分野を超えたテーマ設定や対象を想定したプログラムづくりを行い、「ニュートラの学校」の開催日時や参加方法について、土日や平日の実施、リアルタイム・オンラインでの参加など、日中に福祉サービスをしている人たちも参加しやすい

ように配慮しました。また、講座終了後の交流会の開催により、参加者同士の交流や情報交換の機会をつくり、気軽に学びあえる空間を目指しました。体験講座では、障害のある人から子どもまで、誰もが参加できる場の設定を心がけました。

事業名 障がいのある方のアート活動の推進と 発掘・発信事業

団体名 一般社団法人アートスペースからふる
所在地：鳥取県鳥取市
団体URL: <https://www.sdballet.com/> 事業URL: <https://www.sdballet.com/rp/>

Outline

事業概要

鳥取県の支援センターは、県外作品の展示企画が多い一方で、活動の推進や地元作家の発掘・発信、相談業務などは乏しく、各行政機関や民間の縦割り感も強いいため、包括的な取り組みや意識も少ない現状があります。そこで、行政と民間が手を携え、複数施設等が連携したアート活動を推進したいと思い、障がいと共に生きるアーティスト達の活動を官民挙げてバックアップし、作家の発掘、魅力の発信、施設等の理解促進に取り組むことで、障がい者の社会参加の機会を創造することを目的に活動しました。

本事業で実施した内容

「とっとりフクシ×アートアドバイザーボード」

開催日：2022年7月26日～10月26日

会場名：ギャラリーからふる

参加者：地元を代表するプロダクトデザイナー・アートマネージャー・編集者・イベントディレクター・キュレーター

- 実施内容

障がい者への理解を深めながら、そのアート作品と活動の意義を多くの人に伝える方法について、全11回にわたりディスカッションを行い、具体的な企画立案も行いました。

「アート作品を活用した展開についての 講演会・意見交換会並びに施設訪問」

開催日：2022年11月24日

会場名：ギャラリーからふる

対象：福祉施設職員等／参加者：9名

参加費：無料

講師：株式会社ヘラルポニー アカウント部門シニアマネージャー 新井博文氏

- 実施内容

今注目を集めるヘラルポニーのマネージャーに、障がいのある方の創作活動の価値や作品の可能性についてお話をさせていただくとともに、施設職員等との意見交換会を開いて互いの認識を深めました。また、施設にも訪問をし、今後の展開についてのヒントをいただきました。

「フクシ×アートWEEKsの開催」

開催日：2022年10月29日～11月27日

会場名：鳥取市中心市街地商店街

対象：一般市民

参加費：無料

- 実施内容

鳥取県・鳥取市・鳥取市商店街振興組合連合会・鳥取市中心市街地活性化協議会（鳥取商工会議所）・鳥取大学・鳥取県立美術館パートナーズ・あいサポートアートセンター（支援センター）ならびに4つの施設、アドバイザーボードメンバーと協力し開催しました。商店街のお店や百貨店・ショッピングモールなどに様々な形でアート作品を約200点展示し、作品の魅力を多くの方に伝えました。また、フォーラム・映画上映を行い、障がいのある方のアート活動への理解促進を行いました。



アドバイザーボードの様子



本事業で得られた成果

アートやイベントのプロと福祉を繋げるネットワークの確立

地元を代表するアートやイベントのプロと福祉を繋げるフクシ×アートアドバイザーボードを設立し、福祉施設職員にはない知見を得ることができました。作品の発掘や展示方法、発信方法など多くの方々に魅力を伝えることや、理解を促進するための企画など、多くのアイデアとアドバイスをもらい、具体的な企画立案を行うことができました。特にアート作品の

位置づけや見せ方について今後に繋がる示唆がありました。さらには、ボードメンバー自身が障がい者やその作品と活動について理解を深められる機会になり、これからはメンバーが障がい者のアート活動に関わるとともに、発信にも取り組んで参ります。



フクシ×アートWEEKsの様子

多くの市民にアートに触れてもらえたイベント

フクシ×アートWEEKsは、アドバイザーボードのメンバーに企画・アイデアを立案してもらい、多くの関係者の協力を得て200点に及ぶ作品を展示し、多くの市民に作品に触れてもらえる機会となりました。特に見せ方にこだわり、また敷居の低いイベントにしたことで、所謂福祉関係者以外の普段福祉と余り接点がない方々に観覧していただくことができました。

アートイベントとしてのクオリティが高まり、作品自体の価値が上がったように感じます。同時にフォーラム・映画上映会とトークショーも行い、発信に繋げながら障がいのある方のアート活動やアート作品についての理解促進を図ることができました。

さらに、注目度・知名度の高いヘラルポニー社の講演会等も行い、福祉の現場での意識と意欲の向上に繋げることができました。



フクシ×アートWEEKsの様子



フクシ×アートWEEKsの様子

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

団体事務所が商店街にあるということで、マスコミ等で取り上げられやすい商店街の活性化の名目のもとに多くの関係者に協力をさせていただきました。自

分たちに無いもの・不得手なことを素直に認め、プロの協力を求めたことが逆に強みや工夫だったと言えます。

事業名 地域と共につくる 島根インクルーシブシアター・プロジェクト2022

団体名 公益財団法人しまね文化振興財団
所在地：島根県松江市
団体URL: <https://www.cul-shimane.jp> 事業URL: <https://shimane-itp.wixsite.com/website>

Outline

事業概要

障がいの有無に関わらず芸術文化に触れ、自ら表現する喜びにふれる機会と場づくりを目的に島根県全域で行うプロジェクトを推進しています。2022年度は、ユニバーサルな公演「にぎやかな日々」の東西開催、ダンスや音楽体験アウトリーチ等の実施、映画のバリアフリー上映を通じての研修と交流の場づくりを展開しました。各地で開催する取り組みのノウハウや地域課題について、東西拠点及び県の障害者芸術文化活動支援センター等と共有することで、より広域かつ社会的な波及へ結びつけられました。

本事業で実施した内容

映画「ウェディング・ハイ」ユニバーサル上映& 大久明子監督トークセッション

開催日：2022年7月24日(日)
会場名：Shimane Cinema Onozawa
対象：障がい児・者、及び関係者、地域住民
参加人数：75名
参加費：一般 1,800円、バリアフリー（手帳保持者）
割引 1,000円他

- 実施内容

障がいのある無に関わらず映画鑑賞を楽しめる場として、新作映画の音声ガイド、日本語字幕付き上映会を開催しました。併せて、上映作品の大久明子監督を招聘し、制作秘話や映画のバリアフリー化について、手話・要約筆記付きのトークセッションを実施しました。

今福座和太鼓アウトリーチ

開催日：①2022年12月8日、②2023年1月19日
会場：島根県立浜田ろう学校
対象：児童生徒及び教員／参加者：7名

- 実施内容

聴覚に障がいのある、ろう学校児童生徒及び教員7名を対象に、継続型の和太鼓体験授業を実施しました。講師に地元のプロ和太鼓奏者「今福座」を招聘し、全2回のプログラムを計画しました。演奏技術の披露と指導だけでなく、音楽や和太鼓に向き合う姿勢を講師を通じて直接体感し、参加者自ら表現する楽しみを体験することを目的に実施しました。



今福座和太鼓アウトリーチの様子

田畑真希ダンスワークショップ

開催日：2023年1月29日(日)
会場名：島根県民会館多目的ホール
対象：視覚障がい者を含む地域住民、関係者15名

- 実施内容

目が不自由な人とダンサー・振付家の田畑真希氏と共にはじめたダンスワークショップでは、見える・見えないに関わらず、共に創る公演制作に発展させてきました。今年度は連携を取ってきた団体や参加者により、次の段階へのステップとしてワークショップを実施しました。

「にぎやかな日々」

①松江会場
開催日：2022年11月19日(土)
会場名：島根県民会館中ホール
対象：障がい児・者、及び家族、関係者、地域住民
参加人数：193名／参加費：無料
石見神楽・プラスバンドの演奏、ミニマルシェ、アート体験を実施。
②益田会場
開催日：2023年1月15日(日)
会場名：益田市総合福祉センター
対象：障がい児・者、及び家族、関係者、地域住民
参加人数：98名(出演者含む)／参加費：無料
音楽療法士と地元演奏団体による参加自由の音楽体験と地元演奏家4組によるにぎやかな音楽会を実施。

- 実施内容

障がいのある無に関わらず楽しむことができるユニバーサルな公演を島根県東部・西部で開催。各地域のつながりのある団体・関係者と内容を検討し、要約筆記、手話通訳、音声ガイド、石見神楽字幕、看護師配置等の鑑賞サポートを各地の内容や対象者に合わせ実施しました。



本事業で得られた成果

これまでのノウハウと東西連携を活かし、全県への活動展開へ

これまで島根県では、東部・西部それぞれが地域の特性や課題に即した取り組みを行ってきましたが、2022年度はユニバーサルな公演「にぎやかな日々」を東西にて各1回開催しました。島根県民会館において



コンサートの様子（「にぎやかな日々」益田会場）

は、これまでのダンス事業で生まれた当事者や関係者との繋がり、知的・発達障がい児（者）に向けての劇場体験プログラム「劇場って楽しい!!」などの鑑賞機会の創出で得たノウハウを本事業にて参加型鑑賞公演として昇華させました。また、今回で2回目の開催となる西部では、第一部「参加自由の音楽体験」において、初回に協働して内容づくりを行った地元の音楽療法士と演奏家とが改めて実施内容を錬磨し、参加者にとってより充実した体験になるよう交流と質の向上に努めました。この「にぎやかな日々」公演を通じて、東西で培ったノウハウを相互に情報共有し、人

材の交流を図るなど、それぞれの地域に即した取り組みから全県的な取り組みへと広がっています。



コンサートの様子（「にぎやかな日々」益田会場）

地域人材の育成と能力発揮の場を創出

広く全県へ波及する活動と併せて、東西それぞれにおけるこれまでの取り組みの蓄積と地域の現状に合わせて、より効果的な展開へ結びつけるために各地域にて地域人材の育成を行っています。東部では、目が不自由な人とのダンス事業により人材が培われ、国際障害者交流センター「ビッグ・アイ」主催の障害者の文化芸術創造拠点形成プロジェクトDANCE DRAMA「Breakthrough Journey」東京公演に出演するなど、ダンス技術の向上だけでなく、多様な人との作品創りに関わる人材が生まれてきています。今後はその力を地域に活かせる場所と機会づくりもし



アート体験の様子（「にぎやかな日々」松江会場）

ていきたいと考えています。西部では、地元音楽療法士と演奏家とが互いの技術を合わせ、相互の専門性を共有することで視野の広がりスキルアップにつながっています。また、能力発揮の場を継続して企画することで、

より地域課題に即した内容を効果的に実施することができています。その結果、当事業を通じて交流を深めた演奏家と関係者が発達障がいの子を持つ親子向けの音楽会を企画するなど、地域での自主的な活動の動きへも繋がっています。



石見神楽とプラスバンドの共演（「にぎやかな日々」松江会場）

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

東部・西部の拠点施設と、県の障がい者文化芸術活動支援センターとがそれぞれに連携し、情報共有やプロジェクトの協働を行っています。また、この三者だけでなく、各地域の関係団体や組織とも日常

的なコミュニケーションをとることで、有機的な繋がりを深め、「劇場の取り組み」と「地域の取り組み」の総和を図り、県全体への活動の広がりを目指しています。

ぶんかのひろばプロジェクト2022

～地域に根差した共生コミュニティづくりの発展をめざして～

一般社団法人舞台芸術制作室無色透明
所在地：広島県広島市

団体URL: <https://www.engeki-hiroshima.com/> 事業URL: <https://engekihiroshima.wixsite.com/piroshima>

Outline

事業概要

コロナ禍における創造・発表の取り組みとして実施した『コロナ詩(うた)』は、参加者がコロナ禍で感じた気持ちを共有する場をつくり、その場から生まれた言葉を一編の詩として再編し発表しました。また、『おきらく劇場ピロシマ presents 秋の演劇公演』『おきらく劇場ピロシマ演劇クラブ』は障がいのある・なしに関わらず創作・公演をする機会を生み出しました。これらの企画は、地域俳優・脚本家を中心に実施し、地域における障がい者舞台芸術創作の担い手の育成もあわせて行いました。

本事業で実施した内容

コロナ禍における創造・発表の取り組み 『コロナの詩(うた)』

開催日：2022年4月17日～5月1日
会場名：広島市三篠公民館、広島市佐東公民館、
広島市まちづくり市民交流プラザ
対象：障がいの有無に関わらず、コロナ禍での自分の
気持ちを誰かと話してみたい方
募集定員：15名／参加人数：15名(内1名出演辞退)
参加費：無料

- 実施内容

コロナ禍で感じた気持ちを参加者同士で語り合う場をつくり、その中で出てきた言葉を再構成して一編の詩を創作しました。その詩に、音楽と身体の動きを組み合わせ最終日に発表を行いました。



『コロナの詩(うた)』舞台写真



『コロナの詩(うた)』稽古写真

作品発表の機会の提供

『おきらく劇場ピロシマ presents 秋の演劇公演』

開催日：2022年10月8日～10月9日
会場名：WAKOゲバントホール
対象：障がいの有無や、年齢、性別に関係なく、稽古・
本番スケジュールに参加でき、舞台の創作と一緒に
取り組みたいと思われる方
募集定員：15名／参加人数：14名
参加費：無料

- 実施内容

広島市の劇作家による新作舞台約20分の作品を2本創作・公演しました。障がいのある参加者、俳優、一般参加者が協働して取り組み、舞台の上演には鑑賞支援サービスもあわせて取り入れました(字幕タブレットサービス、車椅子席の設置など)。

創造の機会の拡大・人材育成

『おきらく劇場ピロシマ演劇クラブ』

開催日：2022年6月12日～2023年2月12日(全6回)
会場名：広島市中央公民館
対象：障がいの有無や、年齢、性別に関係なく、演劇
に関心のある方
募集定員：各回15名／参加人数：70名
参加費：無料

- 実施内容

演劇の手法を使った表現ゲームや、チームでの演劇作品創作の体験を地域で定期開催しました。また、ファシリテーター育成のための自主研修と過去実績データを基にしたケーススタディの実施を行いました。

おきらく劇場ピロシマ presents 秋の演劇公演
『運び祭の夜に』舞台写真おきらく劇場ピロシマ presents 秋の演劇公演
『看板男』舞台写真おきらく劇場ピロシマ演劇クラブ 短い場面を
演じる参加者たち

本事業で得られた成果

コロナ禍で取りこぼされた当事者の声を舞台表現にして広く公開

舞台発表『コロナの詩(うた)』は、コロナ禍で平時よりもさらに活動を抑制されやすい障がいのある人、支援を必要とする人の鑑賞・創造・発表の場を確保する目的で実施しました。この舞台の創作は、参加者たち同士が感じた「コロナについて」の言葉を互いに聞き合う、話し合うところか

ら始め、その言葉を詩に起こし、舞台作品にしています。来場者からはアンケートを通じて感想が寄せられており、2020～2022年の間に取りこぼされていた当事者たちの声を会場に訪れた観客に届けることができたと感じています。また、参加者自身や、参加者の保護者からのアンケートを

通じて、自身の思いや体験を他者と共有し創作をすることが、当事者の閉塞感を緩和し、誇りややりがいを生み出す効果も読み取れました。これらの活動・効果は、コロナ禍に限らず、社会全体が長年に渡って不安定になる出来事(災害など)に直面した時にも役立つと考えられます。

障がいのある人が、地域で定期的に創作・関係づくりができる場の確保を

『おきらく劇場ピロシマ演劇クラブ』は、演劇をやってみよう、と思う人が集まり、お互いにコミュニケーションを取り合ったり、身体を動かしたり、創作をしたりすることを楽しめる1回2時間程度の演劇ワークショップです。定期的な開催を行うことで、ゆっくりと演劇を通じてお互いに関係

を結んでいける場をつくることができました。「コロナ禍でこれまで参加していた表現活動が中止されてしまい、表現の場を探している」という広島市外からの問い合わせ、参加もあり、障がいのある人の創作・発表の場を確保するという、目的が一部達成できたと感じています。活動

に興味を持っていただいた県内外の団体・個人からの見学も6名(2022年12月までの延数)受け付けており、見学後に意見交換の場を設けるなど、他団体・個人とのつながりも生まれ始めています。

地域で活動する、障がい者舞台芸術の担い手を育成

作品発表の機会の提供として実施された『おきらく劇場ピロシマ presents 秋の演劇公演』、創造の機会の拡大・人材育成として実施されている『おきらく劇場ピロシマ演劇クラブ』は、いずれも地域で活動する俳優・脚本家と協働して行いました。彼らは実演家として、障がいのある俳優たちと創作・共演するだけに留まらず、ファシリテーターとして企画運営の主体として事業に継続

して関わり、地域での障がい者舞台芸術活動の担い手としての経験を積むことができました。また、公演に向けての稽古、演劇ワークショップを実施している最中に起きた出来事(思い通りにならなかった場面、改善の余地があると感じられた場面など)をピックアップし、ケーススタディを実施しています。このケーススタディは、福祉の専門家である認定NPO法人ひゅーるぼんの協力を得

て、舞台・演劇の専門家である当法人が主体となって行っています。ケーススタディの内容は、今後、他地域で実施する障がい舞台芸術に係る事業(公演・ワークショップ)に役立つものと考えられるため、内容は可能な範囲で冊子にまとめ、ホームページ上に公開し、ノウハウを他地域と共有できる環境をつくりま

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

公演会場は、身障者用のトイレがない、舞台上上がるスロープがない等、ハード面での課題がいくつかありました。そこで、会場近隣で利用可能な身障者用トイレマップを作成し、案内を行ったり、演者たちが協力して車椅子を持ち上げ、舞台上に登る練

習を行ったりと、準備をして車椅子の参加者・来場者を迎えました。鑑賞支援においてハード面での解決が必要な際、会場・運営・参加者・来場者が互いにコミュニケーションを取ることで解決できないか、可能性を探ることを心がけました。

事業名 四国・中国・近畿ブロックの重度障害児者を対象とした芸術文化活動「訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学」

団体名 国立大学法人愛媛大学
所在地：愛媛県松山市
団体URL：http://treasure.ed.ehime-u.ac.jp/

Outline

事業概要

四国・中国・近畿ブロックの重度運動障害と知的障害を併せ持つ重症心身障害児および重度知的障害児者を対象に、学習の場を提供する「訪問カレッジ」と、学習の成果を他者と共有する「オープンカレッジ」を企画・運営しました。「訪問カレッジ」では、対象者のご自宅等にスタッフが訪問し、個に応じた方法を模索しながら文化芸術活動を実践してきました。障害が重度であっても、主体的に文化芸術活動を実践できる社会・仕組みづくりの創出を目指しました。

本事業で実施した内容

訪問カレッジ

開催日：利用者の希望日を調整の上、月1回程度
会場名：愛媛県松山市を中心に、
利用者の希望する場所（ご自宅等）へ訪問

対象：「訪問カレッジ」利用者

募集定員：若干名

参加費：無料

参加者：お子さん利用者数：22名、通算：27名

- 7月12日：職員5名
- 7月29日：4名（視線入力装置使用2名、スイッチインタフェース使用2名）
- 8月20日：4名（視線入力装置使用2名、スイッチインタフェース使用2名）
- 9月17日：3名（視線入力装置使用1名、スイッチインタフェース使用2名）
- 10月24日：1名（視線入力装置使用1名）
- 11月24日：4名（スイッチインタフェース使用1名、iPadアプリでの制作活動3名）
- 12月6日：1名（視線入力装置使用1名）
- 12月12日：1名（iPadでタッチ相撲対戦1名）
- 12月14日：1名（大学ゼミの見学1名）
- 12月27日：1名（スクラッチアート、クリスマスソングのピアノ演奏ゲーム1名）
- 1月11日：1名（オープンカレッジの大学ゼミ疑似体験1名）
- 1月13日：1名（ハーバリウム、クリスマスソングのピアノ演奏ゲーム、iPadでタッチ相撲対戦1名）
- 1月16日：4名（Tシャツ作り3名、視線入力1名）
- 1月18日：1名（オープンカレッジの大学ゼミ疑似体験1名）
- 1月25日：1名（オープンカレッジの大学ゼミ疑似体験1名）

実施内容

- ・視線入力のお絵描き：視線入力装置を使用して、塗り絵やミニゲームを行いました。
- ・視線入力でのポストカード作り：視線入力装置を使用して塗り絵を行い、事務局でその絵をポストカードにしてご本人にお渡ししました。
- ・スクラッチアート：葉を紙の下に入れ、鉛筆で擦り出すアート活動を実施しました。
- ・ハーバリウム：ドライフラワーを空瓶の中に入れ、オイルを注入してオブジェを制作しました。
- ・クリスマスソングのピアノ演奏ゲーム：iPadのピアノ伴奏をタッチして曲を演奏するゲームを実施しました。
- ・Tシャツ染め：布用の着色料を使って、真っ白なTシャツに絵を描いたり、色を付けたりする制作活動をしました。
- ・iPadでタッチ相撲対戦：iPadをタッチすることで相撲対戦ができるゲームを実施しました。
- ・オープンカレッジの大学ゼミ模擬体験：愛媛大学教育学部の授業に参加し、大学の様子を体験しました。



視線入力装置を使用した塗り絵



本事業で得られた成果

視野を広げ、多くの人とコミュニケーションする機会が増加

重症心身障害のある方は、特別支援学校や放課後等デイサービスといった施設以外の社会とのつながりが少ないのが現状です。「訪問カレッジ」では、利用者のご自宅等のご希望の場所に訪問し、芸術文化活動・ワークショップ等を行うことで、部屋の外の世界や感動する体験などを利用者に体感してもらってきました。多くの利用者は、笑顔を見せたり、発声したりして、訪問中に使っている道具に興味を示しました。訪問するボランティアスタッフは、特別支援学校教

員や退職後の精神科の看護師、保育士、福祉施設のスタッフ等、専門知識のあるスタッフから特別支援学校教員を目指す大学生まで、幅広いスタッフがいます。そのため、利用者は年齢、性別、所属等、幅広いスタッフと交流することができ、毎度の訪問カレッジで良い刺激を受けることができました。また、毎回訪問後には、スタッフ同士で今回の反省点や次回以降の支援計画等について打ち合わせを行いました。困ったことやわからなかったことがあれば、訪問教育や

特別支援教育専門の大学教員から助言をもらいながら、より良い学びの場となるよう取り組んでいます。



幅広い専門性のあるスタッフが関わっています

十人十色!「私」の感動を作っていきます!

訪問カレッジでは、重症心身障害のある利用者が創作に取り組めるよう、さまざまな工夫をしています。ゆ



指筆で染めたオリジナルTシャツ

石ビーズを使って、ハーバリウムを作りました。初めての制作ですが、とても丁寧に綺麗にできました。身体障害で普段は芸術創作に苦手意識を抱えた方でしたが、完成品を見て思わず「わ!かわいい」と喜ばれていました。その他にも、愛媛県障がい者 ICT サポートセンターと連携し、視線入力装置や入力スイッチ等を活用し、製作活動に取り組まれた利用者もいました。



はじめてのハーバリウム作り

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

本学では、文部科学省より「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」を受託し、特別支援学校等を卒業した重症心身障害者の生涯学習を支援する取り組みとして「訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学」を実施してきました。そのノウハウを活かし、重度重複障害のある方

が年齢を問わず学び続けられる仕組みづくりを模索しています。また、新設の「愛媛県障がい者 ICT サポートセンター」と連携し、利用者に対し、入力スイッチや視線入力装置等の ICT 機器を活用した取り組みを行いました。

Outline

事業概要

精神障がいのある人の表現として幻聴幻覚カードを活用したワークショップを継続的に実施し、障がいのある人とアーティストが協働する表現活動として、参加者個人に合わせたアウトプットを模索してきました。ワークショップの回数を重ねる毎に見学者を募り、見学者とともに幻聴幻覚台本を演じて、互いの理解を深めていきました。また、松山市内4カ所の精神障がい者施設等に通う精神障がい者の人たちと、美術家や絵を描く当事者が交流し、幻聴幻覚や妄想を絵や文字で表現しました。

本事業で実施した内容

精神障がい者との

幻聴幻覚カードを活用したワークショップ

開催日：2022年6月22日～2023年3月8日(全11回)
会場名：シアターねこ(愛媛県松山市緑町)
対象：精神障がい者、関係者及び一般
参加総数：126人／参加費：無料
アーティスト：有門正太郎(俳優、演出家・北九州在住)、
斉藤かおる(俳優)

- 実施内容

幻聴幻覚を絵と言葉で表現した幻聴幻覚カードを活用してワークショップを行いました。第7回から見学者を募り、幻聴幻覚カードの幻聴幻覚と当事者の会話を台本化したものをワークショップで発表しました。見学者は、市内の障がい者施設等に通う当事者や福祉関係者、学生や教育関係者です。幻聴幻覚の台本を見学の人たちと一緒に演じながら、相互理解を深めました。

【幻聴幻覚のヒアリング】

ヒアリング対象者：精神障がい者
ヒアリングチーム：富久千愛里(美術家)、和泉明子(デザイナー)、tawa(風のねこ利用者)

○第1回

開催日：2022年9月20日13:00-14:00
会場名：地域活動支援センターステップ(愛媛県松山市美沢町)
対象：精神障がい者1人、ヒアリング2人
協力：一般財団法人創精会 地域活動支援センターステップ

○第2回

開催日：2022年10月29日11:00-12:00
会場名：味酒心療内科(愛媛県松山市味酒町)
対象：精神障がい者1人、ヒアリング2人
協力：医療法人社団 味酒心療内科

○第3回

開催日：2022年12月23日・2023年2月21日それぞれ1時間程度

会場名：就労継続支援B型事業所風のねこ(愛媛県松山市緑町)
対象：精神障がい者2人、ヒアリング2人
協力：就労継続支援B型事業所風のねこ
○第4回
開催日：2023年3月10日14:00-15:30
会場名：就労継続支援B型事業所風のねこ(愛媛県松山市緑町)
対象：精神障がい者2人、ヒアリング2人
協力：社会福祉法人 さらりの森

- 実施内容

松山市内4カ所の精神障がい者施設等に通う精神障がい者の人たちと、美術家や絵を描く当事者が交流し、幻聴幻覚や妄想を絵や文字で表現するための聞き取りを行いました。

【幻聴幻覚カード及び幻聴幻覚や妄想の絵等作成】

開催日：2022年10月～2023年3月
対象：精神障がい者7人、
作画担当3人(美術家1人・当事者2人)
成果：幻聴幻覚カード作成16枚

- 実施内容

アーティストや当事者がヒアリングした幻聴幻覚を絵や文字、図などで表現し、幻聴幻覚カードを作成し、幻聴幻覚ワークショップで活用しました。

【幻聴幻覚の台本づくり】

開催日：2022年10月～2023年1月
対象：精神障がい者1人、アーティスト及びアーティストスタッフ
成果：4作品

- 実施内容

幻聴幻覚と当事者の会話を台詞化し、当事者と一緒に台本づくりを行いました。



本事業で得られた成果

ワークショップの継続で表現手法が広がる

幻聴幻覚カードづくりやワークショップを継続していると、幻聴幻覚と当事者の会話場面に会うことがあります。私たちからは、当事者の独り言のように見えることが、当事者にとっては幻聴幻覚と会話している、もしくは一方的に幻聴幻覚に言われていることに抗っている状態だったりします。今

年度は、幻聴幻覚と当事者のこのような会話を台詞化し、幻聴幻覚台本にしました。

幻聴幻覚台本は、ワークショップの中で会場の見学者と一緒に演劇的な表現として活用しています。見学しているときは、幻聴幻覚の体験を聞いているだけだったのが、一緒に表現す

ることによって、よりリアルに体験できるようになったという感想が寄せられています。見学者が幻聴幻覚の世界に出向いて、その世界の登場人物になることによって、互いに心と体を開いて共感する場に変容していきま

地元で当事者も含めた障がい者の表現活動に携わるチームづくり

幻聴幻覚カードは、当事者同士で話し合いながら、当事者が作画していきます。当事者同士でリアルな体験が語られていたことを考えると、今後も当事者チームが必要だということがわかりました。今後、当事者とアーティストが一緒に複数チームとなり、他施設に赴いて幻聴幻覚を表現する当事者を増やしていくことができます。今年度から、美術家がチームに参

加して、他施設に赴いて幻聴幻覚のヒアリングを実施しました。今までは当事者の幻聴幻覚世界にしか焦点があてられていませんでしたが、ヒアリングしたアーティストの感想も作画で表現しています。双方の視点に立った表現により、当事者やアーティストの人柄が表現できるようになりました。



幻聴幻覚ヒアリング



幻聴幻覚ワークショップ：見学者と台本を読む



幻聴幻覚カード 絵：富久千愛里

Point

●●●●● 本事業を実施する上で行った独自の工夫

当事者と幻聴幻覚の会話を台詞にして、幻聴幻覚カードを活用しながらワークショップを行いました。ワークショップ毎にアーティストやアドバイザー等とのプログラム会議を行い、参加者の個別性に配慮した取り組みになるよう綿密な打合せを行いました。そし

て、幻聴幻覚ワークショップを少しずつ公開し、障がいのある人への理解を深めました。地元新聞から取材を受けたり、当事者が地元のラジオ番組に継続的に出演し、幻聴幻覚ワークショップの活動を紹介しました。

Outline

事業概要

県内のそれぞれの場で実施されているダンス等の発表機会の提供を行うこと、舞台芸術の手法を用いてアウトリーチを行うこと、多様な人々が集い表現する場を充実させることにより、県内各所に点在する舞台芸術分野の活動や取り組みを活性化させ、県内の障がい者を中心とした社会的弱者である人々の表現活動を更に促す。一般県民に対しては、多様な価値観を共有しつつ、多様性を受け止める包摂的環境の醸成を推進していく。

本事業で実施した内容

PEOPLE ART PERFORMANCE

2022 特別公演

開催日：2022年12月18日(日)13:30開演
会場名：福岡県立ももち文化センター
料金：一般、前売 2,000 円、当日 2,500 円
18歳以下・障害者手帳をご提示の方と同伴者(1名)
前売 1,000 円、当日 1,500 円 他、団体割など
参加者：146 名

- 実施内容

福岡県内で行われている多様な背景を持つ方々との舞台芸術活動の発表の場として実施してきた本公演ですが、2022年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、参加団体の活動準備が十分に行える状況になかった為、特別公演として実施しました。これまで他の団体と共演という形でしか参加していなかったガムランチームの単独演奏や、県外からの出演団体招聘など、これまでにない新しい取り組みを行いました。

出演団体：

ガムランチーム GoOn
〔「社会福祉法人明日へ向かって」より〕、PD ダンス~パーフェクトダンス(パーキンソン病の方々のダンスグループ)、新人H ソケリッサ!(アオキ裕キ・路上生活者・元路上生活経験者からなるダンスカンパニー)

特別支援学校／
特別支援学級における演劇ワークショップ

- ①筑豊地区特別支援学校(全3回)
- ②福岡市内小学校特別支援学級(全7回)

- 実施内容

校長会等への働きかけの結果、ようやく筑豊地区の特別支援学校で演劇ワークショップを実施することが出来ました。継続実施の福岡市内小学校においては、これまでの取組が認められ、5回から7回へと実施回数が増え、内容も充実したものが出来ました。

多様な人たちとの表現活動

- ①放課後等デイサービスでのダンスワークショップ(全1回)
- ②就労移行支援事業所利用者との演劇ワークショップ(全1回)
- ③大人のための演劇体験講座(全1回)
- ④表現の面白さを体感するワークショップ(全9回)

- 実施内容

障がい者を主な対象としつつ、老若男女障がいの有無など多様な人が共に集う場を目指し、様々な切り口でワークショップを実施しました。



本事業で得られた成果

生きて表現することは、舞台の上も下も、
劇場の中も外もなく、全員に繋がっている。

これまで公演の観客層は出演者の家族・友人が主でしたが、今年度初めて駅貼り広告などに取り組むことで、この事業の存在を広く知ってもらうことができ、一般来場者が増えるなど、嬉しい変化がありました。公演の随所では客席参加型のワークショップを行うことで、舞台の上の彼らも客席に座っている私達も、共に生きて表現していることを実感してもらえたと感じており、来場者か

らの感想やアンケートにもそれらの声が多く聞かれました。これは、手話通訳や字幕投影があったことで、色々なサポートが必要な人も共に作品を楽しむ空間であることが言葉ではなく観客に伝わったことも一助となったと言えます。公演の他にも、特別支援学校や学級など、施設外へのアウトリーチも行いました。継続的に実施している特別支援学級では、これまでの実施を評価していた

だき、実施回数を5回から7回に増やすことができ、子ども達の日常にも、ワークショップの狙いに添った良い変化が見られるとの言葉をいただきました。

放課後等デイサービスで行ったアウトリーチでは、2年間笑わなかった児童が笑顔を見せ、そのことに支援員の方が感激して涙を流すなど、感動的な場面もありました。



草本利枝



草本利枝

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

当法人が社会包摂事業を始めたきっかけは2011年からのホームレス就労支援事業所内での演劇ワークショップですが、そこから長い時間をかけて、プログラム開発や効果、狙いを言語化してきました。最初の活動は民間の助成金により始めるきっかけをいただき、その後、事業内容を変えながら、今の活動

に繋がっています。現在は、市や県の文化施設の指定管理業務に携わる中で、実施場所など、よりフレキシブルに事業を組み立てられますが、これは文化芸術や社会包摂に詳しくない企業の方々との対話を続け、取り組みに共感や理解を得られたことで実現できています。



Outline

事業概要

オンラインの普及により月イチ PD ダンスワークショップの参加者は全国各地、海外在住者へと拡大しました。そこで、2022年度は2019年度からの活動をまとめた情報を発信するため、また、認知度を高めるために本事業専用のホームページを新設しました。サイト上では映像作品なども発信し、芸術活動としての側面をアピールすると共に、国内の他団体や医療関係者、海外とのネットワーク構築への活用も予定しています。また、ダンスの効果検証やPDダンスファシリテーターの指導者養成にも力を入れました。

本事業で実施した内容

『PDダンスファシリテーター養成講座』

開催日：2022年9月24日

会場名：福岡市内ダンススタジオ

対象：ダンス経験者のうちパーキンソン病患者と共に暮らす方々を対象としたダンス活動を、家族・仲間のグループ・福祉施設・ダンススタジオ等、お住まいの地域で広げていきたい方々。参加者は前日実施の「PDダンスカフェ」での坪井教授によるレクチャーに参加を必須とした。

オンライン参加者：7名

現地参加者数：6名

参加費：3,000円

-実施内容

福岡在住のダンスアーティストで、マークモーリスダンスグループ「Dance for PD®」指導者養成講座を修了しているマニシア氏を講師に迎え、現地参加者とZOOM参加者によるハイブリット形式で実施しました。当事者にもご参加いただき、意欲的な講座となりました。



PDダンスファシリテーター養成講座

『検証プログラム』

開催日：2022年10月29日～12月25日

会場：オンライン

(実施前後のインタビューは対面にて実施)

対象：福岡大学病院脳神経内科が公募して集まった希望者60名

-実施内容

オンラインでのダンス活動による効果を検証しました。毎週火曜の夜、ダンスグループとストレッチグループに分かれ、オンラインにて活動を実施しました。参加者は次の開催日までの1週間、自主練習動画を活用して日常的にダンスを行いながら体調や心境の変化などを日記に記録し、実施前後にはインタビューや測定を行い、その変化を検証しました。

『People Art Performance2022』出演

開催日：2022年12月18日

会場名：福岡県立ももち文化センター（大ホール）

対象：月イチPDダンスの参加者のうち希望者

オンライン参加者：8名

現地参加者数：6名

-実施内容

当法人が、毎年ももちパレスと共同主催で行っている舞台(PAP)に、月イチPDダンス参加者が出演しました。本番では現地参加者が舞台上にて、オンライン出演者がスクリーンにて、観客が客席にて参加することが出来る、公開ワークショップ形式の発表として大いに盛り上がりました。



本事業で得られた成果

コロナ禍効果と止まらない進化

オンラインでの参加が難しい方々が大学病院の勧めで「PDダンスカフェ」や「検証プログラム」に参加くださり、より多くの新規参加者がダンスに触れる機会が増えました。その中でも、福岡大学病院の多目的室で行っている「PDダンスカフェ」に2022年度初めて参加したことをきっかけに、その後福岡市内のダンススタジオで毎月行っている「月イチPDダンス」に参加し、さらには「ファシリテーター養成講座」への参加、舞台公演「People Art Performance」への

出演と、その情熱と勢いは止まることなく積極的に継続して参加している方がいます。その方は当初ステージではなく客席から参加と言われていましたが、当日はステージ上で見事に輝いていました。本番では、他にも海外在住の方や入院中の方、施設に入居されている方など多様な環境にある方々にもご出演いただき、オンラインの可能性を実感しました。すべてのきっかけとなっている「PDダンスカフェ」は、狙い通り新規参加者のための導入企画として十分に機

能しており、当事者はもちろん共に寄り添うご家族からも「横のつながりが出来た」と涙ながらの喜びの声を多くいただいています。



ホームページ開設

「あの頃を思い出した。
またステージに立てる日が来るなんて」

これまでもダンス活動の効果検証を実施しましたが、改めて福岡大学病院脳神経内科主導で「オンラインでのダンス活動」にフォーカスした効果検証プロジェクトが行われました。参加者にはタブレットを貸し出し、事前に丁寧な説明と練習会を繰り返し、ワークショップ当日も開始1時間前から2人体制でサポートすることで、参加者が安心してワークショップに参加できるように運営しました。

People Art Performance2022出演の様子/
撮影：草本利枝

サポートのききもあって、ほとんどがダンス初体験である中、自宅で生き生きとその身体を動かしていました。参加者は次の開催日までに自主練習動画を活用しながら、短期間でダンスの動きに慣れることが出来る仕組みで、積極的に質問も飛び交うなど楽しく取り組んでいる姿が見られました。そしてこの検証プロジェクトをきっかけにダンス経験者である参加者が月イチPDダンスワークショップにご参加いただくことになり、さらに



People Art Performance2022出演の様子

12月に行った舞台公演のステージでのご出演も果たされました。その後、福岡のメンバーとして毎月現地にてダンスに参加し、LINEグループにも加わり、「あの頃を思い出した。またステージに立てる日が来るなんて」と感激の言葉をいただきました。

Point

💡 本事業を実施する上で行った独自の工夫

新規の参加者を得ることや、活動の周知において、協力団体である福岡大学病院は大きな存在でした。病気について詳しくない人が「ダンスしませんか?」と突然呼びかけたところで、当事者にはなかなかピンと来ませんが、信頼している先生方から勧められ

たり、仲間から紹介されたりすると参加してみようかな、という気になるようです。また、ワークショップも改善を重ね、本番ではステージ出演、オンライン出演に加え、客席からでも参加可能な形式を取り、自分のペースに合った参加が可能となりました。

事業名 音楽体験を通じた不登校児童生徒の社会的接点を作る 音楽プログラムの開発と実践、及びその検証

団体名 一般社団法人楽友協会おきなわ

所在地：沖縄県那覇市

団体URL: <https://www.facebook.com/people/一般社団法人-楽友協会おきなわ/100063571204178/>



Outline

事業概要

楽友協会おきなわでは、さまざまな理由で学校に行けない子どもたちや、就労継続支援 B 型のわかものたちと音楽ワークショップを通して交流を続けています。ワークショップでは、参加者の興味関心を引き出し、“やってみよう”の具体化を大切に活動し、集大成として発表会を開催しました。活動を通して、仲間や支援員・音楽家と協力して表現する経験を重ねることで、コミュニケーション能力や自尊感情の向上を目指しています。また、仮想空間でのワークショップ実施など、オンラインを活かした新しい手法にも取り組みました。

本事業で実施した内容

音楽ワークショップ&個別楽器指導

開催日：2022年7月19日～3月7日(計60回)

会場名：那覇 kukulu、うるま kukulu、b&gからふる田場、コミュット!、宮森幼稚園跡

対象：那覇 kukulu、うるま kukulu、b&gからふる田場、コミュット!の各居場所に通所する子どもたち、わかものたち、支援員

参加人数：各回 3名～30名程度

- 実施内容

演奏してみたい楽曲をその都度、丁寧に聞き取りし、ソロやアンサンブルで楽器に親しみました。リクエストに応じ、個別に楽器の指導も行いました。

1day 音楽合宿

開催日：2022年9月25日

会場名：hamachū / ハマチュー (うるま市浜比嘉島 旧浜中学校)

対象：那覇 kukulu、うるま kukulu、b&gからふる田場、コミュット!の各居場所に通所する子どもたち、わかものたち、支援員(他に県内音楽家も参加)

参加人数：60名程度

- 実施内容

音楽ワークショップを行っている全事業所が集まっている合同ワークショップを実施しました。アイスブレイクなど、交流の時間も持ち、それぞれがこれまでに練習した成果を発表したり、事業所の垣根を越えて一緒に練習し、アンサンブル演奏を披露するミニ演奏会も開催しました。

音楽発表会～ゆかいな音楽家と、ときどきひきこもり 2023

開催日：2023年2月18日

会場名：なは一と大スタジオ※有観客 / オンライン配信

出演者：那覇 kukulu、うるま kukulu、b&gからふる田場、コミュット!の各居場所に通所する子どもたち、わかものたち、支援員、鶴見幸代(ワークショップファシリテーター/作曲家)、佐野周作(ギター奏者)、川崎馨子(打楽器奏者)、楽友協会おきなわの演奏家たち

参加人数：82名 / 配信視聴回数：551回

- 実施内容

音楽ワークショップを通して交流した事業所、子どもたち・わかものたち、支援員さんなど、6歳から50代まで、音楽を中心とした表現活動を発表しました。今年度はアンサンブル(合奏)のプログラムが充実し、それぞれの事業所の特色をいかした発表が披露され、小学生中心の居場所では、楽曲のアンサンブルは支援員と上級生を中心に、他、歌詞に合わせた手話ダンスを披露する子どもや、音楽に合わせて手作り打楽器を演奏する子ども、低学年の子どもたちは縄跳びやけん玉で参加しました。初めての取り組みとしては、k-pop好きな子どもたちによるダンスの発表がありました。本事業は音楽ワークショップを通しての交流が主ですが、発表会があることで「好きな楽曲のダンスに取り組みたい」と、これまで居場所に通うことも難しかった子どもたちが初めて能動的に意見を伝え、初めてダンスに挑戦し、リハーサルのスケジュールを組み、本番に向けて練習を重ね、人前で披露しました。



本事業で得られた成果

やってみよう!から「出来る私」へ

2022年度で事業の5年目を迎えることで、音楽発表会が毎年定期開催されるという認識が各事業所や子どもたちの間に浸透しており、楽器の練習が自主的に行われる、やってみよう!という楽曲があるなど、前向きな姿勢が多く見られるようになってきました。また、積極的に楽器の演奏を楽しむ子どもや支援員が増えたことで、新たに入所した子どもたちも、「この楽器をやってみよう!」「この曲なら弾け

ます」など、楽器の演奏に参加しやすい雰囲気を作られています。ひきこもり傾向のある子どもたちの特性として、「飽き性」「継続的に物事に取り組むのが苦手」という側面は特に珍しいものではありません。その原因として「すぐに結果が出ないと不安になる」「やっぱり自分にはできないかも」など、自分自身に対する不安や自尊感情の低さが主要因と考えられますが、1つの物事にじっくりと取り

組む集中力、継続性を、楽器の演奏を通して体感し、「出来る私」に出会い、自己肯定感を育むことで、楽器の習得のみならず、今後、様々な生活における場面で生きる力として役立つことが期待されます。

一緒に奏でるハーモニーを通じた他者とのコミュニケーション

楽器の演奏や歌唱は一人でも楽しめますが、他の人と一緒にタイミングや呼吸を合わせて奏でることで様々な音が混ざりあい、豊かなハーモニーを創る喜びは格別です。不登校やひきこもり傾向のある子どもたちの中には、“イジメ”を受けた経験などを抱え、他者とのコミュニケーションに苦手意識や不安を抱えている子どもたちも多くいますが、楽器(音楽)を紹介するこ

とで、自然に会話が生まれ、一緒に協力する経験を積み重ねることができ、2022年度は、事業所間の地理的環境(車で45分ほどの距離)も乗り越えて異年齢・異なる事業所メンバーとのアンサンブルが生まれ、積極的なコミュニケーションがみられました。また、ある居場所では、中国生まれで日本語でのコミュニケーションが難しい子どもが、発表会で舞台の観

劇や出演を通して、ノンヴァーバルでも支援員や子どもたちと交流が図られたと報告があり、音楽の非言語コミュニケーションの可能性を感じました。



発表会の様子がテレビで放映されました



三線で洋楽に挑戦!



リハーサルで入念に打ち合わせ



手話やダンスも一緒にしたよ

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

協力団体支援員と密に連絡を取り合い、相手の状況を把握した上で一緒に計画を立てて行くことが肝要です。居場所に通う子どもたちはデリケートで体調も変化しやすい子どもが多いため、状況の把握に努め、常に柔軟な対応が必要です。また、支援員にもワー

クショップの参加を促し、一緒に楽器の習得をしてもらい、音楽家不在時にサポートしてもらえる仕組みづくりが重要です。オンラインワークショップは、ひきこもり傾向が強く、居場所でもリアル参加が難しい子どもたちへのアプローチが有効な場合があります。

Outline

事業概要

障害のある人とその家族、関係者が安心してオーケストラコンサートを楽しめる環境づくりを目的とし、「ゆいまるミュージックプロジェクト」を立ち上げました。メンバーは、音楽や福祉など各分野の専門家、障害当事者らによって構成され、その実践の場として「美(ちゅ)らサウンズコンサート」を開催しました。4年目となる2022年度は、有観客の公演を自治体の共催を得て実施し、公演会場をコンサートホールとしたのは今回が初の試みとなりました。

本事業で実施した内容

「ゆいまるミュージックプロジェクト」会議

開催日：2022年7月3日、11月27日
2023年1月15日

会場名：Zoom(オンライン開催)

対象：「ゆいまるミュージックプロジェクト」メンバー、冊子作成担当者、評価調査担当者

参加人数：延 42名

- 実施内容

コンサート前の会議(2回)では、過去の公演を踏まえた改善箇所や新たな取り組み、公演内容、周知方法や評価指標などを協議しました。今回は、初めてのコンサートホールでの開催となるため、これまでと異なる環境における課題や懸念、対応策を話し合い、公演後の会議では、振り返りと評価、冊子内容、次回へ向けての方針を協議しました。



プロジェクト会議の様子

「美らサウンズコンサート2022

in うるま市」開催

開催日：2022年12月3日

会場名：うるま市きむたかホール

対象：全ての障害・難病のある方、ご家族・介護の方等、

一般の方
(※申込時には障害のある方や関係者を優先)
募集定員：300名／参加人数：来場者数 248名、
出演者 49名、関係スタッフ約 60名
入場料：無料

- 実施内容

「ゆいまるミュージックプロジェクト」での協議内容を活かしたコンサート運営を行いました。きむたかホールのステージと客席がフラットになる舞台転換を活用して、オーケストラの目の前に、フリースペースと車椅子・ストレッチャー席の確保を実現しました。新型コロナウイルス感染拡大防止策として、2021年度と同様、入場者数を定員の半分に以下に設定し、コロナ禍にあっても安心して来場いただけるように手指消毒や検温の徹底などに加えて、琉球フィル独自に新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドラインを作成しました。また、事前予約の徹底とQRコードによる密を回避する受付システムの導入、障害特性に配慮してマスクを着用できない感覚過敏の方を対象とした距離を取った鑑賞スペースの設置、看護師(プロボノ)の配置、観客の鑑賞場所の把握などに取り組みました。

「ジュニアオーケストラの子どもたちの参加

参加人数：21名
公演前のウェルカム演奏(15分)、会場でのボランティア(会場案内、受付誘導など)



ウェルカム演奏



本事業で得られた成果

選曲から会場づくりまでバリアフリー化を実現

音楽療法士のアドバイスによる選曲・曲順、色覚障害のある人にもわかりやすいチラシやポスターの色使い、プログラムに読み上げアプリ用のテキストを掲載、手話通訳、UDトークの活用、ゾーニングの工夫(聴覚

障害のある人のためのエリア、自由な姿勢で鑑賞できるフリースペース、周りの目を気にせず鑑賞できるスペースなど)、補助犬の入場可、演奏中の出入りや歓声・拍手の可、障害のある人の反応について事前に演

奏者へ周知などを行いました。さらに、コンサートの途中には音楽療法士と打楽器奏者によるリズム遊びを行い、体をほぐすコーナーを設けたことにより後半もリラックスして鑑賞していました。

開催地域等との連携

4年目となる本事業では、開催地域の教育委員会や社会福祉協議会等との連携によって、会場や施設の提供、公演の周知、ボランティアの募集協力等を受けました。開催地の教育委員会担当者を「プロジェクトメンバー」に迎え、バリアフリー化改装工事を実施したホールでの開催の提案を受け、本事業初のホールでの開催が実現しました。また、地元の高

校生や大学生、一般の若い世代から熟年世代にわたり多くの方がボランティアとして参加しました。ボランティアは、統括、リーダー、各担当と体制づくりを行い、ボランティア統括には「ゆいまるミュージックプロジェクト」のメンバーの一人が関わっています。そのメンバーのネットワークを通じて初年度から継続して参加している方も多く、これまでの経験から役割

分担(会場設営、受付周り、体調確認、会場案内、駐車場等)の内容と注意点を把握しているため、事務局とスムーズな連携が行えました。また、今回初めての開催地にて、新たに地元の方にもボランティアリーダーをお願いし、駐車場案内等、来場者への対応においても、円滑な様子が見られ非常に心強さを感じました。

これまでに得られたノウハウを他地域でも活用できるように

地域の福祉関係者やオーケストラなど、さまざまな立場の方が障害者を対象としたコンサートを開催できるように、第1回目の公演からコンサートのノウハウなどをまとめた冊子を作成し、全国の関連団体に配布を行ってきました。2022年度は、いくつかのプロオーケストラや文化団体からコロナ禍でのバリアフリーコンサートの開き方について問い合わせがあり、少しずつではあるがその効果が現れ

てきています。また、関西のホールでの地域連携事業例発表に招かれ、全国共通の課題における事例として、また、ホールのバリアフリー化改装工事の活用事例としても、公表する場を得られました。



リラックスタイム



マットスペース

Point

本事業を実施する上で行った独自の工夫

「ゆいまるミュージックプロジェクト」メンバーのネットワークを活かし、開催地域の自治体や住民、福祉団体等と連携することができました。特に2022年度は初めてのホール開催が実現し、より生演奏の醍醐味をお客様に味わっていただくことが可

能となりました。コンサート実施においては、障害当事者や家族、関係者などからの意見を参考に、障害の特性に合わせたゾーニングや鑑賞のしやすさを考慮した会場設営を工夫しました。



Agency for Cultural Affairs, Government of Japan